

東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

—3—

福岡県京都郡みやこ町カワラケ田遺跡2次調査1（I・II区）

2012

九州歴史資料館



1. カワラケ田遺跡2次調査地遠景（東から）



2. I区西側全景（真上から）



3. II区西側全景（真上から）



4. II区東側全景（真上から）



5. カワラケ田遺跡2次調査出土 巡方

序

福岡県では、平成19年度から西日本高速道路株式会社の委託を受けて、東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施してきました。本報告書は平成20年度から23年度にかけて行った、京都郡みやこ町皆見・下原に所在するカワラケ田遺跡2次調査の記録で、本遺跡の調査報告書の第1冊目となります。

当遺跡では祓川左岸の丘陵上に立地しており、近隣には県指定史跡である「豊前国府跡」があります。今回の調査では、7世紀から8世紀頃の掘立柱建物跡、竪穴住居跡などを確認し、その時期の土器以外にも巡方片が出土しました。この発掘調査により皆見・下原地区の古墳時代後期から奈良時代にかけての歴史を復元する上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成24年3月31日

九州歴史資料館

館長 西谷 正

例言

1. 本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県京都郡みやこ町皆見・下原に所在するカワラケ田遺跡2次調査の記録である。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第3集にあたる。
2. 発掘調査は西日本高速道路株式会社の委託を受けて、福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施し、整理報告は同社の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。
3. 本遺跡は、東九州自動車道福岡工事事務所管内の第39・40・41地点にあたる。
4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は、遺構を坂本真一・海出淳平が、遺物の撮影は北岡伸一が行った。空中写真の撮影は九州航空株式会社・東亜航空技研株式会社に委託し、ラジコンヘリによる撮影を行った。
5. 本書に掲載した図は、遺構を坂本・海出が行い、佐山彰子・城戸圭子・加来ふくえが補助した。
6. 出土遺物の整理作業は、九州歴史資料館にて小池史哲の指導の下に実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真の記録類は、九州歴史資料館に保管した。
8. 本書に使用した分布図は、国土地理院発行の1/50,000「行橋・簗島・中津・田川」と1/25,000「行橋・簗島・豊前本庄・椎田」の地形図を改変したものである。本書で使用する方位は世界測地系による座標北である。
9. 平成23年度から福岡県教育庁総務部文化財保護課の文化財発掘調査業務は、組織改編のため九州歴史資料館に移管された。
10. 遺跡名はみやこ町教育委員会と協議をして、カワラケ田遺跡2次調査と変更した。
11. 今回の整理・報告は下記のような遺跡名の変更に伴い、カワラケ田遺跡2次調査のⅠ区とⅡ区について行った。

○遺跡名の変更

| 調査 | 報告 |
|---------------|---------------------------|
| 下原七反田遺跡Ⅰ区 | カワラケ田遺跡2次調査Ⅰ区（今回、報告） |
| 下原七反田遺跡Ⅱ区 | ハッ重遺跡2次調査（平成24年度報告予定） |
| 下原七反田遺跡Ⅲ区 | カワラケ田遺跡2次調査Ⅲ区（平成24年度報告予定） |
| 下原七反田遺跡Ⅳ区 | カワラケ田遺跡2次調査Ⅳ区（平成25年度報告予定） |
| カワラケ田遺跡2次調査Ⅴ区 | カワラケ田遺跡2次調査Ⅴ区（平成24年度報告予定） |
| カワラケ田遺跡2次調査Ⅵ区 | カワラケ田遺跡2次調査Ⅵ区（平成24年度報告予定） |
| カワラケ田遺跡2次調査Ⅶ区 | カワラケ田遺跡2次調査Ⅱ区（今回、報告） |

※また、Ⅳ区で発見された皆見大塚古墳については、古墳のみその名称を使用した。また遺構番号については、ハッ重遺跡を除いてカワラケ田遺跡で一連の番号を通してしている。

12. 本書の執筆はⅡおよびⅢ-9については藤島志考、第2図と第1表は城門義廣、その他の執筆・編集は坂本が行った。

本文目次

| | | |
|-----|----------------------|----|
| I | はじめに | 1 |
| | 1. 調査に至る経緯と経過 | 1 |
| | 2. 調査・報告の組織 | 1 |
| II | 位置と環境 | 5 |
| III | 発掘調査の記録 | 9 |
| | 1. 調査の概要 | 9 |
| | 2. 掘立柱建物跡 | 9 |
| | 3. 竪穴住居跡 | 43 |
| | 4. 土坑 | 48 |
| | 5. 溝 | 55 |
| | 6. その他の遺構 | 57 |
| | 7. 谷 | 61 |
| | 8. 近世墓 | 65 |
| | 9. 特殊遺物（土製品・石製品・鉄製品） | 76 |
| IV | まとめ | 78 |

図版目次

| | |
|-----|---------------------------|
| 図版1 | 1. カワラケ田遺跡2次調査地遠景（手前 東から） |
| | 2. カワラケ田遺跡2次調査地遠景（中央 西から） |
| 図版2 | 3. I区東側全景（真上から） |
| 図版3 | 4. I区西側全景（真上から） |
| 図版3 | 5. I区西側全景1（真上から） |
| 図版4 | 6. I区西側全景2（真上から） |
| 図版4 | 7. II区西側全景（真上から） |
| 図版5 | 8. II区東側全景（真上から） |
| 図版5 | 9. 1号掘立柱建物跡（真上から） |
| | 10. 2・3・5・29号掘立柱建物跡（南から） |
| | 11. 4号掘立柱建物跡（南から） |
| 図版6 | 12. 5・29号掘立柱建物跡（南から） |
| | 13. 6号掘立柱建物跡（南から） |
| | 14. 7・8号掘立柱建物跡（北から） |
| 図版7 | 15. 9・10・11号掘立柱建物跡（北から） |
| | 16. 12号掘立柱建物跡（南から） |
| | 17. 14号掘立柱建物跡（南から） |
| 図版8 | 18. 15号掘立柱建物跡（南から） |
| | 19. 16・17号掘立柱建物跡（南から） |
| | 20. 18号掘立柱建物跡（南から） |

| | |
|------|---|
| 図版9 | 21. 19号掘立柱建物跡(P480 南東から) 22. 21・22号掘立柱建物跡(南から) 23. 23・24号掘立柱建物跡(南から) |
| 図版10 | 24. 25号掘立柱建物跡(南から) 25. 26・27号掘立柱建物跡(北から) 26. 28号掘立柱建物跡(南から) |
| 図版11 | 27. 50号掘立柱建物跡(南西から) 28. 51・52号掘立柱建物跡(南から) 29. 53号掘立柱建物跡(北から) 30. 54・55号掘立柱建物跡(南から) |
| 図版12 | 31. 9号竪穴住居跡(東から) 32. 焼土検出状況(東から) 33. 10号竪穴住居跡(東から) |
| 図版13 | 34. 10号竪穴住居跡竈(東から) 35. 11号竪穴住居跡(東から) 36. 11号竪穴住居跡竈(東から) |
| 図版14 | 37. 1号土坑(北から) 38. 2号土坑(北から) 39. 4号土坑(西から) |
| 図版15 | 40. 5号土坑(南東から) 41. 6号土坑(南から) 42. 8号土坑(南から) |
| 図版16 | 43. 9号土坑(南から) 44. 10号土坑(南から) 45. 11・16号土坑(南から) |
| 図版17 | 46. 12号土坑(西から) 47. 13・14号土坑(南から) 48. 15号土坑(西から) |
| 図版18 | 49. 63号土坑(東から) 50. 64号土坑(北から) 51. 65号土坑(西から) 52. 66号土坑(南から) |
| 図版19 | 53. 67号土坑(西から) 54. 68号土坑(南から) 55. 69号土坑(南から) |
| 図版20 | 56. 5号溝(東から) 57. 5(21)・6(22)号溝(西から) 58. 5号溝土器出土状況(東から) |
| 図版21 | 59. 波板状遺構(西から) 60. P21(南から) 61. P22(北から) 62. P23(南から) 63. P384(東から) 64. P396(西から) |
| 図版22 | 65. 12号近世墓(南から) 66. 16号近世墓(西から) 67. 17号近世墓(西から) 68. 21号近世墓(北から) 69. 23号近世墓(南から) 70. 24号近世墓(南から) 71. 48・49号近世墓(東から) |
| 図版23 | カワラケ田遺跡2次調査出土土器 |
| 図版24 | カワラケ田遺跡2次調査出土遺物 |

挿図目次

| | | |
|-----|-------------------------------|---|
| 第1図 | カワラケ田遺跡(みやこ町)の位置…………… | 1 |
| 第2図 | 東九州自動車道調査地点(1/100,000)…………… | 3 |
| 第3図 | カワラケ田遺跡周辺分布地図(1/25,000)…………… | 6 |
| 第4図 | カワラケ田遺跡2次調査区割り図(1/1,500)…………… | 8 |

| | | |
|------|--|----|
| 第5図 | 1・2号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 11 |
| 第6図 | 3・4号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 12 |
| 第7図 | 5号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/30・1/3) | 13 |
| 第8図 | 6・8号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 15 |
| 第9図 | 7号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 16 |
| 第10図 | 9号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 17 |
| 第11図 | 10号掘立柱建物跡実測図 (1/60) | 19 |
| 第12図 | 11号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 20 |
| 第13図 | 12号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 21 |
| 第14図 | 14・15号掘立柱建物跡実測図 (1/60) | 22 |
| 第15図 | 14・15号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3) | 23 |
| 第16図 | 16号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 24 |
| 第17図 | 17号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 25 |
| 第18図 | 18号掘立柱建物跡および 18・19号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/60・1/3) | 27 |
| 第19図 | 19号掘立柱建物跡実測図 (1/60) | 28 |
| 第20図 | 20号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 29 |
| 第21図 | 21・22号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 30 |
| 第22図 | 23号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 31 |
| 第23図 | 24号掘立柱建物跡実測図 (1/60) | 32 |
| 第24図 | 25号掘立柱建物跡実測図 (1/60) | 33 |
| 第25図 | 26・27号掘立柱建物跡実測図 (1/60) | 34 |
| 第26図 | 26・27号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3) | 35 |
| 第27図 | 28号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 35 |
| 第28図 | 29号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 36 |
| 第29図 | 50・53号掘立柱建物跡実測図 (1/60) | 38 |
| 第30図 | 51号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 39 |
| 第31図 | 52号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3) | 40 |
| 第32図 | 54号掘立柱建物跡実測図 (1/60) | 41 |
| 第33図 | 55・56号掘立柱建物跡実測図 (1/60) | 42 |
| 第34図 | 9号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/60・1/30・1/3) | 44 |
| 第35図 | 10号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/60・1/30・1/3) | 45 |
| 第36図 | 11号竪穴住居跡実測図 (1/60・1/30) | 46 |
| 第37図 | 11号竪穴住居跡出土土器実測図 (1/3) | 47 |
| 第38図 | 土坑実測図1 (1/45・1/30) | 49 |
| 第39図 | 土坑実測図2および出土土器実測図 1 (1/45・1/30・1/15・1/3) | 51 |
| 第40図 | 土坑実測図3 (1/45・1/30) | 53 |
| 第41図 | 土坑出土土器実測図2 (1/3) | 54 |
| 第42図 | 5・6号溝および出土土器実測図 (1/30・1/3) | 56 |

| | | |
|------|--|----|
| 第43図 | 波板状遺構・ピットおよび波板状遺構出土土器実測図 (1/30・1/15・1/3) … | 59 |
| 第44図 | ピット出土遺物実測図 (1/3) …………… | 60 |
| 第45図 | 巡方実測図 (1/2) …………… | 61 |
| 第46図 | 谷土層実測図1 (1/60) …………… | 62 |
| 第47図 | 谷土層実測図2 (1/60) …………… | 63 |
| 第48図 | 谷および遺構検出時出土遺物実測図 (1/3) …………… | 64 |
| 第49図 | 近世墓実測図1 (1/30) …………… | 67 |
| 第50図 | 近世墓実測図2 (1/30) …………… | 69 |
| 第51図 | 近世墓実測図3 (1/30) …………… | 71 |
| 第52図 | 近世墓実測図4 (1/30) …………… | 75 |
| 第53図 | 近世墓出土遺物実測図 (1/3・1/2/・1/1) …………… | 76 |
| 第54図 | 土製品・石製品・鉄製品実測図 (1/3・2/3・1/2) …………… | 77 |
| 第55図 | I・II区主要遺構変遷図 (1/600) …………… | 79 |

付図 カワラケ田遺跡2次調査I・II区全体図 (1/300)

| | | |
|-----|-------------------------|---|
| 第1表 | 東九州自動車道関係発掘調査地点一覧 …………… | 4 |
|-----|-------------------------|---|



作業風景

I はじめに

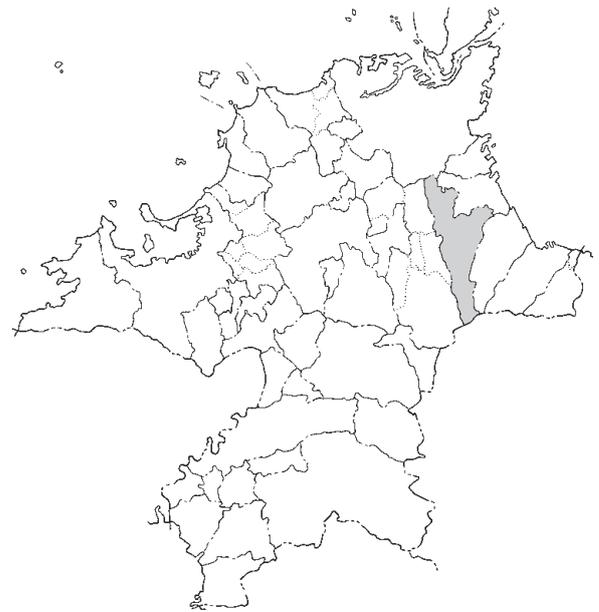
1) 調査に至る経緯と経過

カワラケ田遺跡2次調査は、京都郡みやこ町菅見・下原に所在し、東九州自動車道建設に伴い発掘調査をした遺跡である。

東九州自動車道とは、福岡県北九州市から大分県、宮崎県、鹿児島県鹿児島市までの東九州の都市を繋ぐ総延長436kmの高速道路である。

福岡県内の東九州自動車道建設に伴う埋蔵文化財の有無については、平成9年12月に日本道路公団九州支社（現、西日本高速道路株式会社九州支社）から照会があった。これに対して教育庁総務部文化財保護課では、苅田 IC 予定地内に平成12年10月と13年6・7月に確認調査を行った。確認調査の結果、埋蔵文化財が発見されたことから、苅田 IC 予定地内の発掘調査を平成13年9月12日から14年3月29日の間実施し、東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告（1）雨窪遺跡群で報告を行った。その後の詳細な経緯については、平成23年度報告の東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告（2）延永ヤヨミ園遺跡で報告している。

今回、報告するカワラケ田遺跡2次調査は、東九州自動車道の豊津 IC 予定地内に平成20年3月25・26日に確認調査を行った。確認調査の結果、埋蔵文化財が発見されたことから福岡県九州歴史資料館（平成22年度までは、教育庁総務部文化財保護課が担当）では、西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所と協議を行い、平成20年10月3日から平成23年9月7日の約3年間に渡って豊津 IC 予定地内の発掘調査を実施した。



第1図 カワラケ田遺跡（みやこ町）の位置

2) 調査・報告の組織

平成20～23年度の調査・報告に関わる西日本高速道路株式会社九州支社と福岡県教育委員会の関係者は以下のとおりである。

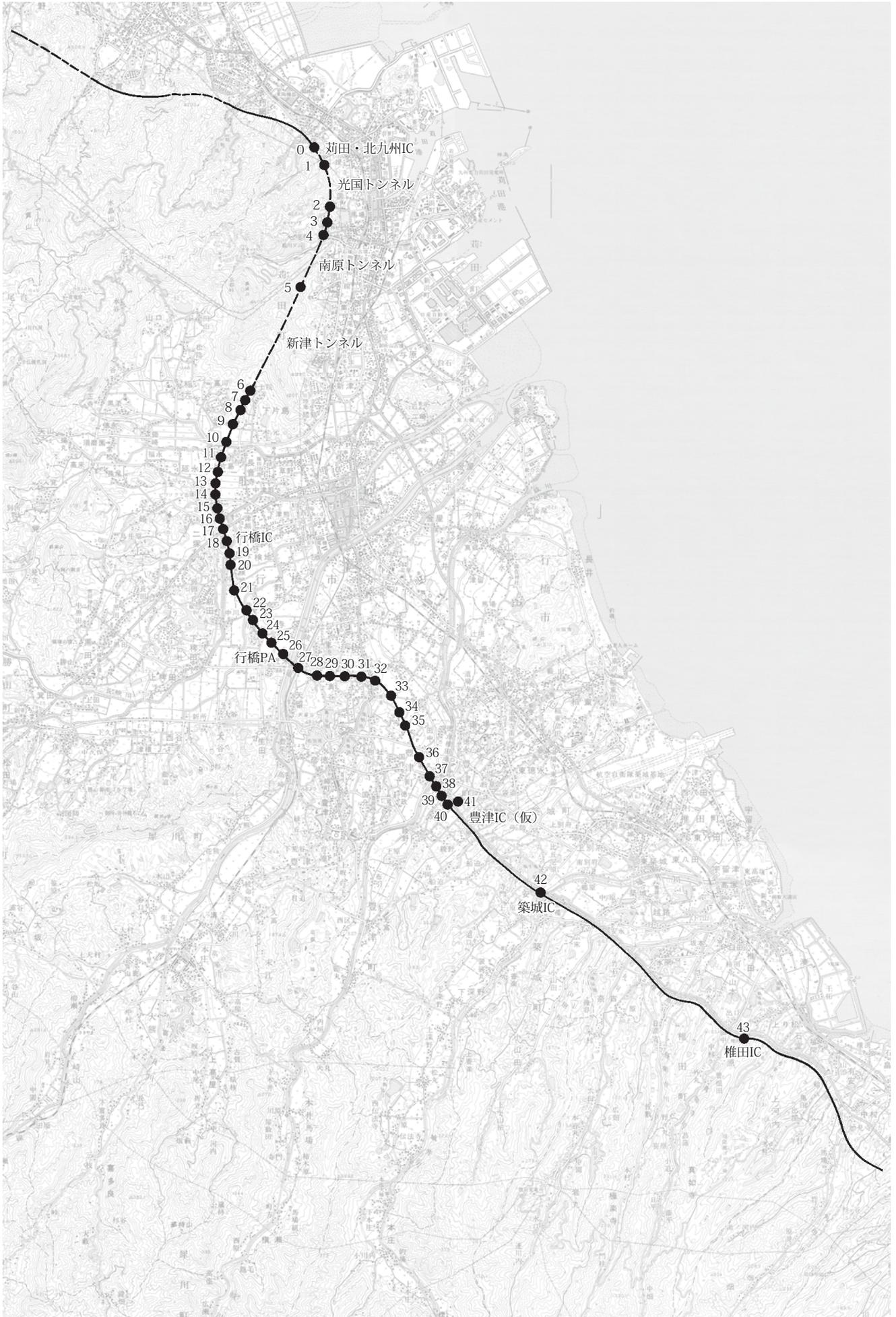
西日本高速道路株式会社九州支社

| | 平成20年度 | 平成21年度 | 平成22年度 | 平成23年度 |
|----------|----------------------------|-----------------------------|----------------------------|----------------------------|
| 九州支社長 | 久保昌紀 | 久保昌紀 | 久保昌紀（～9.30） 本間清輔（10.1～） | 本間清輔 |
| 福岡工事事務所長 | 竹國一也 福田美文（10.1～） | 福田美文 | 福田美文 | 中菌明広 |
| 副所長（技術） | 高尾英治 | 高尾英治（～9.30） 岩尾 泉（8.1～） | 岩尾 泉（～9.30） 入杜壮太（4.1～） | 入江壮太 今井栄蔵（4.1～） |
| 同（事務） | 塚本國弘（～9.30） 原野安博（10.1～） | 原野安博 | 原野安博 | 原野安博 |
| 総務課長 | 白川雄二 | 白川雄二（9.30～） 江口正秋（10.1～） | 江口正秋 | 江口正秋 |
| 工務課長 | 大久保良和 | 大久保良和（9.30～） 石塚 純（10.1～） | 石塚 純 | 石塚 純（～9.30） 豎山哲二（10.1～） |

福岡県教育委員会

| | 平成20年度 調査 | 平成21年度 調査 | 平成22年度 調査 |
|----------------|--------------|--------------|--------------|
| 総括 | | | |
| 教育長 | 森山良一 | 森山良一 | 杉光 誠 |
| 教育次長 | 檜崎洋二郎 | 亀岡 靖 | 荒巻俊彦 |
| 総務部長 | 荒巻俊彦 | 荒巻俊彦 | 今田義雄 |
| 文化財保護課 | | | |
| 文化財保護課長 | 磯村幸男 (本副理事) | 平川昌弘 | 平川昌弘 |
| 副課長 | 池邊元明 | 池邊元明 | 伊崎俊秋 |
| 参事兼課長補佐 | 小池史哲 | 小池史哲 | 小池史哲 |
| 管理係長 | 富永育夫 | 富永育夫 | 富永育夫 |
| 主任主事 | 近藤一崇 | 近藤一崇 | 仲野洋輔 |
| 調査第一係長 | 小田和利 | 吉村靖徳 | 吉村靖徳 |
| 調査第二係長 | 飛野博文 | 飛野博文 | 飛野博文 |
| 主任技師 (調査担当) | 坂本真一 | 坂本真一 | 坂本真一 |
| 技師 | 城門義廣 | | |
| 臨時職員 | | 藤島志考 | 宮田 剛 海出淳平 |
| | 平成23年度 報告 | | |
| 総括 | | | |
| 教育長 | 杉光 誠 | | |
| 教育次長 | 荒巻俊彦 | | |
| 総務部長 | 今田義雄 | | |
| 九州歴史資料館 | | | |
| 館長 | 西谷 正 | | |
| 副館長 | 南里正美 | | |
| 総務室長 | 圓城寺紀子 | | |
| 事務主査 | 塩塚孝憲 | | |
| 主任主事 | 近藤一崇 | | |
| 文化財調査室長 | 飛野博文 | | |
| 文化財調査班長 | 小川泰樹 | | |
| 参事補佐 (整理担当) | 小池史哲 | | |
| 主任技師 (報告書作成) | 坂本真一 | | |
| 臨時職員 | 藤島志考 | | |

なお、調査及び報告書作成に当たって発掘作業員の方々及びみやこ町教育委員会、地元の渡邊哲敏・松田政明下原区長に多大な御協力を得ました。記して感謝します。



第2図 東九州自動車道調査地点 (1/100,000)

第1表 東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

| 地点 | 工事件名 | 遺跡名 | 所在地 | 対象面積 (㎡) | 試掘年度 | 調査面積 (㎡) | 調査年度 | 報告年度 | 既刊報告 書番号 | 備考 |
|----|------|--------------------|-----------------|-------------|-----------|-------------|--------|------|-------------|---------------------|
| 0 | 苅田IC | 雨窪遺跡群 | 京都府苅田町大字雨窪 | | H12・13 | 4000 | H13・14 | H15 | 1集 | |
| 1 | 福岡 | | 京都府苅田町大字雨窪 | 1700 | H22 | | | | | 遺跡なし |
| 2 | 福岡 | | 京都府苅田町大字提 | 4500 | H21 | | | | | |
| 3 | 福岡 | 馬場遺跡群 | 京都府苅田町大字提・馬場 | 13100 | H16・20・21 | 1200 | | | | |
| 4 | 福岡 | 馬場遺跡群 | 京都府苅田町大字馬場・南原 | 35300 | H18・19 | 3900 | H19・20 | | | |
| 5 | 福岡 | | 京都府苅田町大字集 | 32100 | H21・22 | | | | | 遺跡なし |
| 6 | 福岡 | | 京都府苅田町大字下片島 | 30600 | H18・20・21 | | | | | |
| 7 | 福岡 | | 京都府苅田町大字下片島 | 10700 | H18 | | | | | 遺跡なし |
| 8 | 福岡 | 岩屋古墳群 | 京都府苅田町大字上片島 | 24200 | H20～22 | 5000 | H19 | | | |
| 9 | 福岡 | 岩屋古墳群 | 京都府苅田町大字上片島 | 29600 | H20～22 | | H19 | | | |
| 10 | 福岡 | | 京都府苅田町大字上片島 | 21500 | H20 | | | | | 遺跡なし |
| 11 | 福岡 | 上片島遺跡 | 京都府苅田町大字岡崎・上片島 | 18200 | H20 | 8440 | H21～23 | | | |
| 12 | 福岡 | 上片島遺跡 | 京都府苅田町大字上片島 | 7500 | H20 | 6180 | H21 | | | |
| 13 | 福岡 | | 行橋市延永 | 12200 | H19 | | | | | 遺跡なし |
| 14 | 福岡 | | 行橋市延永 | 17500 | H19 | | | | | 遺跡なし |
| 15 | 福岡 | 延永ヤヨミ園遺跡 | 行橋市延永・吉国 | 24810 | H22 | 24810 | H19～23 | H23～ | 2集 | |
| 16 | 福岡 | | 行橋市吉国 | 4400 | H20 | | | | | 遺跡なし |
| 17 | 福岡 | | 行橋市吉国 | 5100 | H19 | | | | | 遺跡なし |
| 18 | 福岡 | | 行橋市吉国・下検地 | 82500 | H18・19 | | | | | 遺跡なし |
| 19 | 福岡 | | 行橋市下検地 | 12710 | H22 | | | | | 遺跡なし |
| 20 | 福岡 | | 行橋市上検地・下検地 | 20650 | H22 | | | | | 遺跡なし |
| 21 | 福岡 | | 行橋市上検地・中川・大野井 | 19190 | H22 | | | | | 遺跡なし |
| 22 | 福岡 | | 行橋市大野井・宝山 | 4820 | H20・22 | | | | | 遺跡なし |
| 23 | 福岡 | | 行橋市宝山 | 10050 | H20 | | | | | 遺跡なし |
| 24 | 福岡 | 宝山小出遺跡 | 行橋市宝山 | 16100 | H20 | 6360 | H21・22 | | | |
| 25 | 福岡 | 宝山桑ノ木遺跡 | 行橋市宝山・流末 | 46620 | H20・21 | 31550 | H22～ | | | |
| 26 | 福岡 | 流末溝田遺跡 | 行橋市流末 | 14710 | H20・21 | 2900 | H22 | | | |
| 27 | 福岡 | | 行橋市流末 | 840 | | | | | | |
| 28 | 福岡 | 矢留堂ノ前遺跡 | 行橋市矢留 | 18590 | H20 | 12750 | H21～23 | | | |
| 29 | 福岡 | | 行橋市矢留・南泉 | 7000 | H20・22 | | | | | |
| 30 | 福岡 | 福原長者原遺跡 福原寄原遺跡 | 行橋市南泉 | 18774 | H19・22 | 16574 | H22～ | | | |
| 31 | 福岡 | 福原寄原遺跡 | 行橋市南泉 | 10950 | H21 | 3300 | H21 | | | |
| 32 | 福岡 | 竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳 | 行橋市南泉 | 13888 | H21・22 | 13888 | | | | H22行橋市による調査 |
| 33 | 福岡 | 竹並大内田遺跡 | 行橋市南泉 | 17636 | H20・21 | 4560 | H21 | | | |
| 34 | 福岡 | 鬼熊遺跡 | 行橋市南泉 | 15013 | H20 | 15013 | H21 | | | H21行橋市による調査 |
| 35 | 福岡 | 草場角名遺跡 国作三角遺跡 | 行橋市南泉・京都府みやこ町国作 | 42940 | H20～22 | 3420 | H22・23 | | | |
| 36 | 福岡 | 八反田遺跡 京ヶ辻遺跡 | 京都府みやこ町国作・田中・有久 | 29491 | H20～22 | 29491 | H21～23 | | | H21八反田遺跡はみやこ町による調査 |
| 37 | 福岡 | | 京都府みやこ町有久 | 1110 | H21 | | | | | 遺跡なし |
| 38 | 福岡 | 皆見川ノ上遺跡 | 京都府みやこ町皆見 | 1132 | H21 | 1132 | H22 | | | |
| 39 | 福岡 | 皆見中園遺跡 皆見大塚古墳 | 京都府みやこ町皆見 | 8218 | H21・22 | 5918 | H21～23 | | | H22皆見中園遺跡はみやこ町による調査 |
| 40 | 福岡 | カワラケ田遺跡 八ッ重遺跡 | 京都府みやこ町皆見・下原 | 45510 | H19～21 | 22763 | H20～22 | H23～ | 3集 (本冊) | |
| 41 | 福岡 | カワラケ田遺跡 | 京都府みやこ町皆見 | 5080 | H21 | 3580 | H21・22 | | | |
| 42 | 福岡 | 安武深田遺跡 | 築上郡築上町安武 | 26000 | H21・22 | 26000 | H22 | | | 一部築上町による調査 |
| 43 | 福岡 | | 築上郡築上町小原 | 24359 | H21 | | | | | |

II 位置と環境

京都郡みやこ町は福岡県東北部に位置し、平成17年3月20日、勝山町・犀川町・豊津町が合併して誕生した。町域は、周防灘に沿って京都平野が広がり、英彦山山系が海に向かって八手状に展開し、また町内を縦断する今川、祓川が周防灘に向かって流れ、丘陵を形成する。一方、古代には現在より数 m 高い位置に海が広がり、海岸線が1、2km前後内陸に入り込んでいた。みやこ町は肥沃な平野部に立地することから、数多くの遺跡が残る。中でも、古墳時代後期の古墳や奈良時代から平安時代にかけて機能した豊前国府など多くの史跡が発見されている。

今回調査したカワラケ田遺跡は、旧豊津町内の皆見・下原地区に所在する。ここは祓川右岸の河岸段丘上および英彦山山系から伸びた丘陵の先端部に位置し、祓川の対岸には京都平野が広がり、豊前国府を見渡せる場所にある。以下、各時代の代表的な遺跡について概要を説明する。

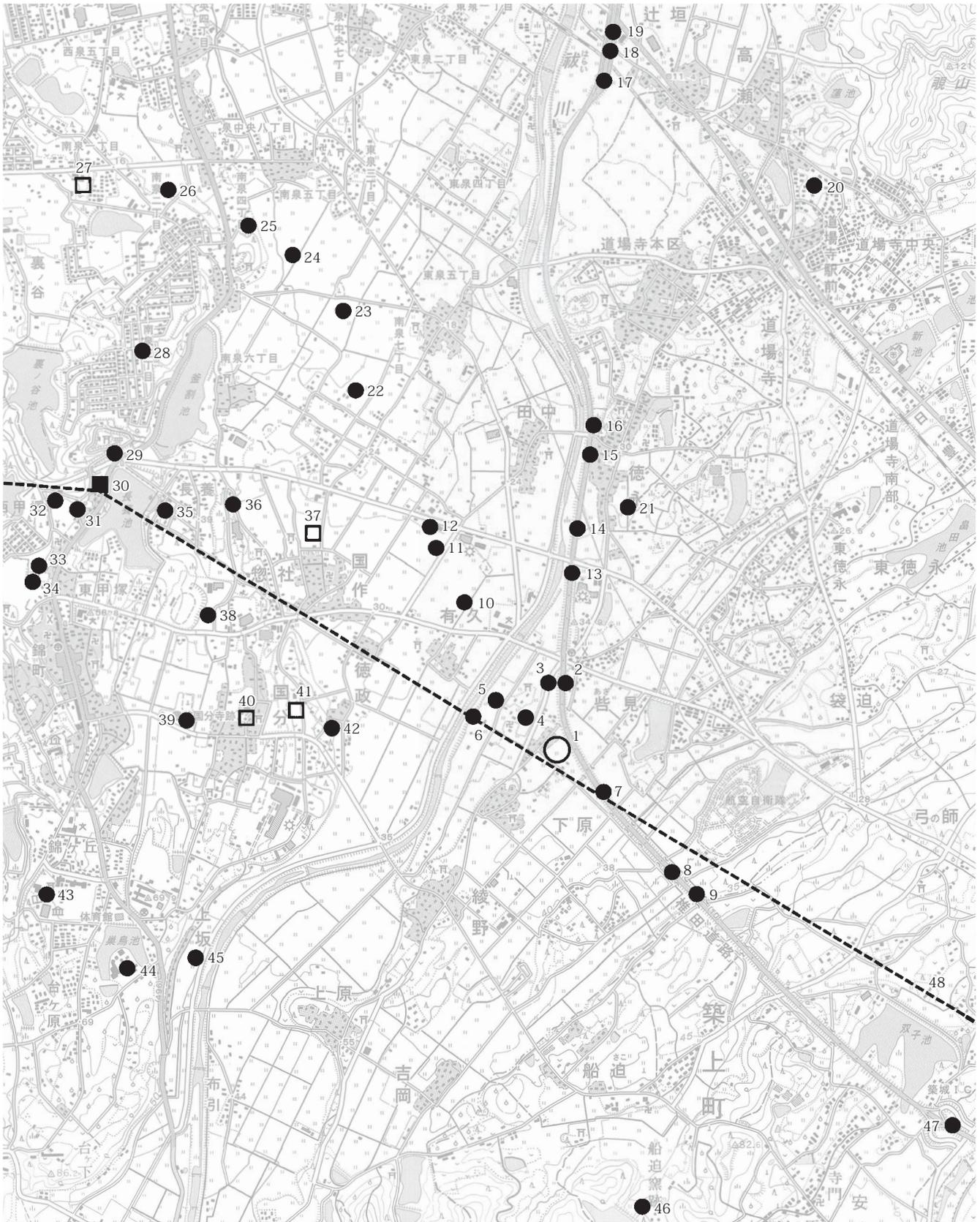
旧石器時代では、明確な遺構は発見されていないが、行橋市所在の渡筑紫遺跡では黒曜石や水晶などの石材で構成される剥片や石器を検出し、石器製作跡と考えられている。また遺構は伴わないが、行橋市所在の鬼熊遺跡(23)ではナイフ型石器、みやこ町所在の鋤先遺跡(15)・徳永川ノ上遺跡(14)・皆見樋ノ口遺跡(6)では、船底形石核・ナイフ型石器・敲石が出土する。

縄文時代では、徳永川ノ上遺跡、神手遺跡(13)、鋤先遺跡がある。各遺跡からは、落とし穴状遺構や井戸を検出している。落とし穴状遺構は、これらの遺跡全体で約80基近くも検出していて、一部の遺構内からは打製石鏃が出土している。徳永川ノ上遺跡では、石斧・石匙・石鏃などの他に、縄文時代早期の押型文土器片や縄文時代後期後半の土器片が出土した井戸も確認している。なお祓川を上流へ進んだ節丸西遺跡では、縄文時代後期中頃～晩期初頭の竪穴住居跡24軒、埋甕、土壇、集石遺構などの集落跡が調査されている。

弥生時代では、行橋市所在の辻垣畠田遺跡(18)・辻垣長通遺跡(19)で前期の環溝が確認されている。また今川近くの丘陵上にある矢留堂ノ前遺跡(県教委 平成21～23年度調査)でも同時期の環濠が発見されている。神手遺跡では、前期後半～中期前半にかけての、貯蔵穴を囲む環濠と後期後半の集落と墓地、豊前国府跡(37)でも中期前半～中頃の大型の掘立柱建物跡や竪穴住居跡が調査されている。その東に位置する国作八反田遺跡(11)(みやこ町教委

平成21・22年調査)でも、後期の掘立柱建物跡、竪穴住居跡など集落跡の調査が行われ、集落跡の南側の流路からは祭祀に用いられた可能性が高い破碎した銅戈が出土している。なお、この時代の特筆される遺跡としては、徳永川ノ上遺跡が挙げられる。徳永川ノ上遺跡では、前期末、中期初、中期末、後期後半のかけての貯蔵穴、住居跡と弥生終末～古墳時代初頭頃の墳墓群が調査されている。特に当地域の盟主的な首長墳である4号墳丘墓の4号石棺墓からは硬玉製勾玉、素環頭刀子、内行花文鏡などが副葬されていた。

古墳時代では、4・5世紀に畿内的な大型前方後円墳である石塚山古墳、その流れをくむ御所山古墳が旧京都郡(現在の苅田町)で造営される。6世紀になると京都平野を流れる長峽川、井尻川、今川、江尻川、祓川の各流域毎に中小首長墳である30～40m小型前方後円墳が造られる。旧豊津町内では4世紀頃の古墳は少なく、柱松古墳群(35)がある。続く5世紀にかけて古墳は節丸西地区周辺にかけて分布する。6世紀代になると、惣社古墳(36)や八景山周辺に竹並ヒメコ塚古墳(25)、彦徳甲塚古墳(34)、甲塚方墳(30)また祓川流域でも隼人塚古墳(20)が造営される。今回のカワラケ田遺跡の2次調査では、同心円や三角文などの文様を赤で彩色し



- 1 カワラケ田遺跡 2 次調査 3 カワラケ田遺跡 1 次調査 4 皆見遺跡 5 皆見中園遺跡 6 皆見川ノ上遺跡
 7 皆見樋ノ口遺跡 8 ハツ重遺跡 9 弓田遺跡 10 下原遺跡 11 京ヶ辻遺跡 12 国作八反田遺跡 13 国作三角遺跡
 14 神手遺跡 15 徳永川ノ上遺跡 16 鋤先遺跡 17 居屋敷遺跡 18 辻垣ヲサマル遺跡 19 辻垣畠田遺跡 20 辻垣長通遺跡
 21 隼人塚古墳 22 源左エ門屋敷遺跡 23 草場角名遺跡 24 鬼熊遺跡 25 竹並大内田遺跡 26 竹並ヒメコ塚古墳
 27 福原寄原遺跡 28 福原長者原遺跡 29 竹並遺跡 30 八景山古墳群 31 甲塚方墳 32 八景山南古墳群 33 馬苦勞遺跡
 34 甲塚北古墳 35 彦徳甲塚古墳 36 柱松古墳群 37 惣社古墳 38 豊前国府跡 39 北原遺跡 40 正道遺跡
 41 豊前国分寺跡 42 徳政瓦窯遺跡 43 小笠原藩庁跡 44 巢鳥池南遺跡 45 上坂廃寺 46 船迫堂帰り瓦窯
 47 安武・深田遺跡 48 古代官道

第3図 カワラケ田遺跡周辺分布地図 (1/25,000)

た装飾古墳の皆見大塚古墳（17）（円墳）も京都平野で初めて発見されている。（※皆見大塚古墳については、次年度以降報告予定）なお、首長墳以外にも行橋市所在の竹並遺跡（28）のように、5世紀～8世紀初めにかけて築造された千基近い横穴墓もある。古墳以外で注目される遺跡では、居屋敷遺跡（16）が挙げられる。椎田道路建設に伴う調査で5世紀前半頃の初期の須恵器窯が発見され、完形の罫が出土している。この居屋敷遺跡と関連する5世紀代の集落跡が京ヶ辻遺跡（10）（県教委 平成21～23年度調査）で調査され、居屋敷遺跡の須恵器が多く出土している。

奈良時代～平安時代になると、豊前国府がカワラケ田遺跡から北西に数キロ先に造られ、この地は豊前国の政治・文化の中心となる。豊前国府跡政庁・惣社地区では、8世紀中頃～13世紀前半までの掘立柱建物跡を確認し、鴻臚館系・老司系などの大宰府系瓦、円面硯、風字硯、猿面硯、墨書土器、木簡、石帯、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶器などが出土している。またそれより以前の初期の国府跡が行橋市所在の福原長者原遺跡（27）で発見されている。その他にもカワラケ田遺跡の南西には、7世紀末頃～9世紀の上坂廃寺（45）もある。なお国府の南側には豊前国分寺跡（40）・豊前国分尼寺跡（41）も確認され、国分寺の瓦を焼いた築上町所在の船迫堂帰り瓦窯（46）や平安時代には徳政瓦窯跡（42）が国分尼寺近くにもある。

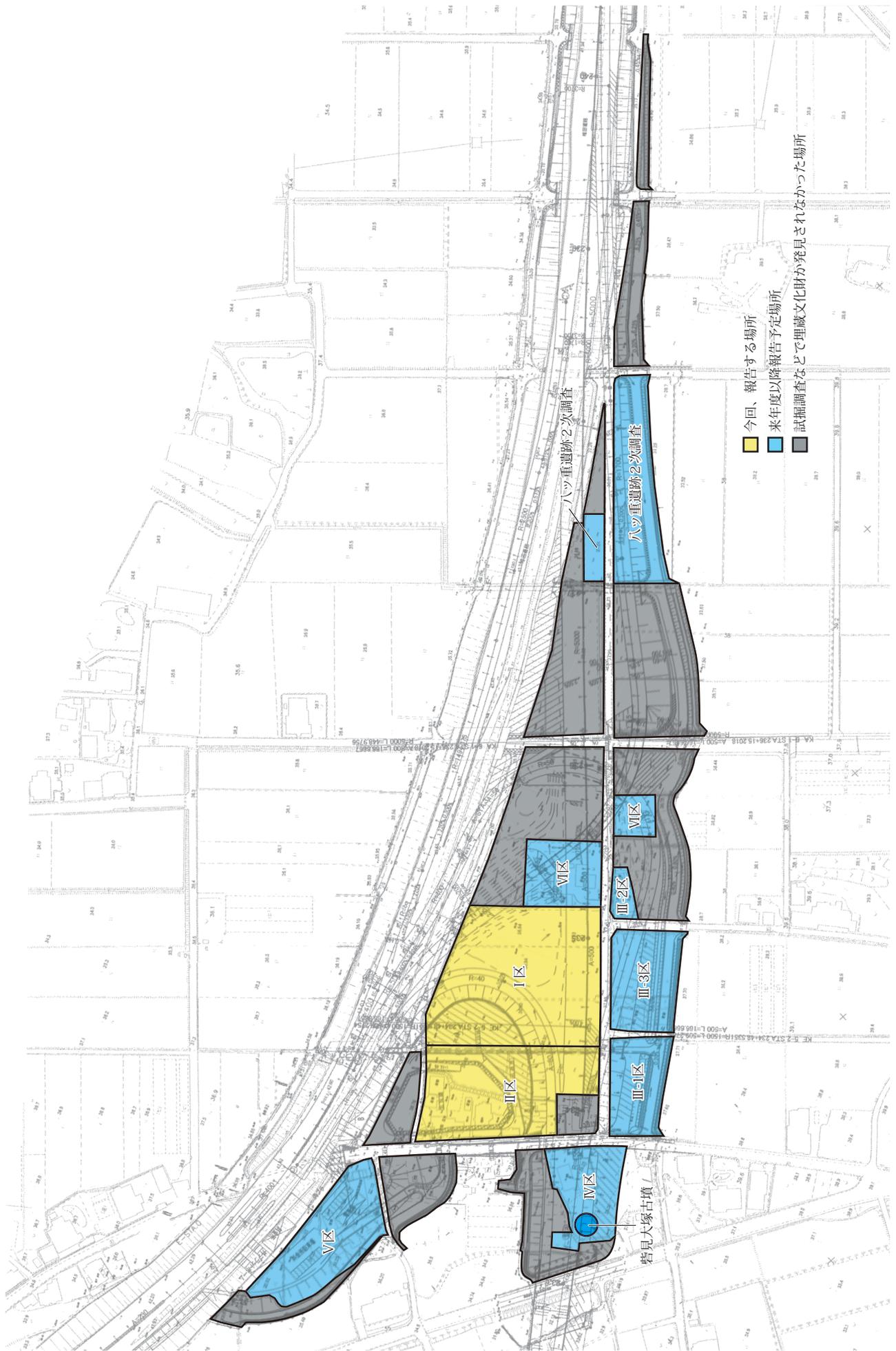
カワラケ田遺跡の位置する大字名『皆見（あざみ）』についての名の由来は諸説あるが、大宝2（702）年の豊前国の戸籍で「阿射弥勝布施賣（あざみのすぐりのふせめ）」の名や平安時代に編纂された『倭名類聚抄』では、「皆見郷」の記述がみられることから、現在の皆見を中心に、少なくとも8世紀頃には「皆見」の地名が存在したと推定される。皆見遺跡（3）・カワラケ田遺跡1次調査（4）では、区画の溝の一部に門跡が設けられ、溝の内側に多数の建物跡や製塩土器や硯が出土したことから、周辺に郷家が存在したことを示す遺構が確認されている。カワラケ田遺跡の北に位置する徳永川ノ上遺跡では、8世紀後半代の胞衣壺が発見され、中から「墨忍足」という製作工人銘を刻する唐墨が出土している。またカワラケ田遺跡の南側に走る古代の官道（48）は、国府と国分寺・国分尼寺の間を北西から南東方向に直線状伸び、大宰府と豊後国府・宇佐八幡神社方面とを結ぶ。現在でも生活道路として利用されている箇所もあり、路線上では皆見樋ノ口遺跡、八ッ重遺跡（7）などの地点で調査されている。（※古代の官道は、次年度報告予定である）

鎌倉時代以後では注目するような遺跡は少なくなるが、12世紀中頃から13世紀前半に豊前国府跡において豪族の館を取り囲むと考えられる大溝が発見され、また14世紀後半～16世紀中頃の室町時代では、土壙墓群が鋤先遺跡、源左エ門屋敷遺跡（21）などで調査されている。

このように、カワラケ田遺跡周辺の歴史が少しずつ解明されつつある。

（参考文献）

- ・福岡県教育委員会編1991『皆見遺跡・カワラケ田遺跡・下原遺跡』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告（3）
- ・福岡県教育委員会編1993『辻垣ヲサマル遺跡』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第1集
- ・福岡県教育委員会編1994『辻垣島田・長通遺跡』一般国道10号線行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第2集
- ・豊津町教育委員会編1994『甲塚方墳』豊津町文化財調査報告書 第13集
- ・福岡県教育委員会編1994『徳永川ノ上遺跡I』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第2集
- ・行橋市教育委員会編1994『渡筑紫遺跡』行橋市文化財調査報告書 第23集
- ・福岡県教育委員会編1995『徳永川ノ上遺跡I』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第4集
- ・福岡県教育委員会編1995『鋤先遺跡』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第5集
- ・福岡県教育委員会編1996『居屋敷遺跡』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第6集
- ・福岡県教育委員会編1996『徳永川ノ上遺跡II』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第7集
- ・福岡県教育委員会編1997『徳永川ノ上遺跡III』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告 第9集
- ・豊津町史編纂委員会編1998『豊津町史 上巻』
- ・行橋市教育委員会編1999『鬼熊遺跡』行橋市文化財調査報告書 第27集
- ・豊津町教育委員会編2000『皆見樋ノ口遺跡』豊津町文化財調査報告書 第22集
- ・豊津町教育委員会編2001『豊津町内遺跡等分布地図』豊津町文化財調査報告書第25集
- ・行橋市史編纂委員会編2006『行橋市史 資料編 原始・古代』
- ・行橋市教育委員会編2010『行橋市内遺跡等分布地図』行橋市文化財調査報告書第37集
- ・みやこ町教育委員会編2010『みやこ町内遺跡等分布地図』みやこ町文化財調査報告書第6集



第4図 カワラケ田遺跡2次調査区割り図 (1/ 1,500)

Ⅲ 発掘調査の記録

1) 調査の概要

今回、報告するカワラケ田遺跡2次調査は、平成20年3月25・26日に行った確認調査の結果により、皆見1047-1、1052-1、1127-1・2番地（I区約7900㎡）、1032-1、1033-1、1035、1036、1040、1041、2206番地（II区約5000㎡）の約12,900㎡を調査対象とした。

まずI区は、平成20年10月3日から21年3月31日の間で発掘調査を行った。調査前、田地であった調査区は、廃土の置き場などから全面を掘削することができなかった。そのため調査区を半分に分け、東側から調査を始めた。東側の調査区では、表土と盛土を約50cm掘り下げると遺構面に達した。調査区周辺は1970年代に圃場整備が行われていたため、大規模に削平を受けていたが掘立柱建物跡1棟と土坑2基を検出した。谷の東斜面上では圃場整備の削平を免れていて、盛土の下から多数のピットを検出したが、主たる遺構は検出されなかった。東側の調査区を埋戻し後、西側の調査を開始した。西側の調査区では、圃場整備で削平されず盛土で埋められていたためか、表土、盛土を約50cm除去すると橙色土の遺構面を確認した。西側の遺構の残存状況は良好で、掘立柱建物跡29棟、土坑15基、溝4条など多くの遺構を検出した。また谷底近くでは、鍛冶炉とそれに付随する掘立柱建物跡を検出したが、その部分については平成21年6月30日まで継続調査を行った。なおI区の調査区内中央には、確認調査の結果から谷の存在が予想されていた。そのため、谷と遺構との関係を確認するために東西に2本のトレンチを入れた。トレンチ調査の結果、GLから約3m下の谷底では遺構を確認できなかったため、谷底部分については調査をせず、遺構が検出される所までを東西の調査区の範囲としている。

I区の西側に位置するII区では、用地の引き渡し状況などから東側の調査区（田地部分）と西側の調査区（高台部分）とに分けて調査を行った。平成21年1月8日と平成22年1月26日の試掘調査の結果をもとに、平成22年11月2日から用地の引き渡しが終了した東側の調査区より発掘調査を行った。東側の調査区は、I区と同様に圃場整備の影響を受け削平されていた。しかしI区に近い用水路際では、遺構の残存状況は良好で掘立柱建物跡6棟、竪穴住居跡2軒、土坑4基（落とし穴を含む）を検出した。東側の調査終了後に、西側の調査へと移行した。

西側の調査区は、平成22年3月15・16日のみやこ町教育委員会による試掘調査をもとに発掘調査を行った。この部分は調査前宅地であったが、周辺から一段高い位置にあることから、多くの遺構を検出できると思われた。だが宅地の造成による削平が想像した以上に著しく、掘立柱建物跡1棟、竪穴住居跡1軒、土坑（井戸・貯蔵穴を含む）3基のみしか検出できなかった。これ以外には、宅地から田地へ下る東斜面際で45基の近世墓を検出した。II区では、平成22年11月2日から平成23年3月28日の間、発掘調査を行った。

2) 掘立柱建物跡（図版5～11、第5～28図）

掘立柱建物跡は、I区で29棟（1～29号）、II区で7棟（50～56号）の36棟を検出した。鍛冶遺構と関連する13号掘立柱建物跡については、次年度以降に報告予定である。I区・II区ともに34～36mの谷部の緩斜面上に建物群を形成している。検出した遺構は2×2間、2×3間、2×4間、2×5間、3×3間、3×4間などの掘立柱建物跡を確認し、掘り方はほぼ円形で約0.3～0.5mを測る。掘立柱建物跡の時期は、出土遺物から7世紀～8世紀の時期が考えられる。

1号掘立柱建物跡（図版5、第5図）

I区東側で唯一確認できた1×4間の建物である。圃場整備による削平が著しく、南北方向では1間以上の柱穴を確認できなかった。建物方向はN-59°-Eで、西側の谷部に平行する形で柱穴が並ぶ。柱穴はいずれも円形で径0.2～0.6m、深さ0.15～0.3m、柱穴間距離は南北方向で2.0m、東西方向で1.1～1.5mを測る。柱痕跡は確認できなかった。また出土遺物はなく、掘立柱建物の時期を検討するのは難しいが、建物方向などから7世紀中頃以降と考えられる。

2号掘立柱建物跡（図版5、第5図）

I区北側隅で確認した2×3間の建物で、柱穴はいずれも円形で径0.3～0.5m、深さ0.3～0.5mを測る。建物方向はN-48°-Eで、柱穴間距離は南北方向で2.1m、東西方向で1.8mを測る。柱穴はすべて検出しておらず、調査区外の北東方向に1間以上伸びる可能性がある。掘立柱建物の時期は、唯一検討できるP30の須恵器の坏蓋片から7世紀後半以降と考えられる。P30、32、92、97から遺物が出土した。

出土土器（第5図）

1は須恵器の坏蓋口縁部片で、口縁端部が僅かに嘴状になる。内外面とも回転ナデ調整である。

3号掘立柱建物跡（図版5、第6図）

2号掘立柱建物跡より南に位置する2×3間の建物である。建物方向はN-61°-Eで、柱穴間距離は南北方向で1.8～1.9m、東西方向で2.1～2.3mを測る。柱穴はいずれも円形で径0.3～0.4m、深さ0.15～0.4mを測る。東側の柱穴列は少し掘り下げすぎている。掘立柱建物の時期は、5号掘立柱建物跡との関係から考えると7世紀前半だが、P98出土の須恵器片からは8世紀以降か。P35、36、94、95、98、118から遺物が出土した。

出土土器（第6図）

2は須恵器の坏蓋口縁部片で、口縁端部が嘴状になる。調整は内外面とも回転ナデである。

4号掘立柱建物跡（図版5、第6図）

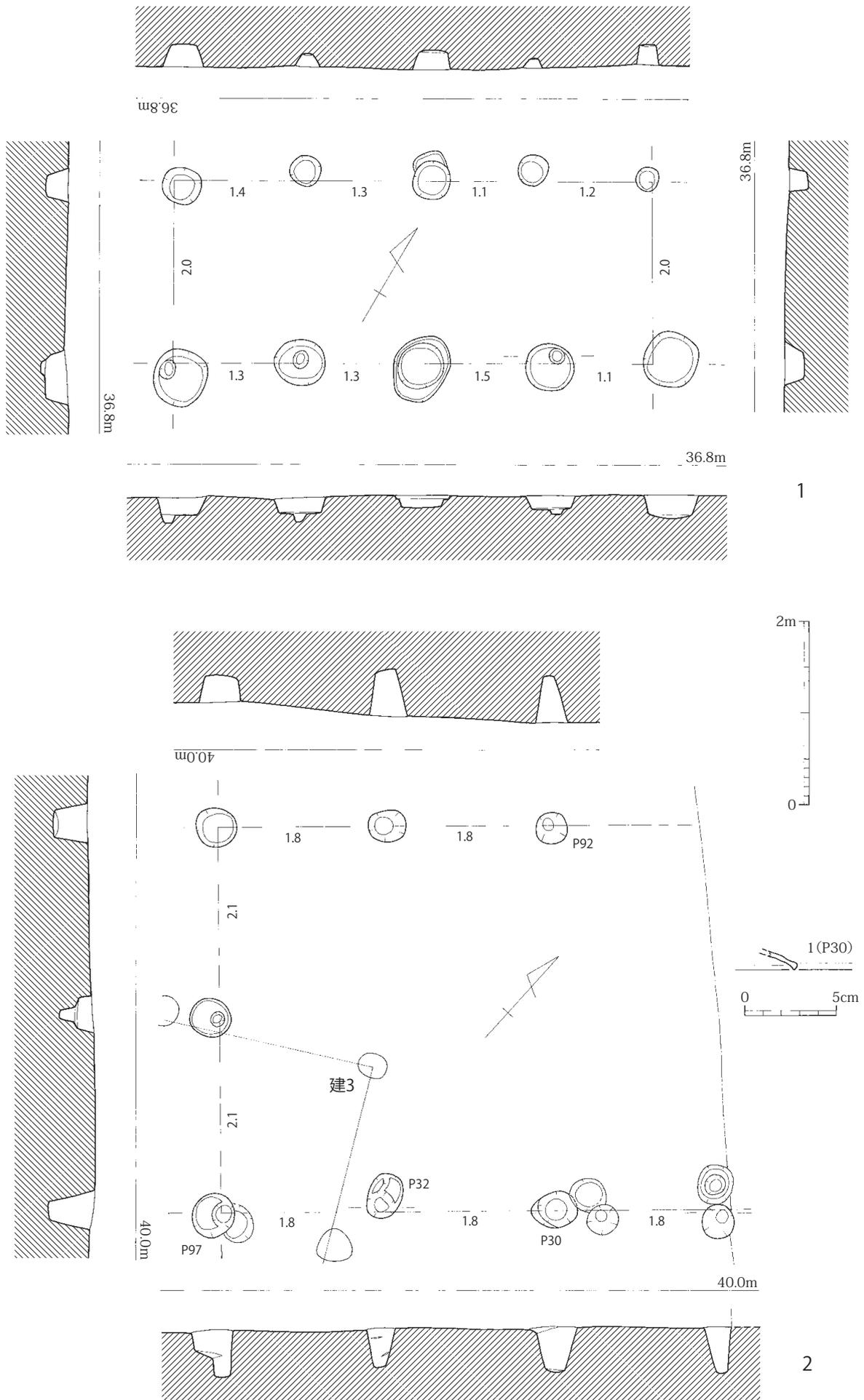
3号掘立柱建物跡より西に位置する。建物方向はN-76°-Eで、東向きの3×3間の建物である。柱穴間距離は南北方向1.4～1.6m、東西方向で1.7～2.0mを測る。柱穴はいずれも円形で径0.2～0.4m、深さ0.2m前後を測るが、柱痕跡は確認できなかった。P103、145の遺物から時期を検討するのには乏しく、周辺の掘立柱建物跡から8世紀以降と思われる。

出土土器（第6図）

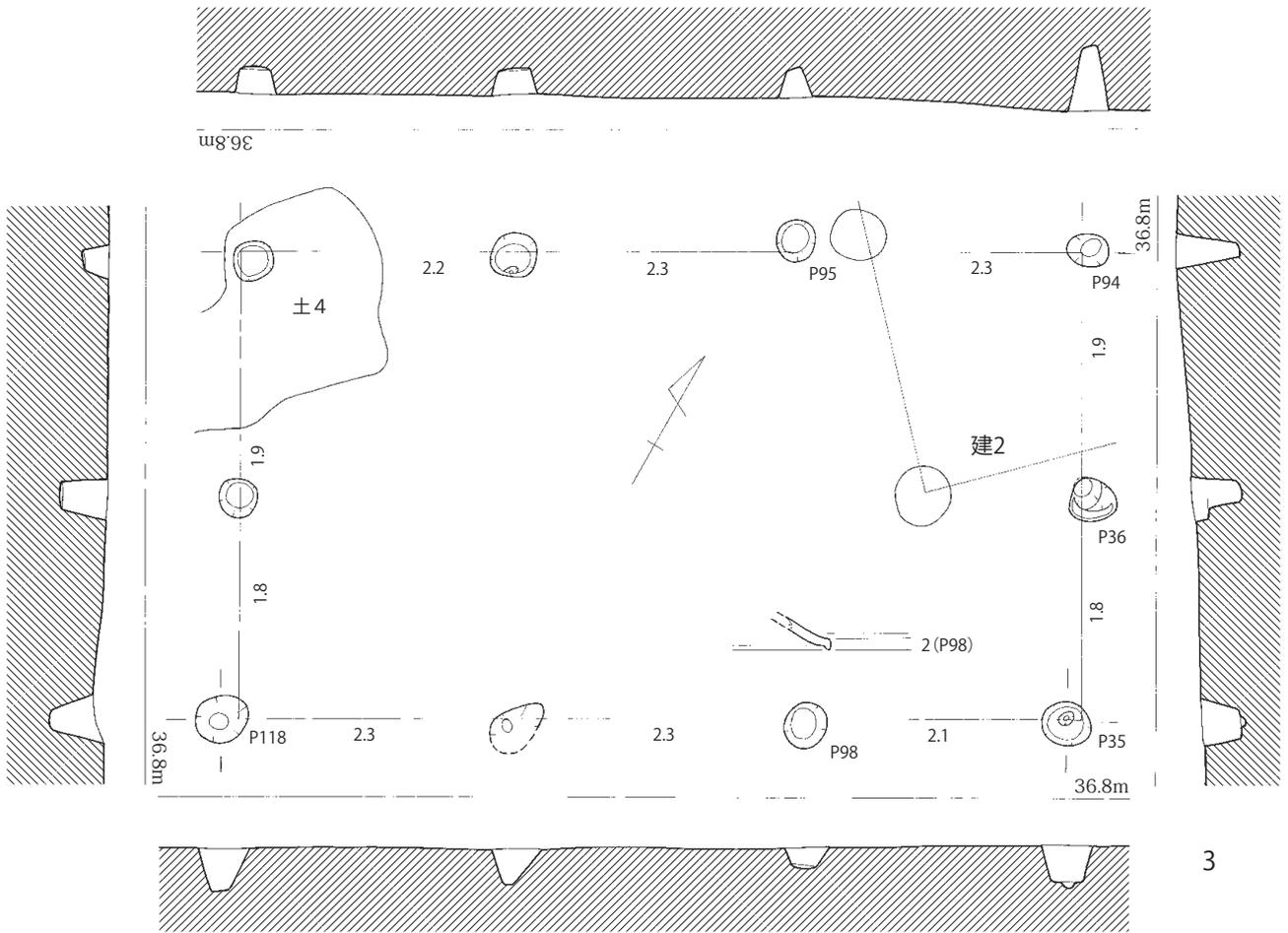
3は土師器坏片で、口縁部が外側に向かって僅かに広がる。調整は内外面とも横ナデである。

5号掘立柱建物跡（図版5・6、第7図）

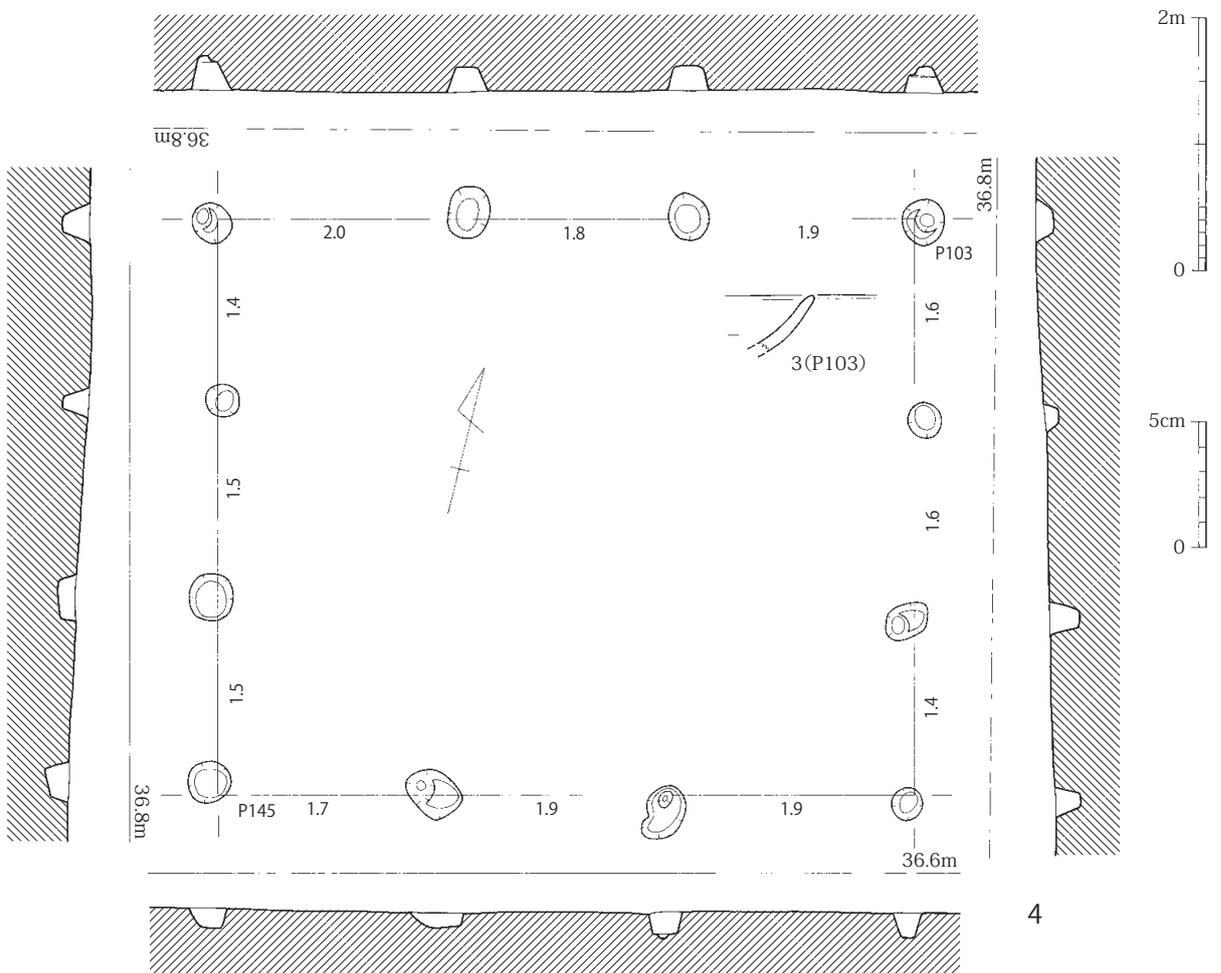
3号掘立柱建物跡の東に位置する2×2間の総柱建物である。建物方向はN-61°-E、柱穴間距離は南北方向で1.6～1.9m、東西方向で2.1mを測る。29号掘立柱建物跡と一部柱穴が切り合っているが、ほぼ円形で径0.4～0.6m、深さ0.4～0.6mを測る。掘立柱建物の時期はP109出土の須恵器の坏片や他の出土土器から、少なくとも7世紀初め頃と考えられる。P67、88、89、104～109から遺物が出土した。



第5図 1・2号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)

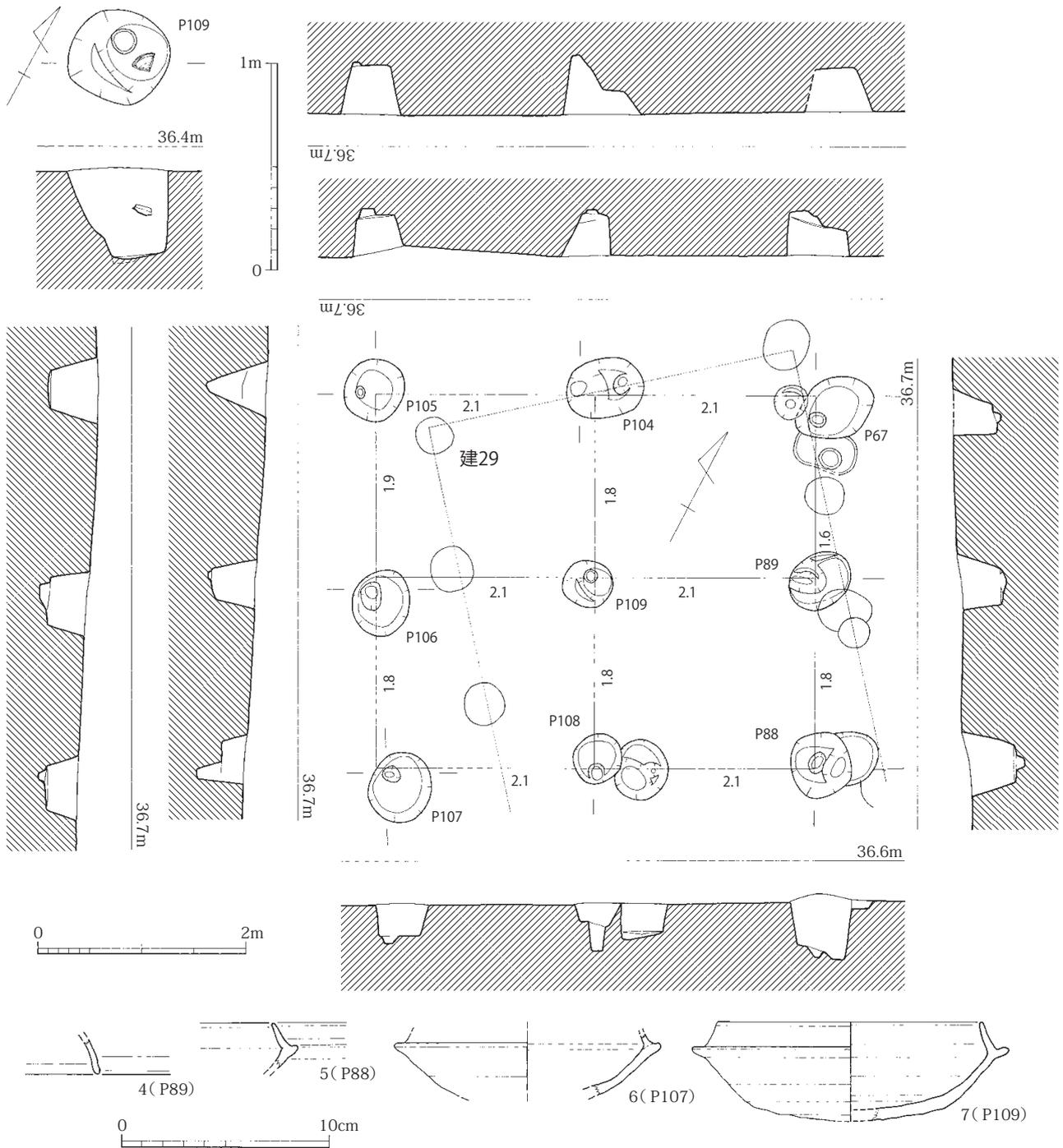


3



4

第6図 3・4号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)



第7図 5号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/30・1/3)

5号掘立柱建物跡出土土器 (第7図)

4～7は須恵器である。4は坏蓋口縁部の小片で、内外面とも回転ナデ調整である。5は坏身片で、受け部より下は欠損している。内外面とも回転ナデ調整である。6は口縁と底部を欠損している坏身片で、復元受け部径で12.6cmを測る。内外面とも回転ナデ調整である。7は坏身の1/4片で、復元口径12.8cm、器高3.8cmを測る。口縁端部には段がつかない。内外面とも回転ナデ調整であるが、外面底部のみヘラケズリを施す。

6号掘立柱建物跡 (図版6、第8図)

谷部と直交する方向に位置する2×3間の建物である。建物方向はN-52°-E、柱穴間距離

はすべての方向で1.5mを測る。柱穴は円形で径0.3～0.6m、深さ0.25～0.5mを測る。南東隅の柱穴は掘り下げすぎている。掘立柱建物の時期は、出土した須恵器坏片から7世紀中～後半頃と考えられる。P91、125、126から遺物が出土した。

6号掘立柱建物跡出土土器（第8図）

8は須恵器坏蓋の口縁部片である。口縁端部に向かって角張る。9は口縁端部を僅かに欠損する須恵器坏身片である。口縁及び受け部が短い。10は土師器高坏片である。坏部と脚部の大部分は欠損しているが、接合部分のみ残る。外面には僅かにナデの痕跡が残る。

7号掘立柱建物跡（図版6、第9図）

4号掘立柱建物跡のすぐ西に位置する2×4間の建物である。建物方向はN-53°-E、柱穴間距離は南北方向で2.1m、東西方向1.6～1.8mを測る。柱穴の一部が切り合いで大きく広がっているが、円形で径0.4～0.7m、深さ0.3～0.7mを測る。柱穴上面では柱痕跡は確認できなかったが、底面近くで検出した柱痕跡から径0.15m程と考えられる。掘立柱建物の時期は、周辺の建物との関係から8世紀頃と考えられる。P129～138からも遺物が出土した。

出土土器（第9図）

12は天井部のない須恵器の坏蓋片で、復元口径13.0cmを測る。内外面とも回転ナデである。

8号掘立柱建物跡（図版6、第8図）

7号掘立柱建物跡と重なる2×3間の建物である。建物方向はN-46°-E、柱穴間距離は南北方向で1.8～1.9m、東西方向で1.4～1.5mを測る。柱穴はほぼ円形で径0.25～0.4m、深さ0.25～0.5mを測る。柱痕跡は確認できなかったが、P141のみ0.25m程の平坦な石を据えていた。掘立柱建物の時期は、土師器甕片から7世紀中頃以降と考えられる。P139～143から遺物が出土したが、図化できるものはなかった。

出土土器（第8図）

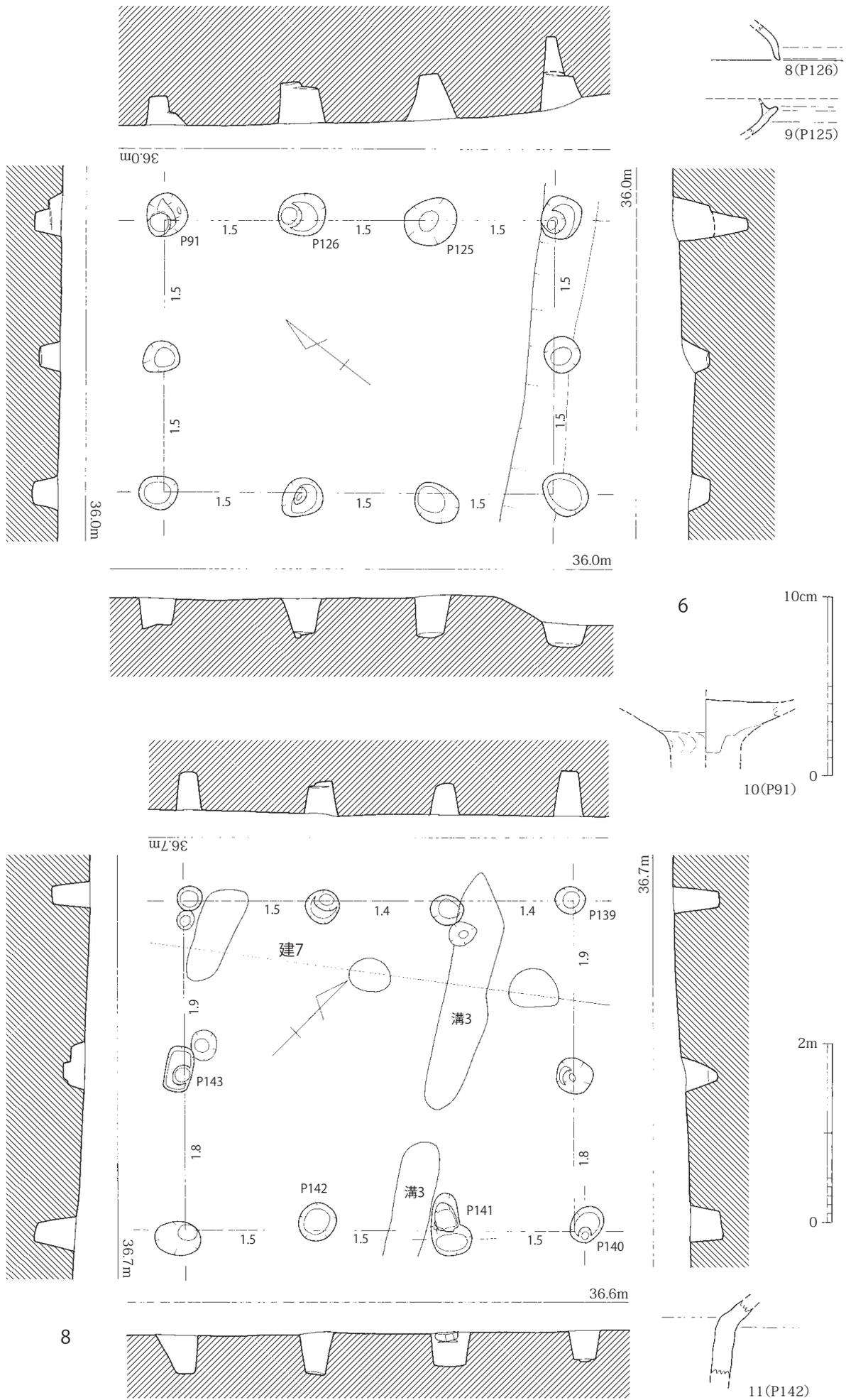
11は、口縁端部に向かって「く」の字形に曲がる土師器甕の頸部片である。

9号掘立柱建物跡（図版7、第10図）

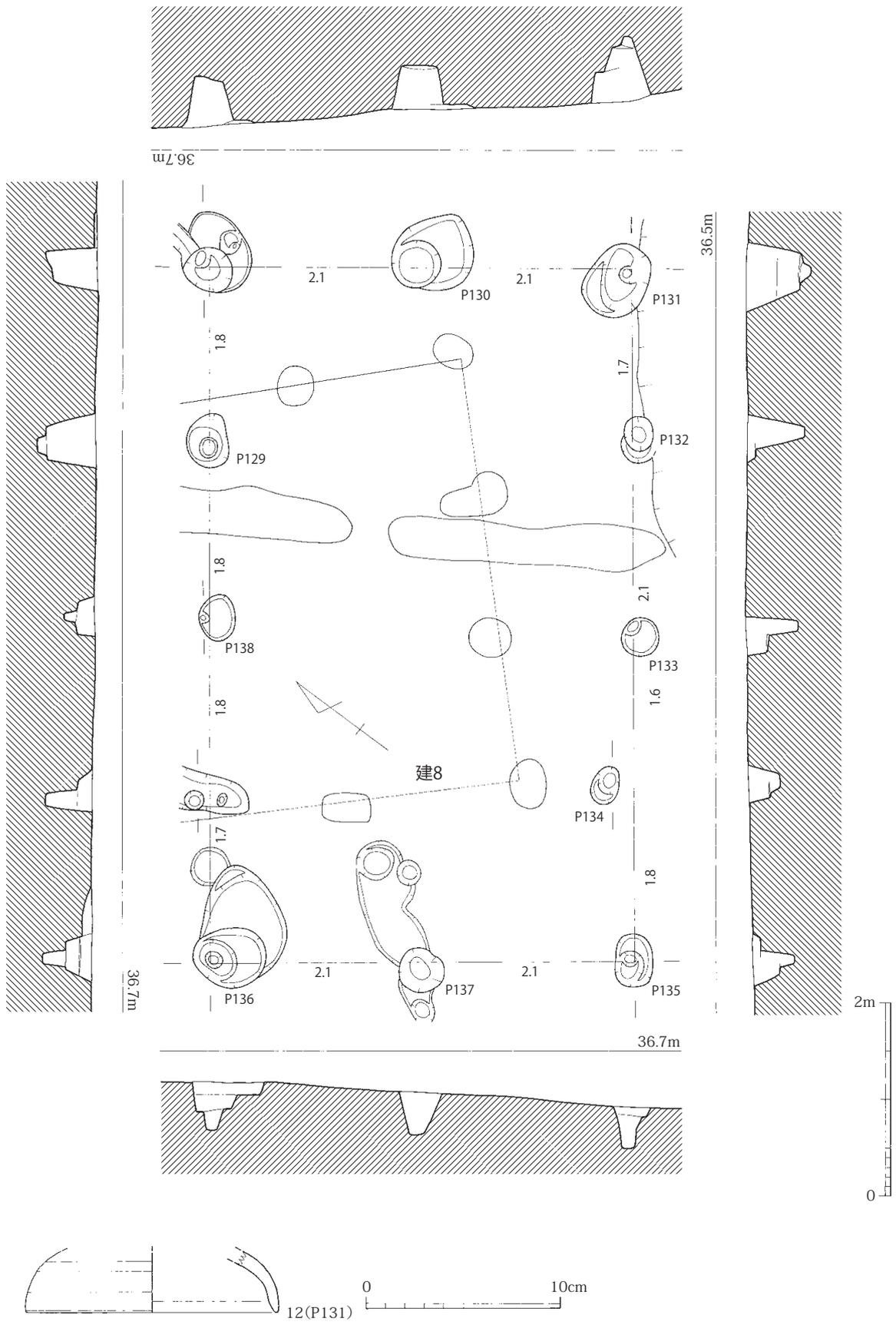
10・11・28号掘立柱建物跡と重なる3×4間の建物である。建物方向はN-59°-E、柱穴間距離は南北方向で1.5～1.7m、東西方向で2.1～2.3mを測る。柱穴は円形又は長円形を呈し、径0.4～0.6m、深さ0.2～0.6mを測る。また10・11・28号掘立柱建物跡とほぼ同じ位置にあることから、同一の建物の建て替えの可能性がある。P170～173、271～277、302、307、308のすべてのピットから遺物が出土した。出土した須恵器片は、7世紀前半～中頃のものが多く出土しているので、これが掘立柱建物の時期を示すと思われる。しかし、P302出土の坏の小片が蓋とすると掘立柱建物の時期は8世紀頃とも考えられる。

出土土器（第10図）

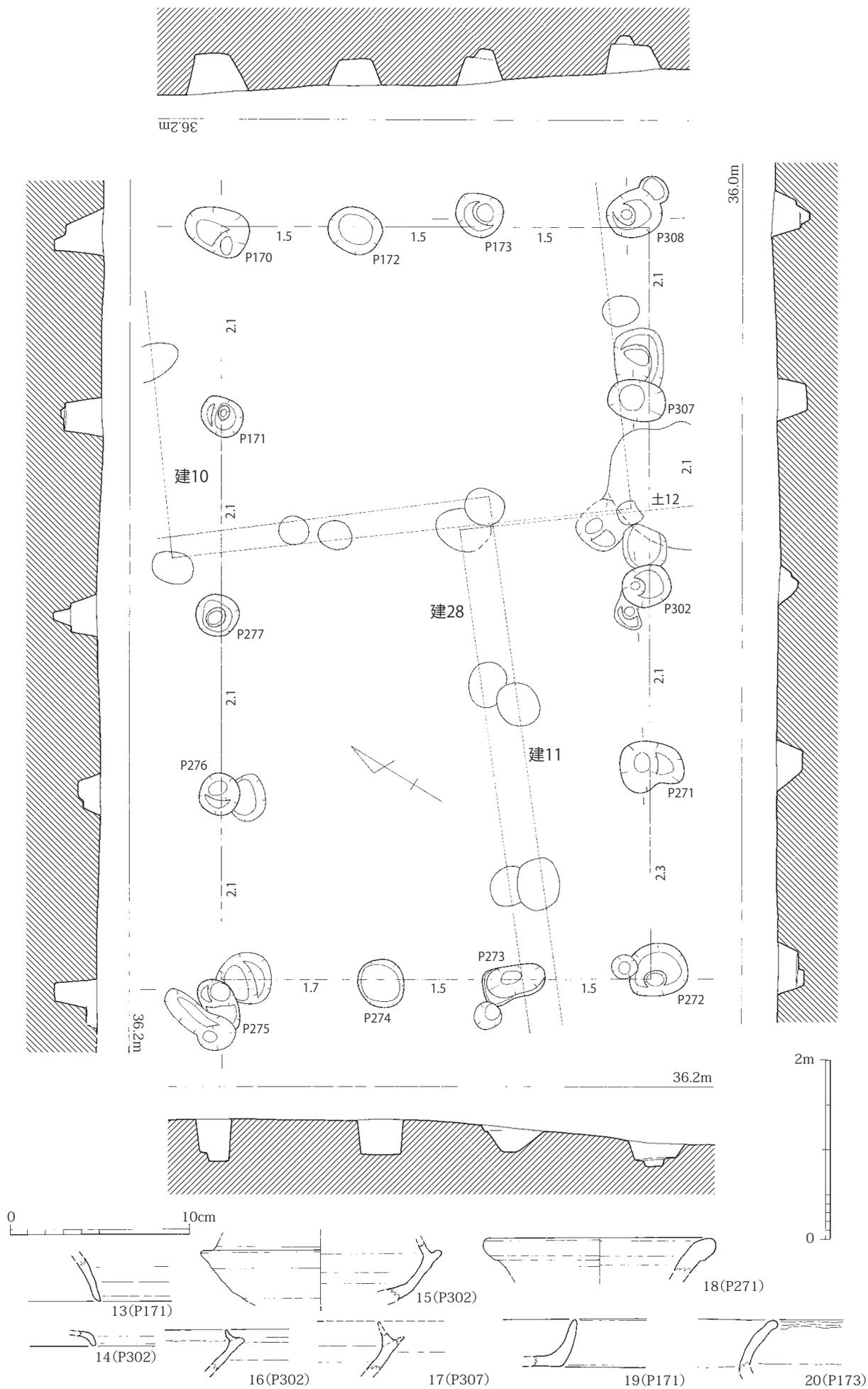
13から20は須恵器である。13は坏蓋口縁部片である。14は口縁端部が嘴状になる坏蓋片か。15は口縁端部及び底部を欠損する坏蓋片で、復元受け部径で13.4cmを測る。外面底部に僅かにヘラケズリの痕跡が残る。16・17は坏身の小片である。18は壺の口縁部片で、口縁端部は肉厚で丸くなる。復元口径で12.6cmを測る。19は土師器の坏片で、底部との境が角張り、外面底部にヘラ切りを施す。20は土師器甕の口縁部片で、内外面とも指ナデの痕跡が残る。



第8図 6・8号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)



第9図 7号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/ 60・1/ 3)



第10図 9号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)

10号掘立柱建物跡（図版7、第11図）

9号掘立柱建物跡と重なる3×4間の建物である。建物方向はN-51°-E、柱穴間距離は南北方向で1.5～1.8m、東西方向で2.1～2.3mを測る。柱穴は円形又は長円形を呈し、径0.25～0.45m、深さ0.2～0.6mを測り、南側の柱列の中央には0.2m程の平坦な石を据えていた。また南隅の柱穴が他の柱穴より若干小さいが、12号土坑（井戸）を切る形で検出する。P166～169、174、175、278、306、307、310、430から遺物が出土したが、いずれも小片で実測可能なものはなかった。掘立柱建物の時期は周辺の建物の状況などから8世紀頃か。

11号掘立柱建物跡（図版7、第12図）

9・10・28号掘立柱建物跡と重なる2×4間の建物である。建物方向はN-51°-E、柱穴間距離は南北方向で1.9～2.2m、東西方向で1.9～2.3mを測る。柱穴は円形又は長円形を呈し、径0.3～0.7m、深さ0.3～0.6mを測る。P427の底面には0.2m程の平坦な石を据え、一部の柱穴からは径約0.15m前後の柱痕跡も確認した。P189、242、279、280、305、421～423、427、428から遺物が出土した。掘立柱建物の時期は、出土土器や28号掘立柱建物跡を切ることから、それよりは後出する7世紀後半以降と考えられる。

出土土器（第12図）

21～25は須恵器である。21は坏蓋口縁部片で、端部が嘴状になる。22も坏蓋口縁部片で、口縁端部は嘴状で、天井部に向かって内湾する。23、24は坏身小片で、全体的に器高は低い。25は甕又は壺の口縁部片か。口縁端部が角張る。21～25はすべて回転ナデ調整である。

12号掘立柱建物跡（図版7、第13図）

9～11号掘立柱建物跡のすぐ南に位置する2×2間の総柱建物である。建物方向はN-38°-E、柱穴間距離は1.8～2.1m、柱穴は径0.5m前後、深さ0.25～0.45mを測る。西隅のP500のみ0.1m程の石を底面に据えている。またP501は26号掘立柱建物跡と切り合っていたので、掘り方が一回り以上大きくなる。掘立柱建物の時期は、出土土器から7世紀前半～中頃だが、17号掘立柱建物跡との関係から8世紀頃とも考えられる。P424～426、500、501、518から遺物が出土した。

出土土器（第13図）

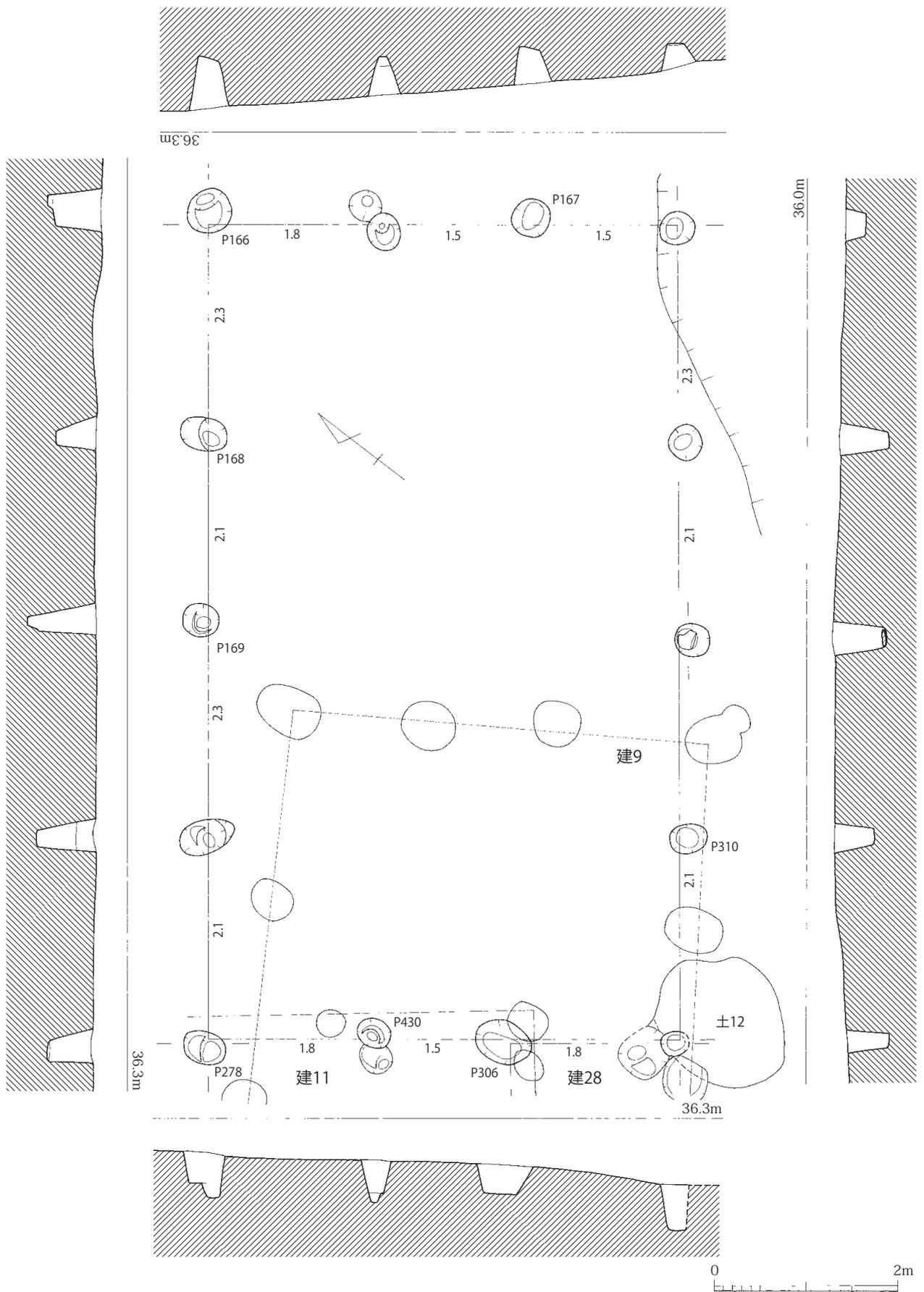
26は須恵器の坏蓋片である。27は須恵器の坏身小片で、口縁端部が欠損する。26・27は内外面とも回転ナデ調整である。28は土師器の甕片で、口縁端部に向かって内湾しながら外側に向かって開く。内外面ともナデ調整であるが、内面の頸部付近に縦方向のケズリを施す。

14号掘立柱建物跡（図版7、第14図）

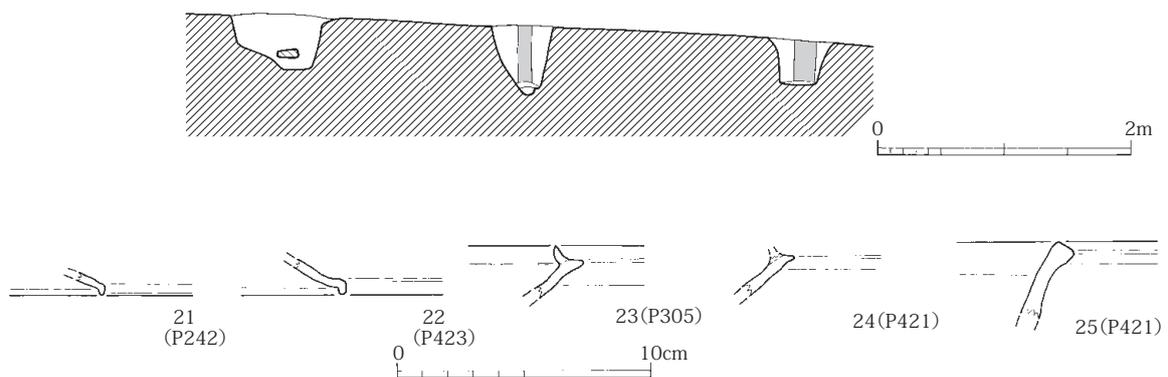
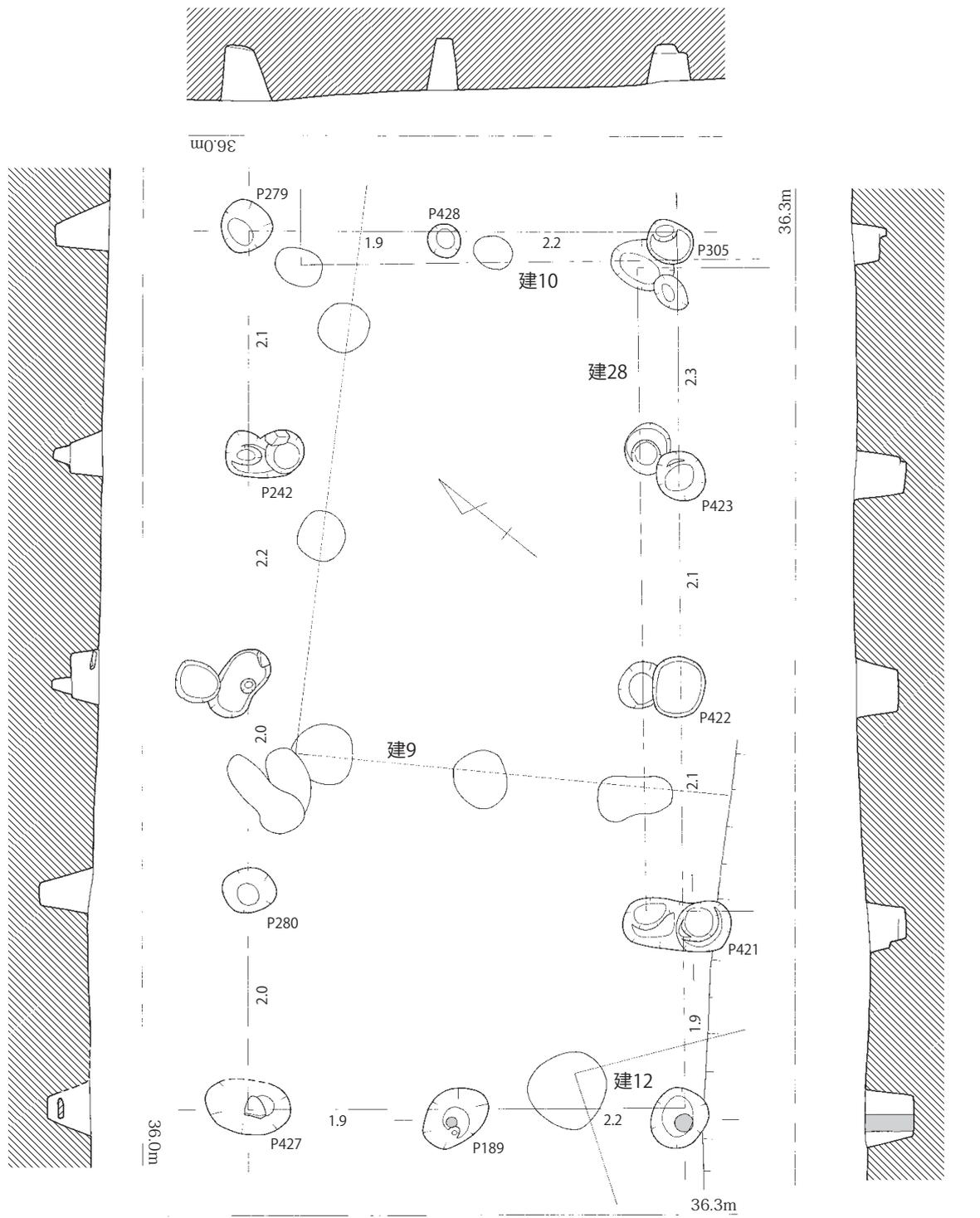
8号掘立柱建物跡の南に位置する2×3間の建物である。建物方向はN-53°-E、柱穴間距離は南北方向で1.8～2.2m、東西方向で1.4～2.0m、柱穴は径0.2～0.4m、深さ0.25～0.4mを測る。柱痕跡は上面で確認されなかったが、柱穴底面近くで径0.1mを測る。掘立柱建物の時期は、P22の底面近くで平瓦片が1点出土したことなどから8世紀頃と考えられる。P22、228～233、235～237から遺物が出土した。

出土土器（第15図）

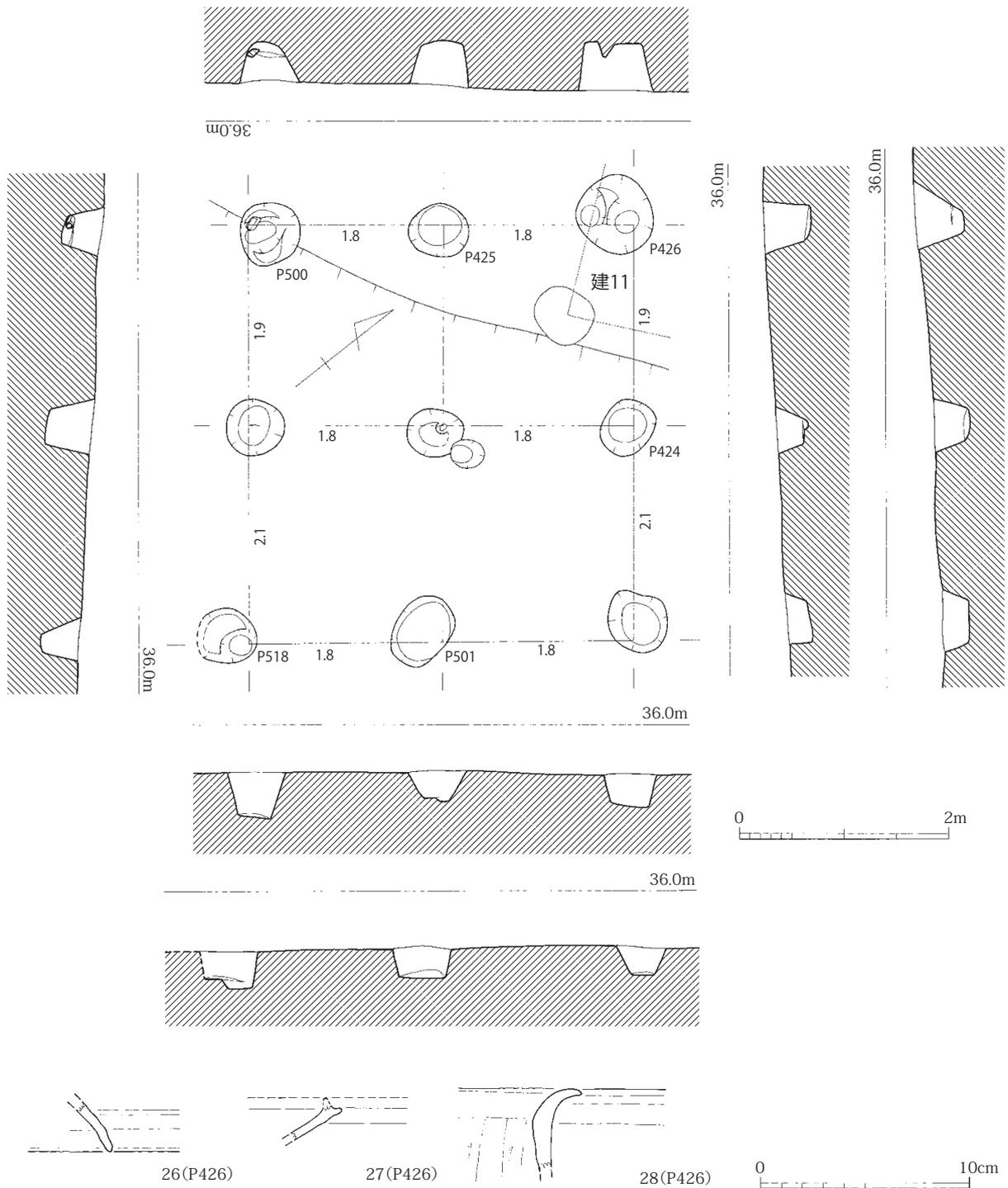
29から32は須恵器である。29は坏蓋片で天井部は欠損する。口縁端部は嘴状に折れ曲が



第11图 10号掘立柱建物跡実測図 (1/ 60)



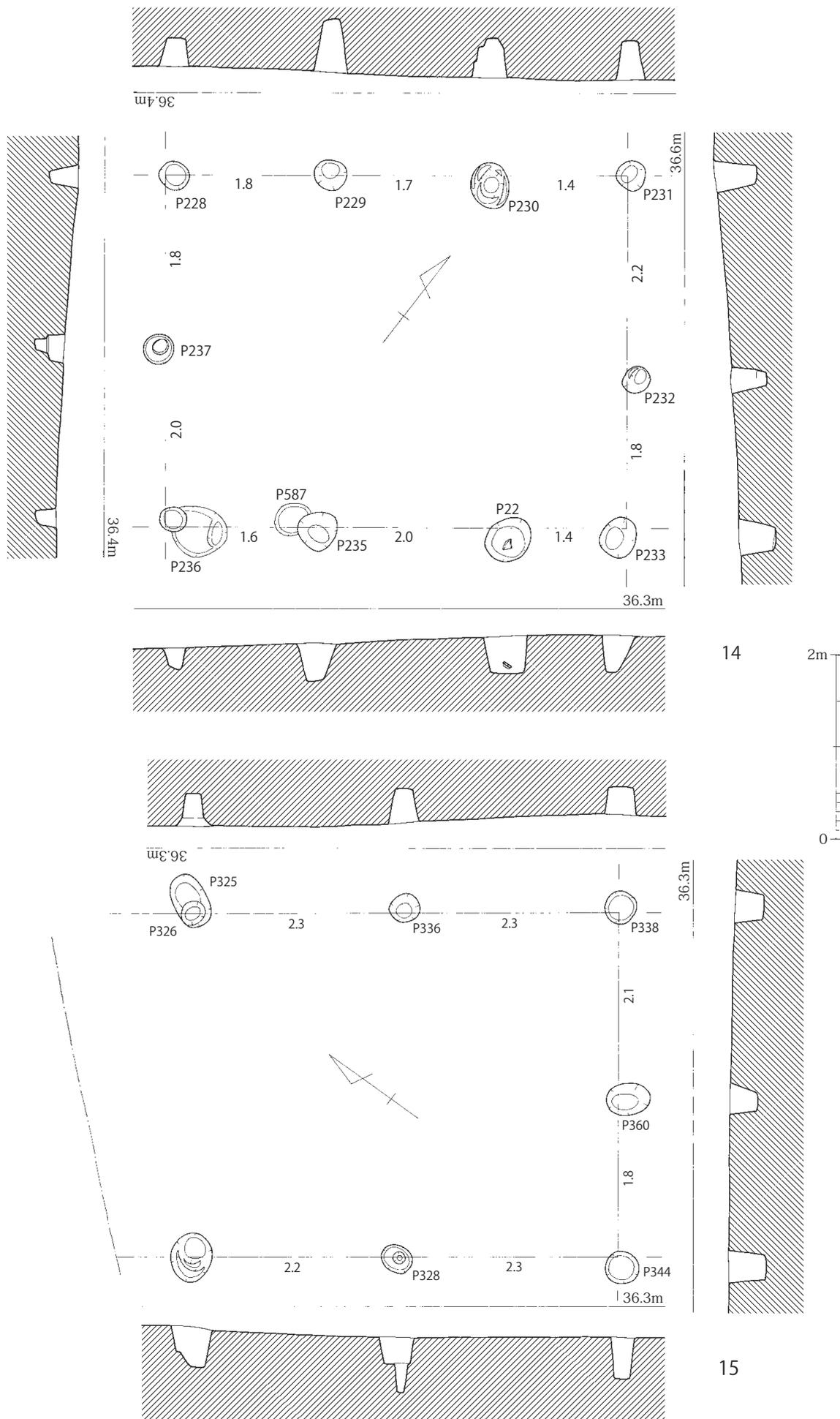
第12図 11号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)



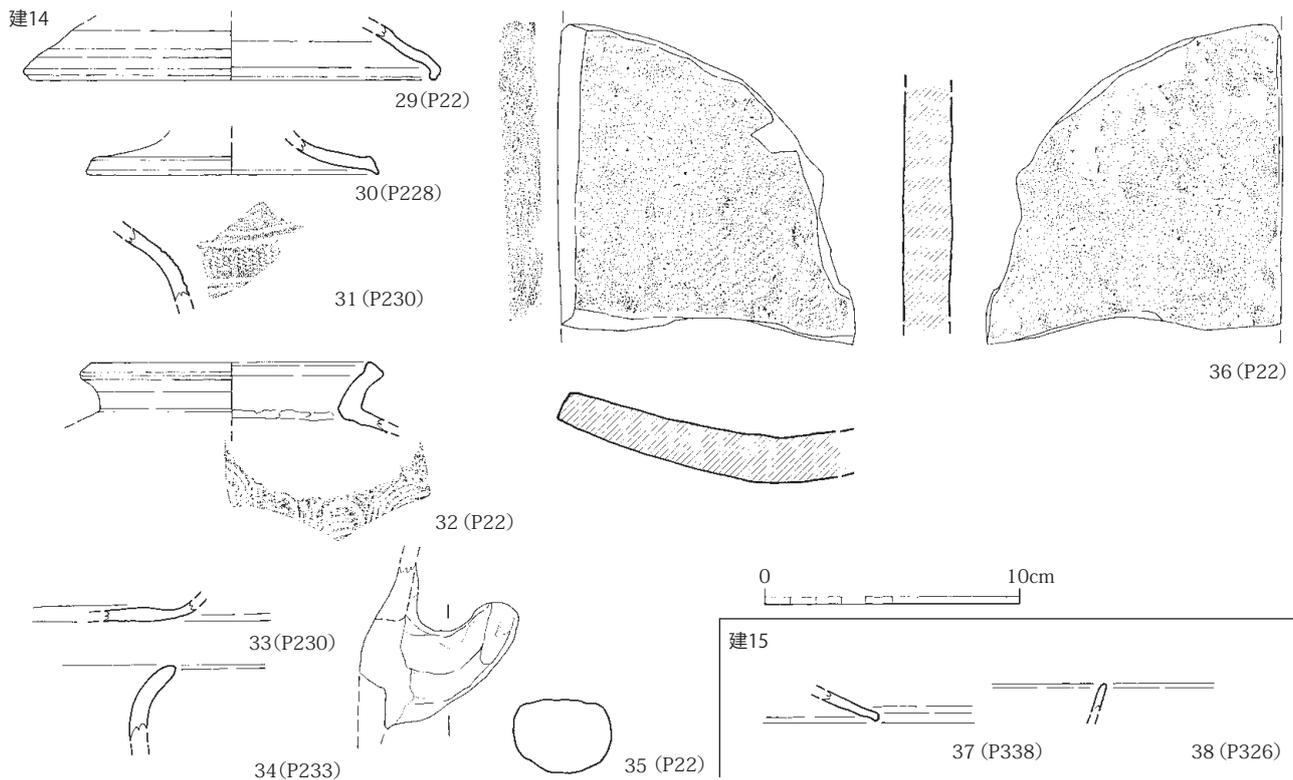
第13図 12号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)

り、天井部に向かって膨らんでいる。復元口径で16.0cmを測る。内外面とも回転ナデ調整である。30は高坏の脚部片で、脚端部は厚く、外側に向かって大きく広がる。31は竅の体部片か。内面は回転ナデ調整で、外面には刺突文が残る。32は甕又は壺の口縁～頸部にかけての破片か。口縁付近は肉厚で、端部は角張る。内面は同心円の叩きを施すが、その他は回転ナデ調整である。

33～35は土師器である。33は坏の底部片で、底面外面にはヘラ切りで、内面はナデ調整である。34は甕口縁部片で、口縁端部に向かって内湾しながら外側に開く。内外面ともナデ調整である。35は土師器甕の把手片で、指ナデの痕跡が明瞭に残る。36は平瓦片である。焼成はやや軟質で灰褐色になる。調整は外面に格子目状の叩き、内面には布目となる。



第14図 14・15号掘立柱建物跡実測図 (1/ 60)



第15図 14・15号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3)

15号掘立柱建物跡 (図版8、第14図)

14号掘立柱建物跡の南に位置する。柱穴は径0.3~0.4m、深さ0.3~0.45mを測り、現状では2×2間は確認できた。さらにもう1間以上西側に広がると思われたが、Ⅱ区では検出されなかった。建物方向はN-54°-E、柱穴間距離は南北方向で2.2~2.3m、東西方向で1.8~2.1mを測る。掘立柱建物の時期は須恵器の坏蓋片から8世紀頃と考えられる。P325、326、328、336、338、344、360からも遺物が出土した。

出土土器 (第15図)

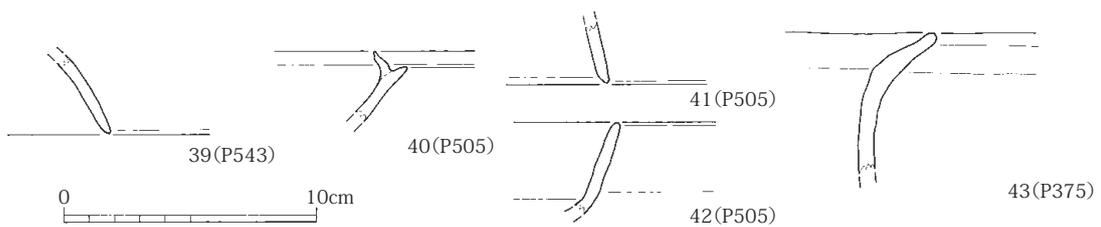
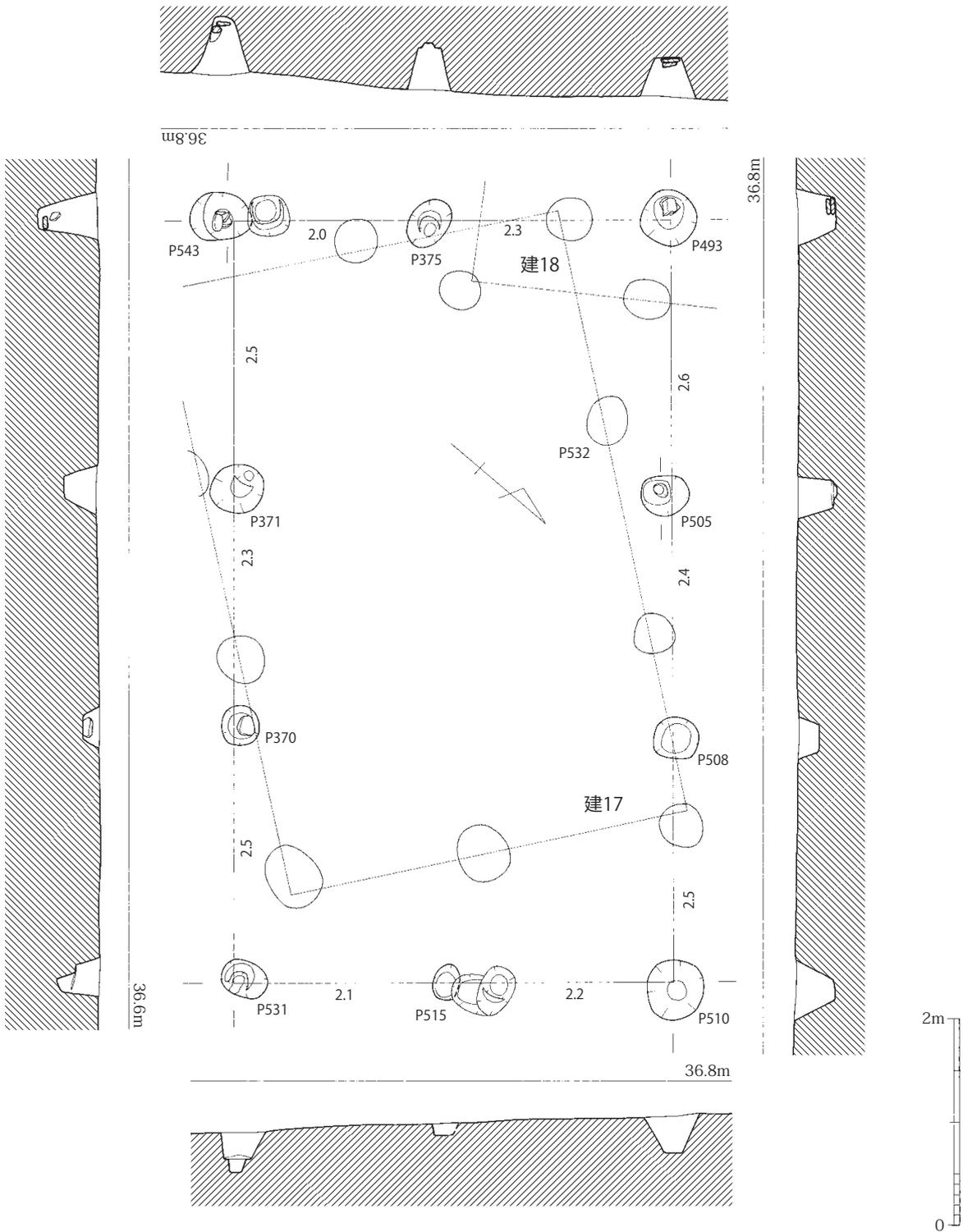
37は、口縁端部が僅かに嘴状になる須恵器の坏蓋片か。38は須恵器壙口縁部の小片である。調整は、いずれも内外面とも回転ナデ調整である。

16号掘立柱建物跡 (図版8、第16図)

15号掘立柱建物跡の東側に位置し、17号掘立柱建物跡と重なる2×3間の建物である。建物方向はN-50°-E、柱穴間距離は南北方向で2.0~2.3m、東西方向で2.3~2.6m、柱穴は径0.25~0.5m、深さ0.15~0.6mを測る。P370・493・543の底面には、0.1m前後の石を据えていた。掘立柱建物の時期は出土土器から17号掘立柱建物跡より古い7世紀中~後半頃か。P370・371・375・493・505・508・510・515・531・543からも遺物が出土した。

出土土器 (第16図)

39~42は須恵器である。39は坏蓋の口縁部片か。40は坏身片で、口縁及び受け部が短い。41と42は壙の口縁部片か。口縁端部に向かって真っ直ぐに伸びる。いずれも内外面とも回転ナデ調整である。43は土師器の甕片である。頸部が「く」字形で、口縁端部に向かって外に開く。磨滅していて調整は不鮮明だが、内面にケズリの痕跡が僅かに残る。



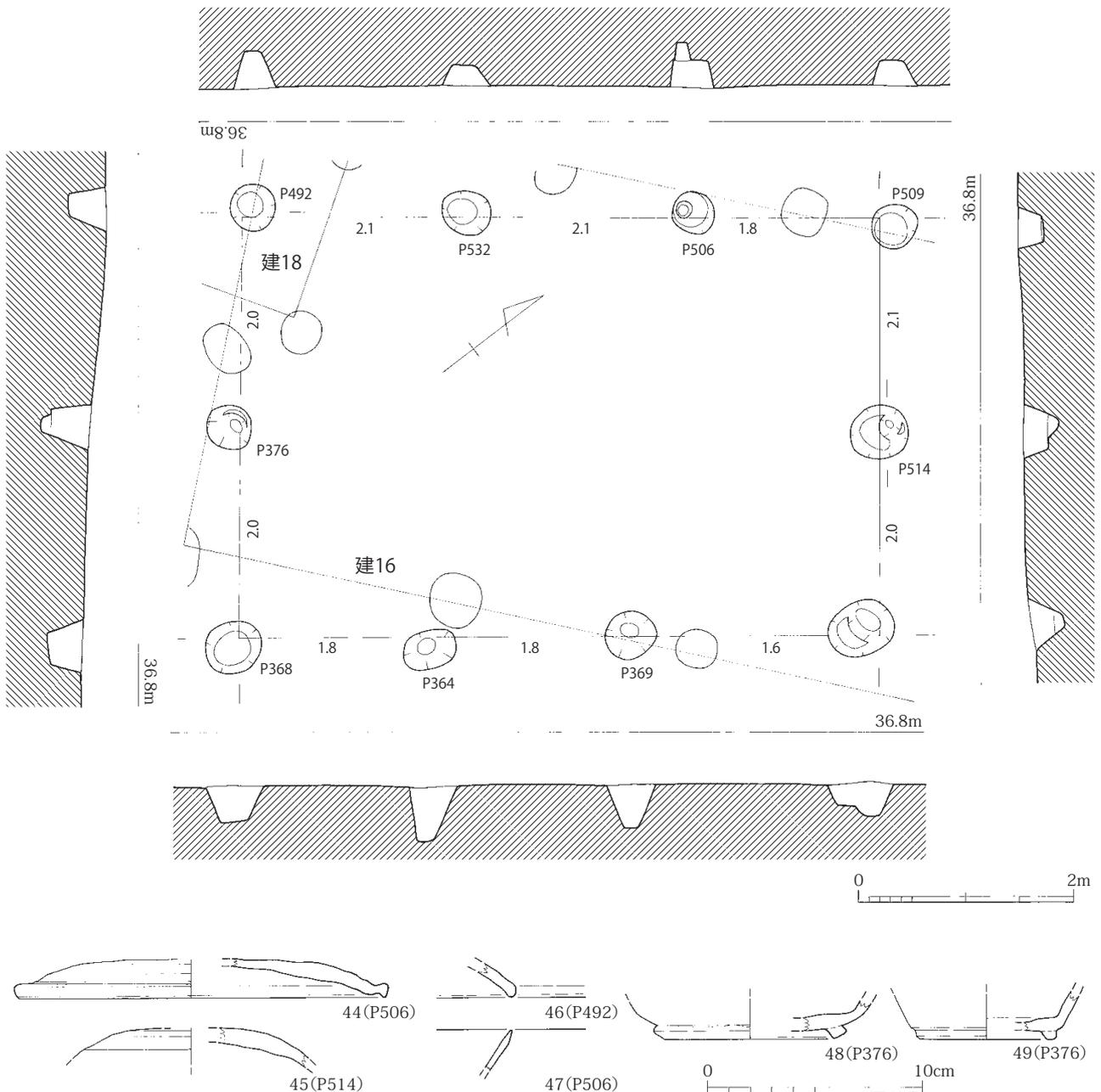
第16図 16号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)

17号掘立柱建物跡 (図版8、第16図)

16号掘立柱建物跡よりやや北西にずれて重なる2×3間の建物である。建物方向はN-37°-E、柱穴間距離は南北方向で1.6~2.1m、東西方向で2.0mを測る。柱穴は、ほぼ円形で径0.3~0.5m、深さ0.2~0.5mを測る。柱痕跡は確認できなかったが、柱穴の底面には0.1m程痕跡が残る。掘立柱建物の時期は出土土器から16号掘立柱建物跡より後出する8世紀頃と考えられる。P364、368、369、376、492、506、509、514、532から遺物が出土した。

出土土器 (第16図)

44~46は須恵器の坏蓋片である。44は口縁端部は嘴状に折れ曲がり、復元口径18.0cm、器高1.8cmを測る。45は天井部片か。外面はヘラケズリ、内面には回転ナデを施す。ここでは蓋とした。46は口縁部片で端部は丸く厚い。47は壺の口縁部片で、48と49は口縁部を欠損する須恵器の壺片で、高台部分は断面四角形になり、外に向かって開く。高台径8.8、6.6cmを測る。



第17図 17号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)

18号掘立柱建物跡（図版8、第18図）

17号掘立柱建物跡の南側に位置し、I・II区で唯一検出した2×3間の総柱建物である。建物方向はN-56°-E、柱穴間距離は1.5～1.8m、柱穴は円形又は長円形で径0.25～0.7m、深さ0.3～0.5mを測る。掘立柱建物の時期は、22号掘立柱建物跡に柱穴が切られることや周辺の状況などから7世紀前半頃と考えられる。P361、382、489、491から遺物が出土した。

出土土器（第18図）

50は坏蓋片で、体部中程に段がつく。調整は内外面ともナデ、天井部のみヘラケズリを施す。

19号掘立柱建物跡（図版9、第19図）

15号掘立柱建物跡の西に位置する2×4間の建物である。建物方向はN-48°-E、柱穴間距離は2.4、2.7mを測る。掘り方も円形及び長円形を呈し、大きさ及び深さとも0.4～0.6mを測る。ほとんどの柱穴では径0.15mの柱痕跡も確認でき、またその底面には0.1～0.2m程の平坦な石を据えていた。今回検出した中では、一番大きい掘立柱建物跡である。掘立柱建物の時期は、須恵器坏蓋口縁部片から7世紀中～後半頃と考えられる。P402、405、406、476、479～482、486～488から遺物が出土した。

出土土器（第18図）

51から55は須恵器片である。51・52は坏蓋口縁部片で、52は口縁端部が嘴状になる。53は坏身口縁部の小片である。54は埴口縁部の小片で口縁端部に向かって真っ直ぐに伸びる。55は坏片か。いずれも内外面とも回転ナデ調整である。

20号掘立柱建物跡（第20図）

19号掘立柱建物跡の内側で確認した2×2間の建物である。建物方向はN-42°-E、柱穴間距離は南北方向で0.9～1.7m、東西方向で1.3～1.4mを測る。柱穴はそれぞれ径0.3～0.4m、深さ0.2～0.4mを測るが、柱痕跡は全く確認できなかった。北側の柱穴列のみが4つ並んでいる状態で検出した。掘立柱建物の時期は出土土器が少なく難しいが、19号掘立柱建物跡より後出する8世紀頃と考えられる。P418、419、483、485、495から遺物が出土した。

出土土器（第20図）

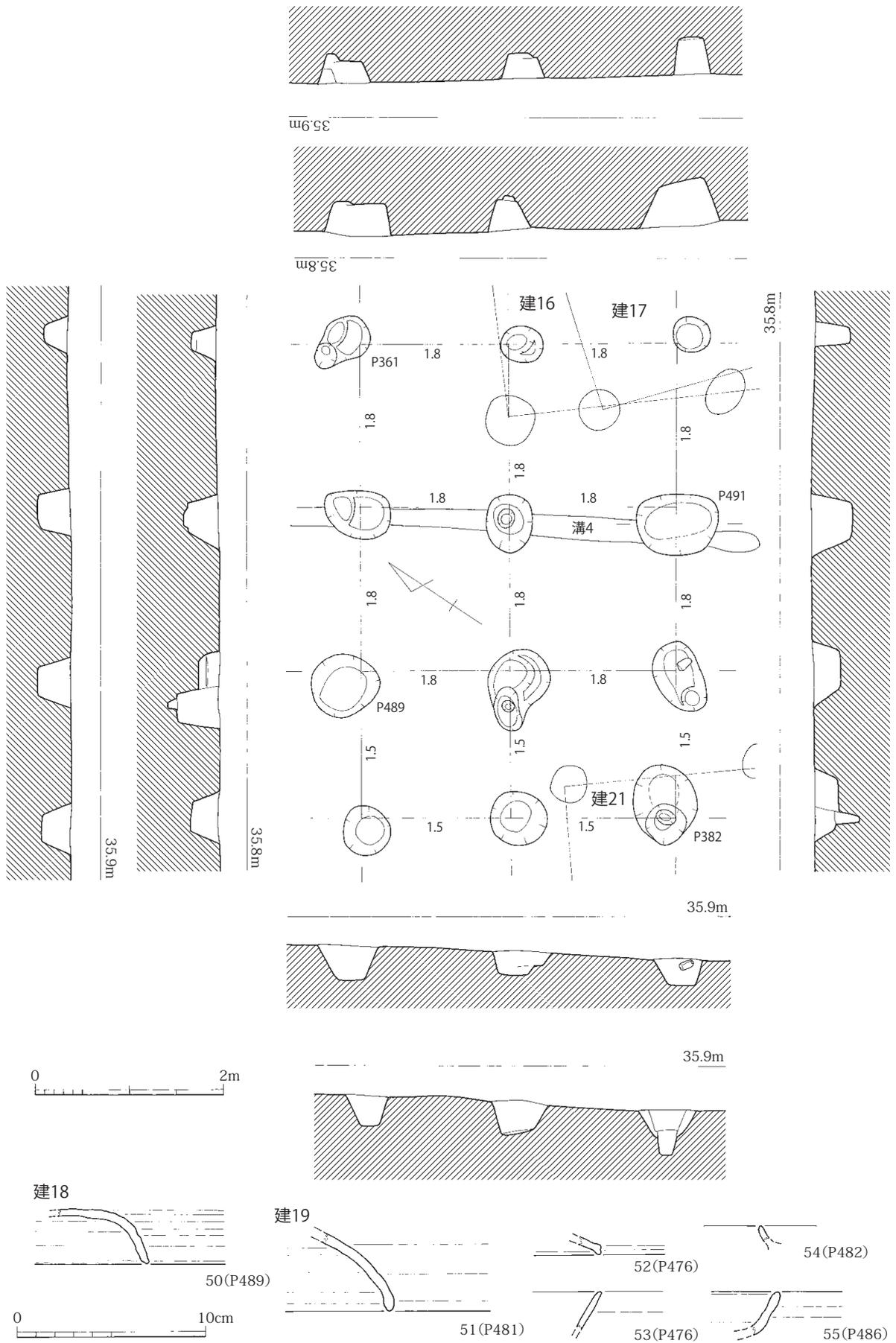
56は須恵器の坏蓋片で、天井部に向かって緩やかに曲がる。内外面とも回転ナデ調整である。

21号掘立柱建物跡（図版9、第21図）

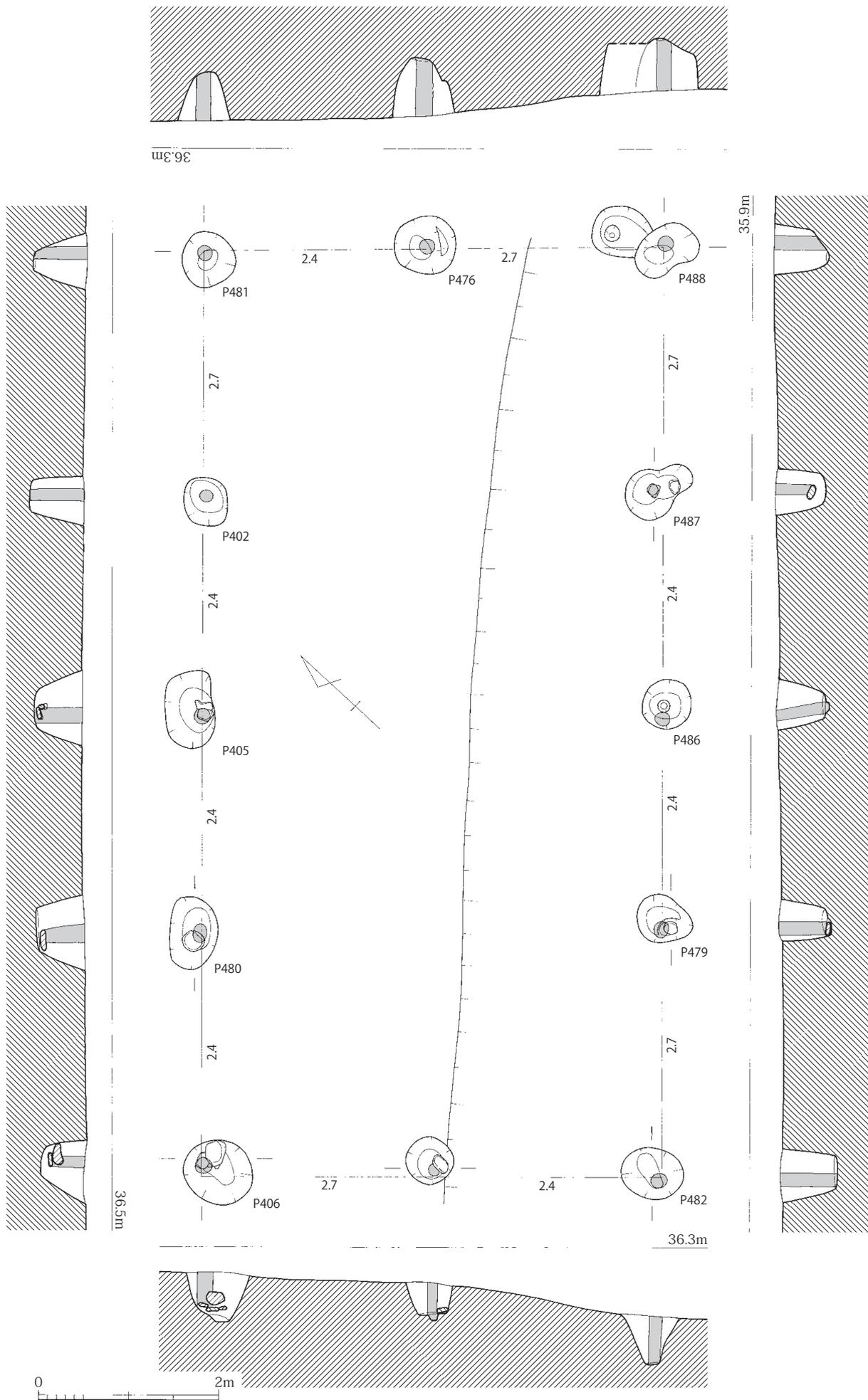
19号掘立柱建物跡の南東側に位置する2×4間の建物である。建物方向はN-50°-E、柱穴間距離は1.9～2.2mを測る。柱穴はほぼ円形で径0.2～0.45m、深さ0.15～0.4mを測る。柱痕跡は検出されなかったが、底面には0.1m前後の石を据えていた。掘立柱建物の時期は、一部の柱穴が22号掘立柱建物跡に切ることや19号掘立柱建物跡と同方向に建つことから、7世紀中～後半頃と考えられる。P377、379、380、470、472、473、490から遺物が出土した。

出土土器（第21図）

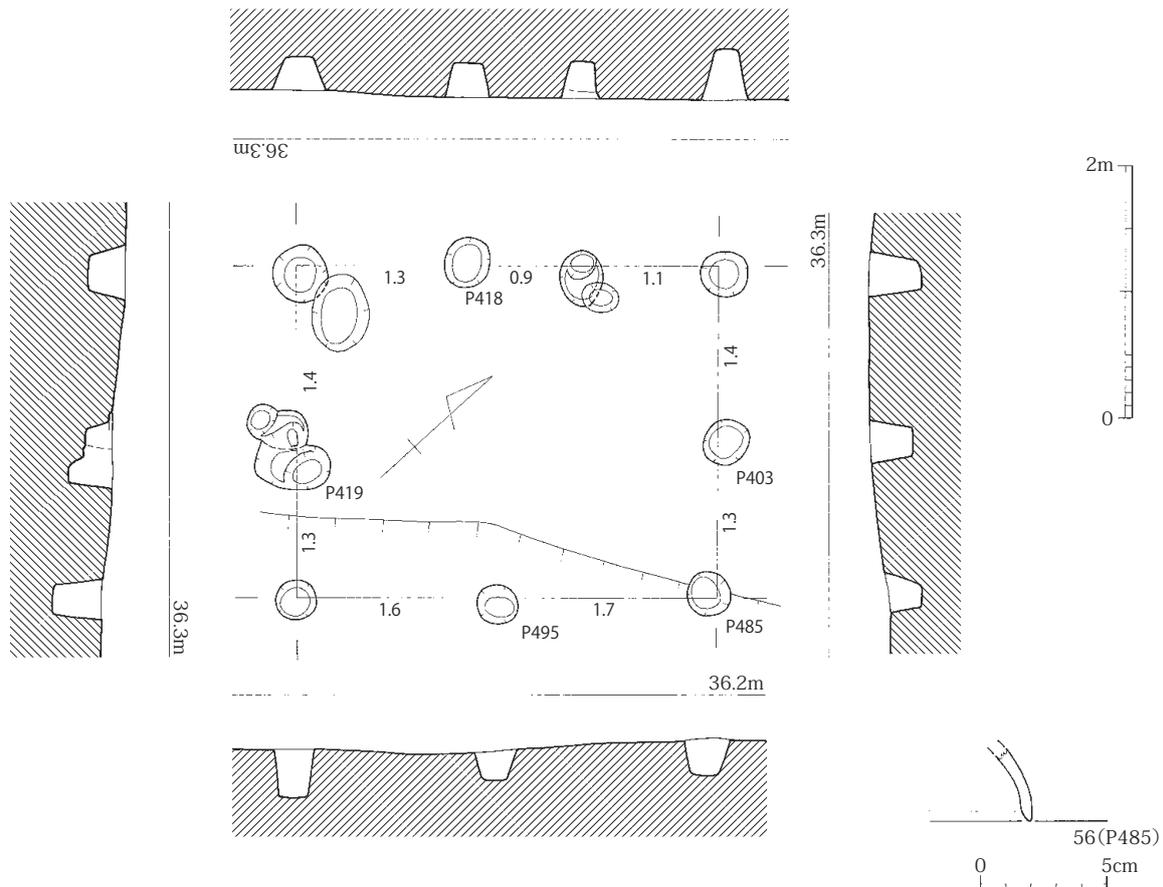
57は胴部から底部にかけて欠損する須恵器の小壺片か。復元口径5.0cmを測る口縁部は、短く僅かに外に開き、胴部中程で最大径をとる形状になる。全体的に薄手で作られていて、調整は内外面とも回転ナデである。



第18図 18号掘立柱建物跡および18・19号掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/60・1/3)



第19图 19号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



第20図 20号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)

22号掘立柱建物跡 (図版9、第21図)

21号掘立柱建物跡と東隅で重なる位置にあり、それより1間縮小した2×3間の建物である。建物方向はN-48°-E、柱穴間距離は南北方向に1.4~2.0m、東西方向に1.6mを測る。柱穴は円形で径0.4m前後、深さ0.2~0.5mを測るが、柱痕跡は確認できなかった。掘立柱建物の時期は、出土した須恵器碗の高台片や21号掘立柱建物跡の柱穴を切ることなどから8世紀頃と考えられる。P378、381、471、474から遺物が出土した。

出土土器 (第21図)

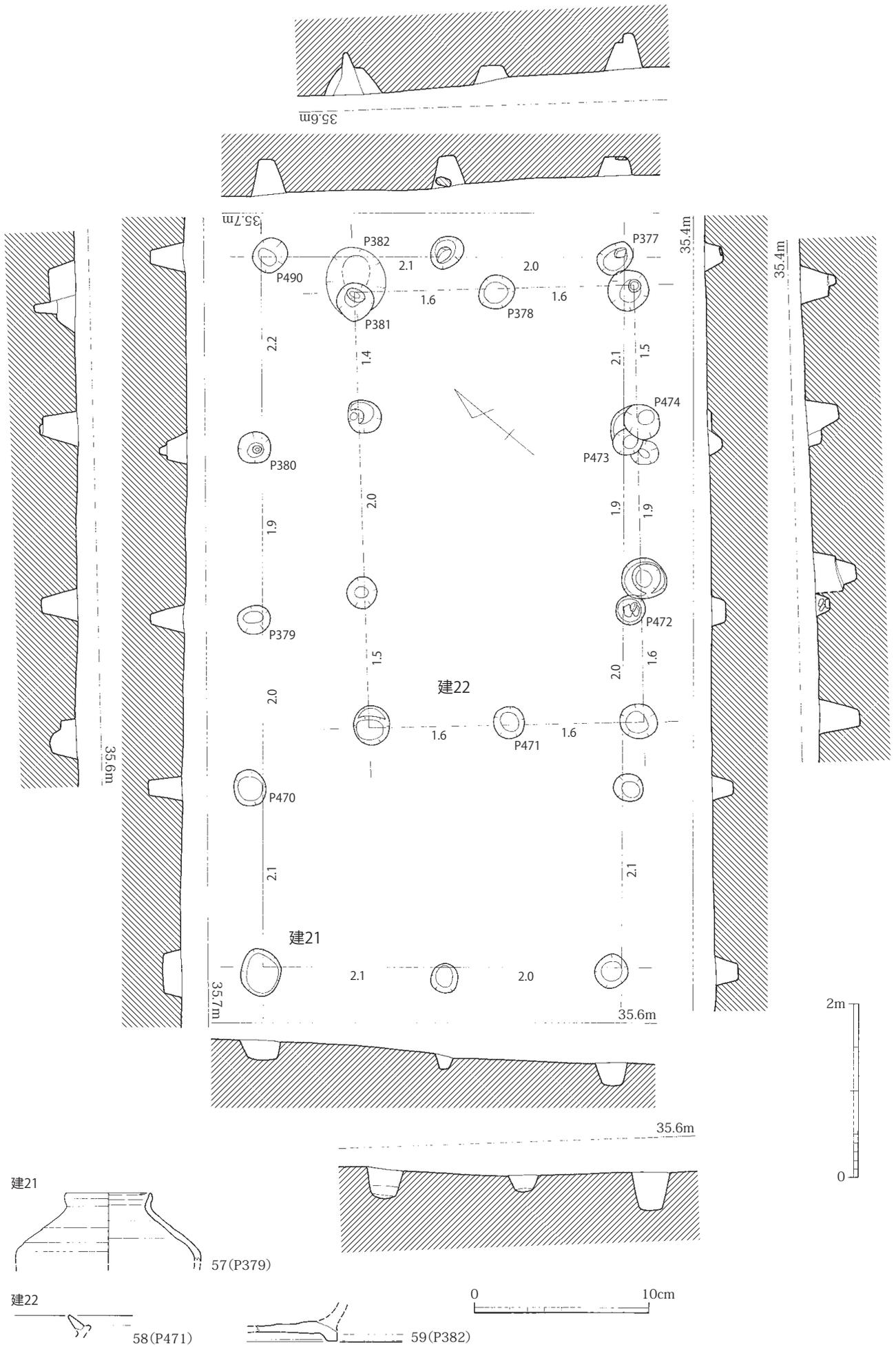
58は須恵器坏身の口縁端部の小片である。59は須恵器碗の高台片で、高台より上部が剥離して坏部を欠損する。高台は断面四角形である。焼成は甘く軟質で白色になる。

23号掘立柱建物跡 (図版9、第22図)

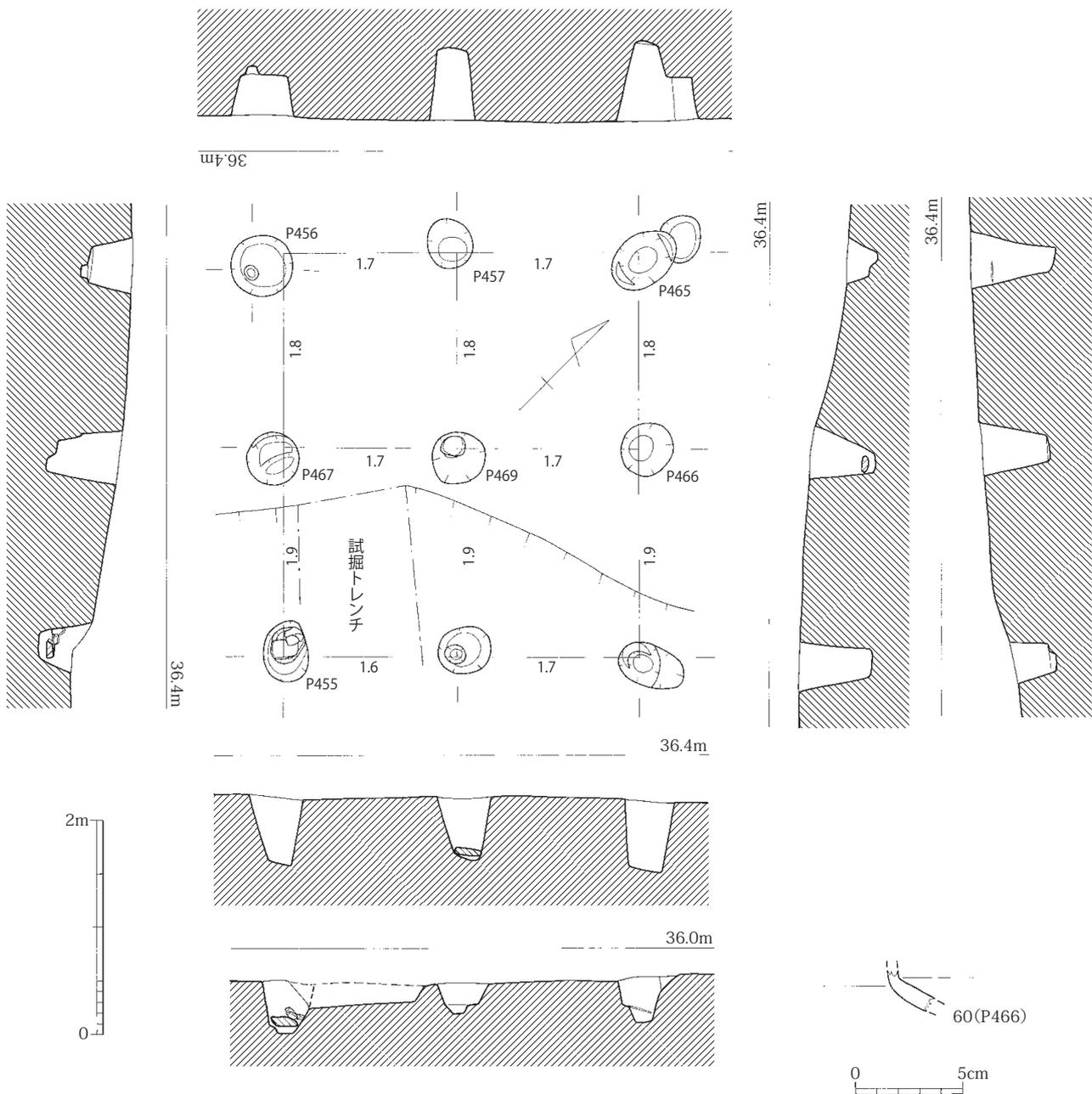
I区西側の最南端の5号溝の北側に位置し、24号掘立柱建物跡と並んで検出した2×2間の総柱建物である。建物方向はN-45°-E、柱穴間距離は1.7~1.9mを測る。柱穴は円形で径0.4~0.6m、深さ0.3~0.6mを測り、柱穴底面には0.2m前後の石を据えていた。出土遺物が少なく詳細な時期を検討するのは難しいが、周辺の掘立柱建物跡の状況から7世紀中~後半頃の時期が考えられる。P455~457、465、466、467、469から遺物が出土した。

出土土器 (図版9、第22図)

60は須恵器の甕又は壺の頸部片である。内外面とも回転ナデ調整である。



第21図 21・22号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)



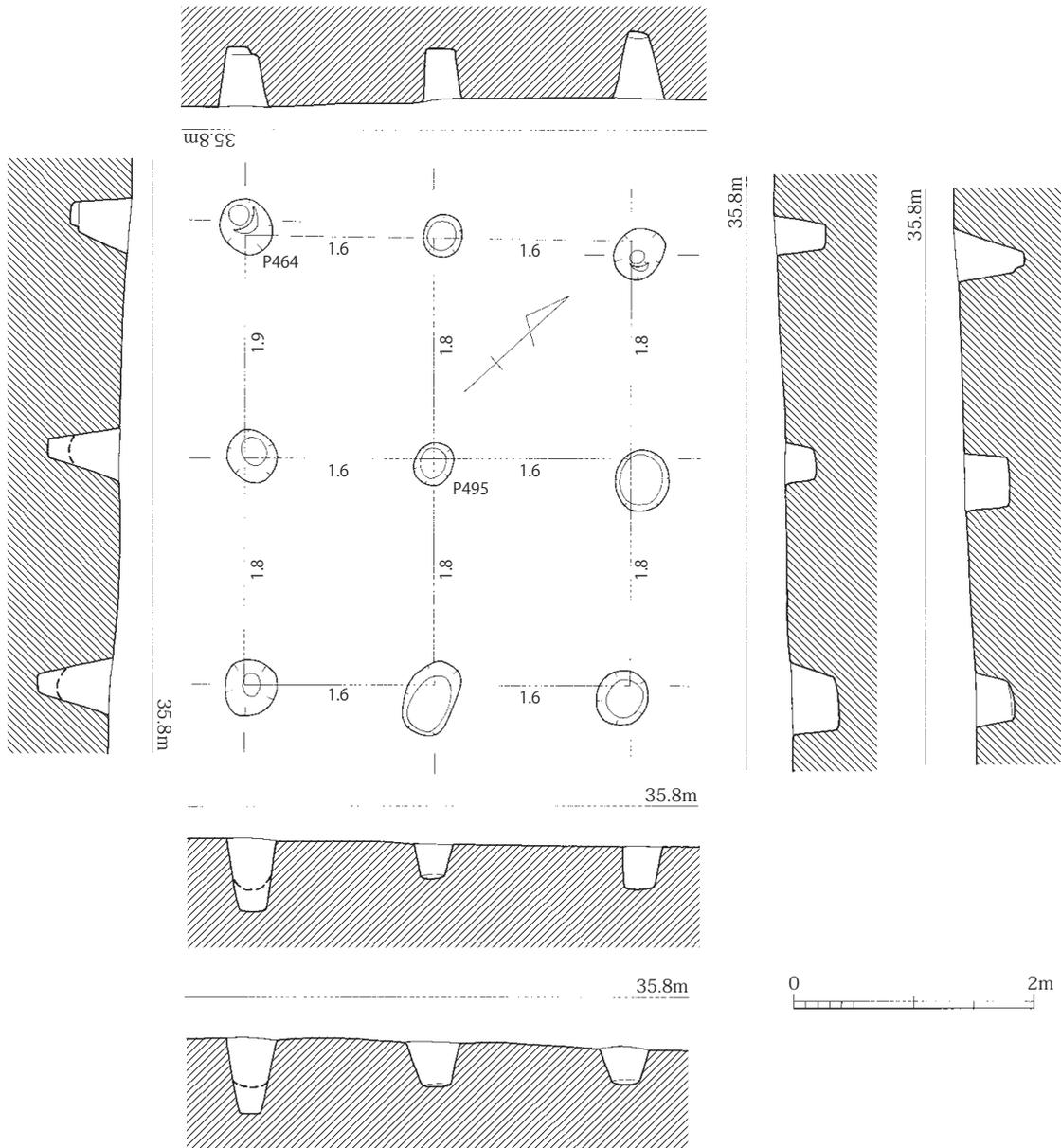
第22図 23号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)

24号掘立柱建物跡 (図版10、第23図)

23号掘立柱建物跡のすぐ東側に位置する2×2間の総柱建物である。建物方向はN-43°-E、柱穴間距離は1.6~1.9m、柱穴は円形で径0.35~0.6m、一部掘りすぎていて深さ0.3~0.4mを測る。柱痕跡は確認できなかった。23号掘立柱建物跡と並列に建てられていることなどから同時期の可能性がある。P464、495から遺物が出土したが、図化できる遺物はなかった。

25号掘立柱建物跡 (図版10、第24図)

I区北西側の谷部底面近くの平坦面に位置する2×2の建物である。建物方向はN-50°-E、柱穴間距離は南北方向で1.5~1.8m、東西方向で1.5~1.8mを測る。柱穴は一部、掘りすぎているが、径0.3~0.6m、深さ0.2~0.5mを測る。出土遺物はなく詳細な時期は不明だが、周辺の建物との関係を考慮すると7世紀中~後半以降と考えられる。



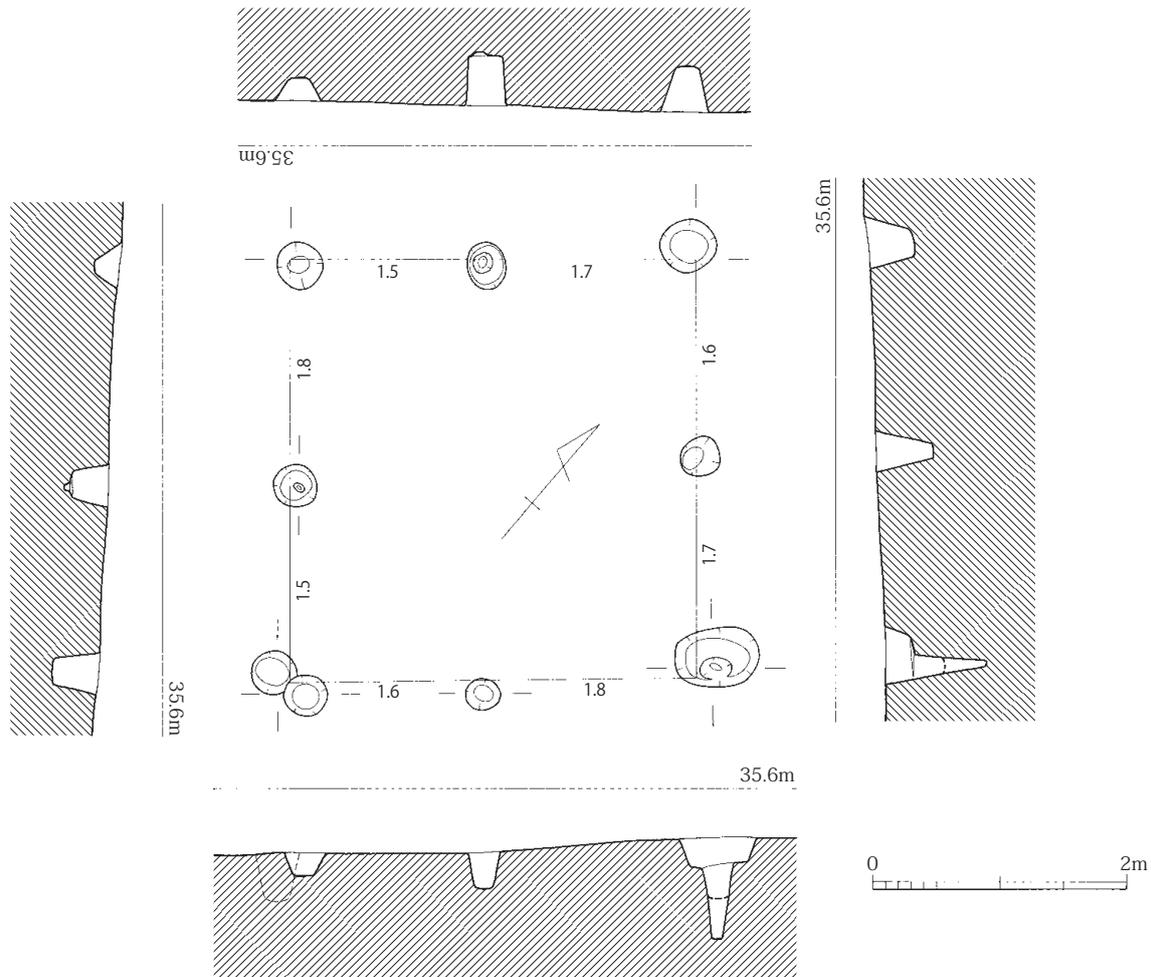
第23図 24号掘立柱建物跡実測図 (1/ 60)

26号掘立柱建物跡 (図版10、第25図)

18号掘立柱建物跡の東側に位置し、27号掘立柱建物跡と重なる2×3間の建物である。建物方向はN-55°-E、柱穴間距離は南北方向で1.3~1.5m、東西方向で1.5~1.6mを測る。柱穴は円形又は長円形で径0.3~0.5m、深さ0.15~0.3mを測り、一部の柱底面から0.15m程の柱痕跡を確認した。掘立柱建物の時期は、出土した須恵器片から8世紀頃か。P392、393、394、440、501、517、518、523、529、530から遺物が出土した。

出土土器 (第25図)

61は須恵器坏蓋片で、口縁端部は嘴状で僅かに折れ曲がる。62は口縁と底部を欠損する須恵器碗片で、復元高台径で8.8cmを測る。いずれも調整は内外面とも回転ナデである。63は丸瓦の玉縁片である。焼成は軟質で、灰黄色を呈し、磨滅しているため調整は不明である。



第24図 25号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

27号掘立柱建物跡 (図版10、第25図)

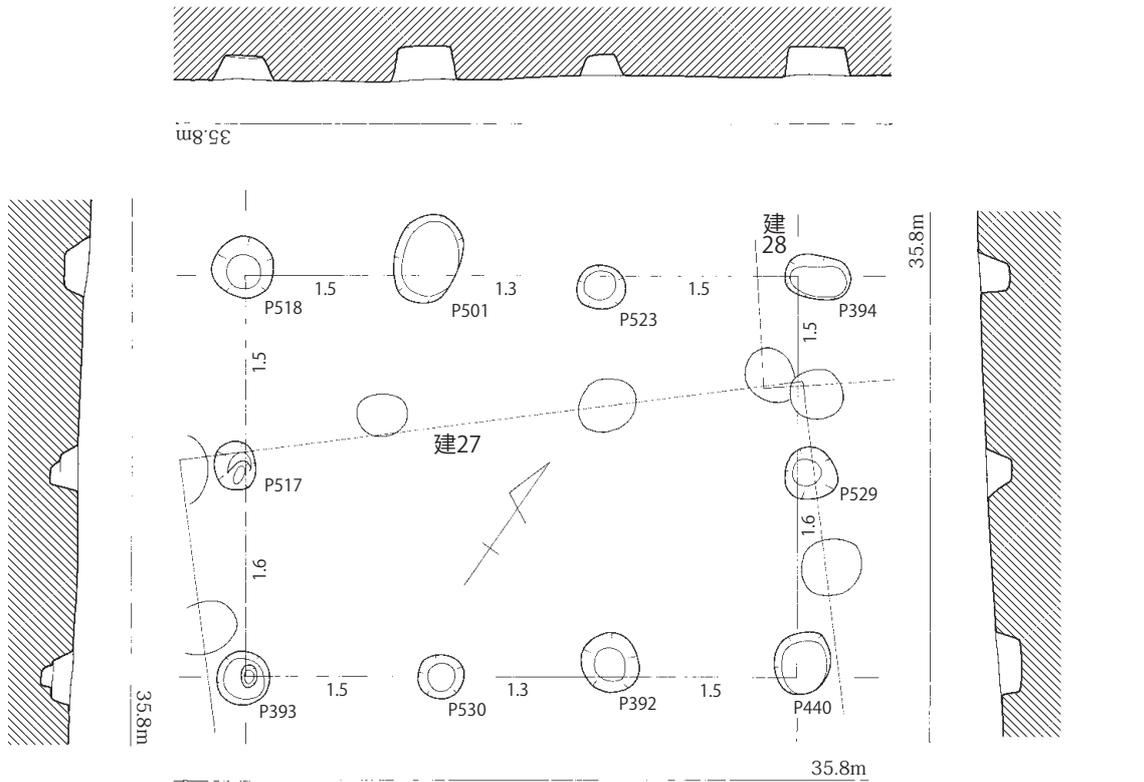
26号掘立柱建物跡と重なる2×3間の建物である。建物方向はN-48°-E、柱穴間距離は南北方向で1.5~1.8m、東西方向で1.4~1.7mを測る。26号掘立柱建物跡より柱間距離は若干広く、柱穴は円形で径0.3~0.5m、深さ0.15~0.4mを測る。一部の柱穴底面からは0.1m程の柱痕跡を確認した。掘立柱建物の時期は出土土器などから、26号掘立柱建物跡より後出する8世紀頃と考えられる。P388、389、391、395、439、441、516、525、526、528から遺物が出土した。

出土土器 (第26図)

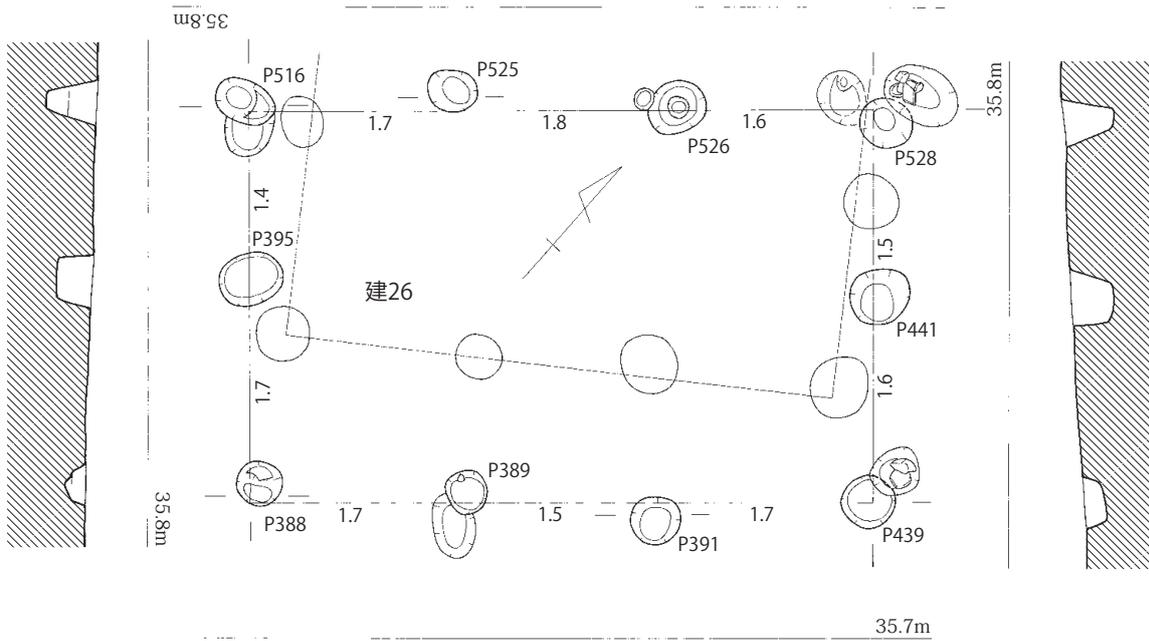
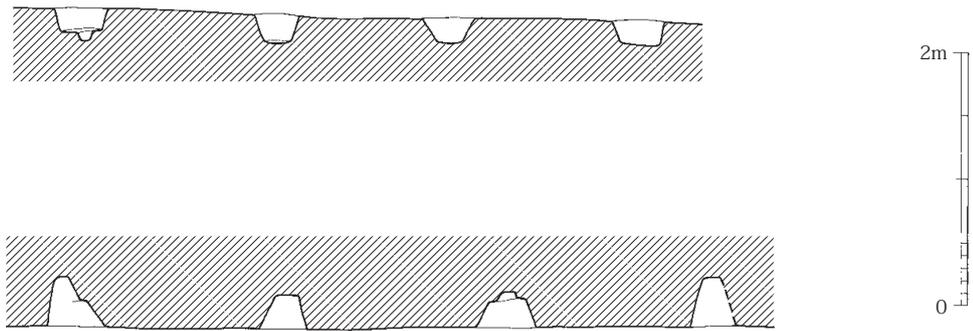
64~67は須恵器である。64は坏蓋片、65は坏身片である。いずれも蓋と身の逆の可能性はある。66と67は埴片である。66は復元口径13.2cmを測る。67の体部は直線的で外に向かって開く。高台は断面四角形状で、復元高台径11.4cmを測る。68は土師器皿片で、外面底部にヘラ切りの痕跡がある。69は土師器甕片で、口縁部に向かって「く」字形に開く。

28号掘立柱建物跡 (図版10、第27図)

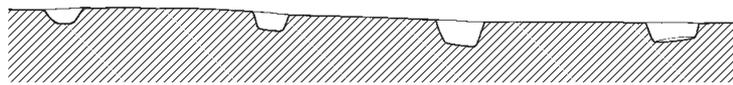
9号掘立柱建物跡と重なる位置で確認した2×3間である。建物方向はN-52°-E、柱穴間距離は南北方向で1.7~2.1m、東西方向で2.1~2.4mを測る。柱穴は円形で径0.4~0.6m、深さ0.15~0.5mを測るが、柱痕跡は全く確認できなかった。一部の柱穴が、12号土坑と重なっ



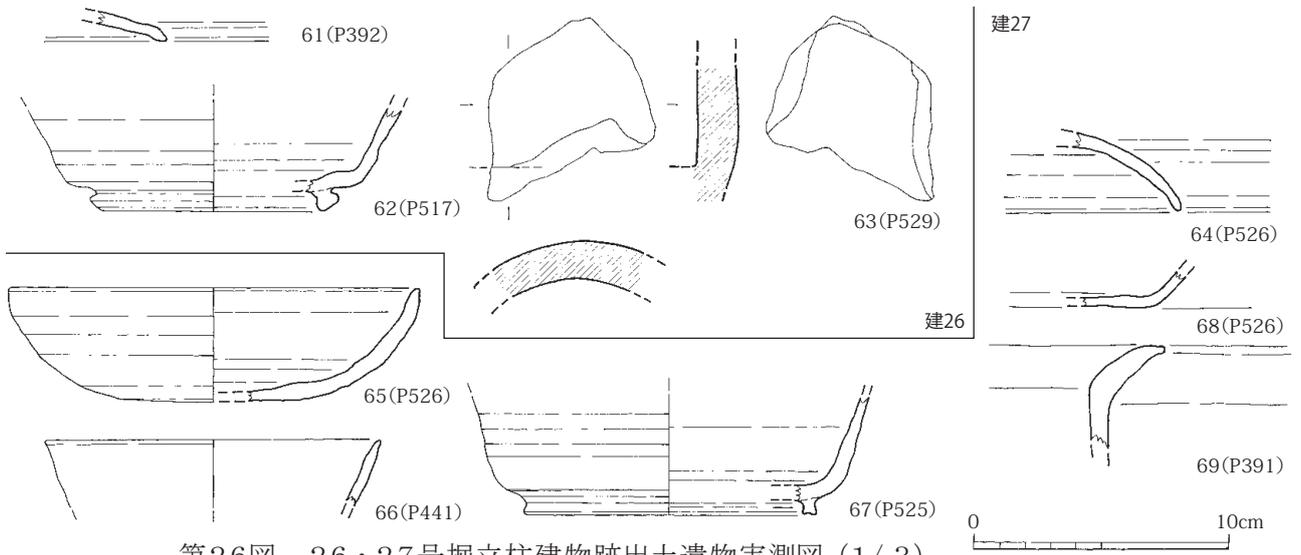
26



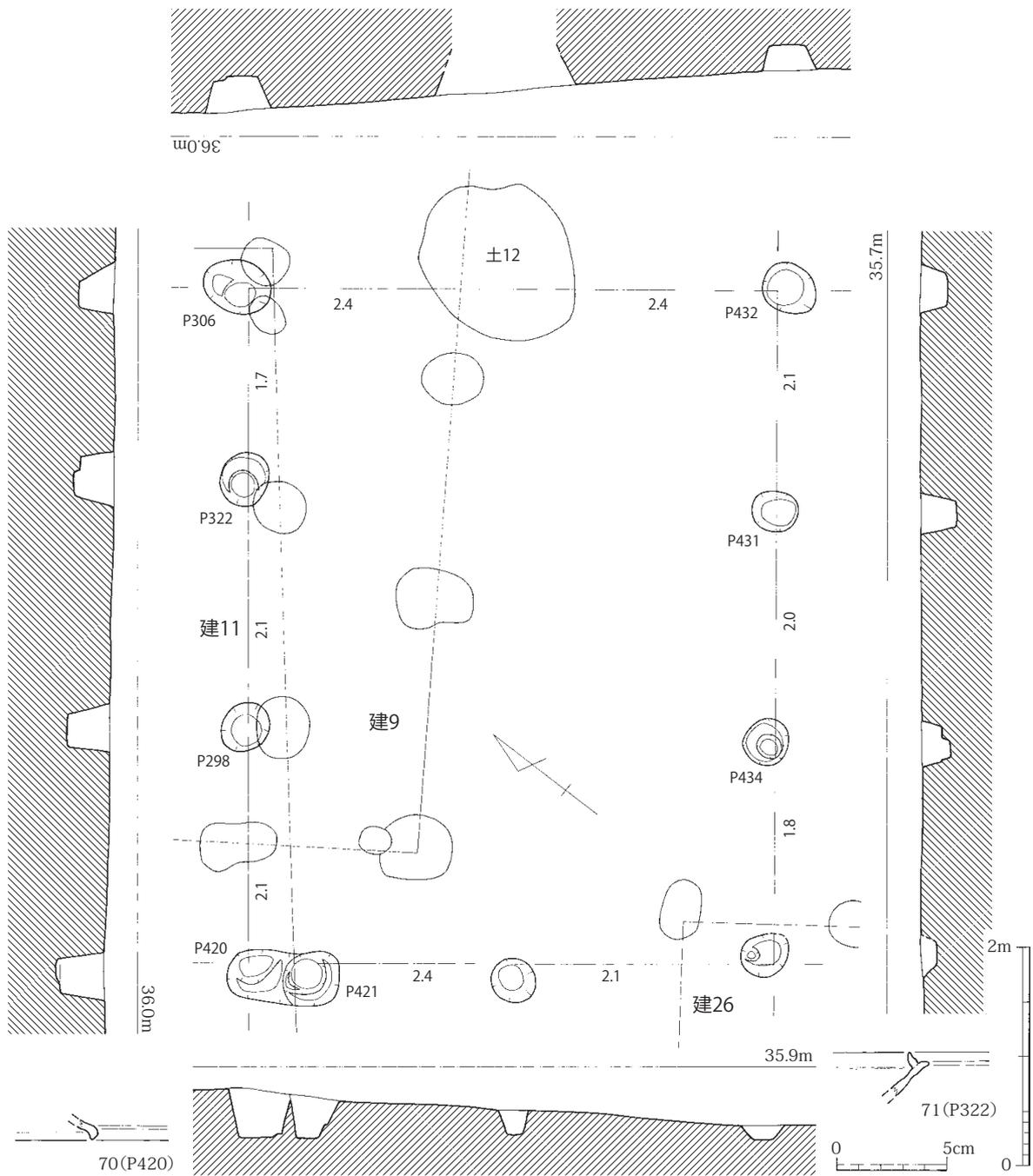
27



第25图 26·27号掘立柱建物跡実測図 (1/ 60)



第26図 26・27号掘立柱建物跡出土遺物実測図 (1/3)



第27図 28号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)

ているので欠損している。掘立柱建物の時期は明確ではないが、少なくとも7世紀中頃以降と考えられる。P298、306、322、420、421、431、432、434から遺物が出土した。

28号掘立柱建物跡出土土器（第27図）

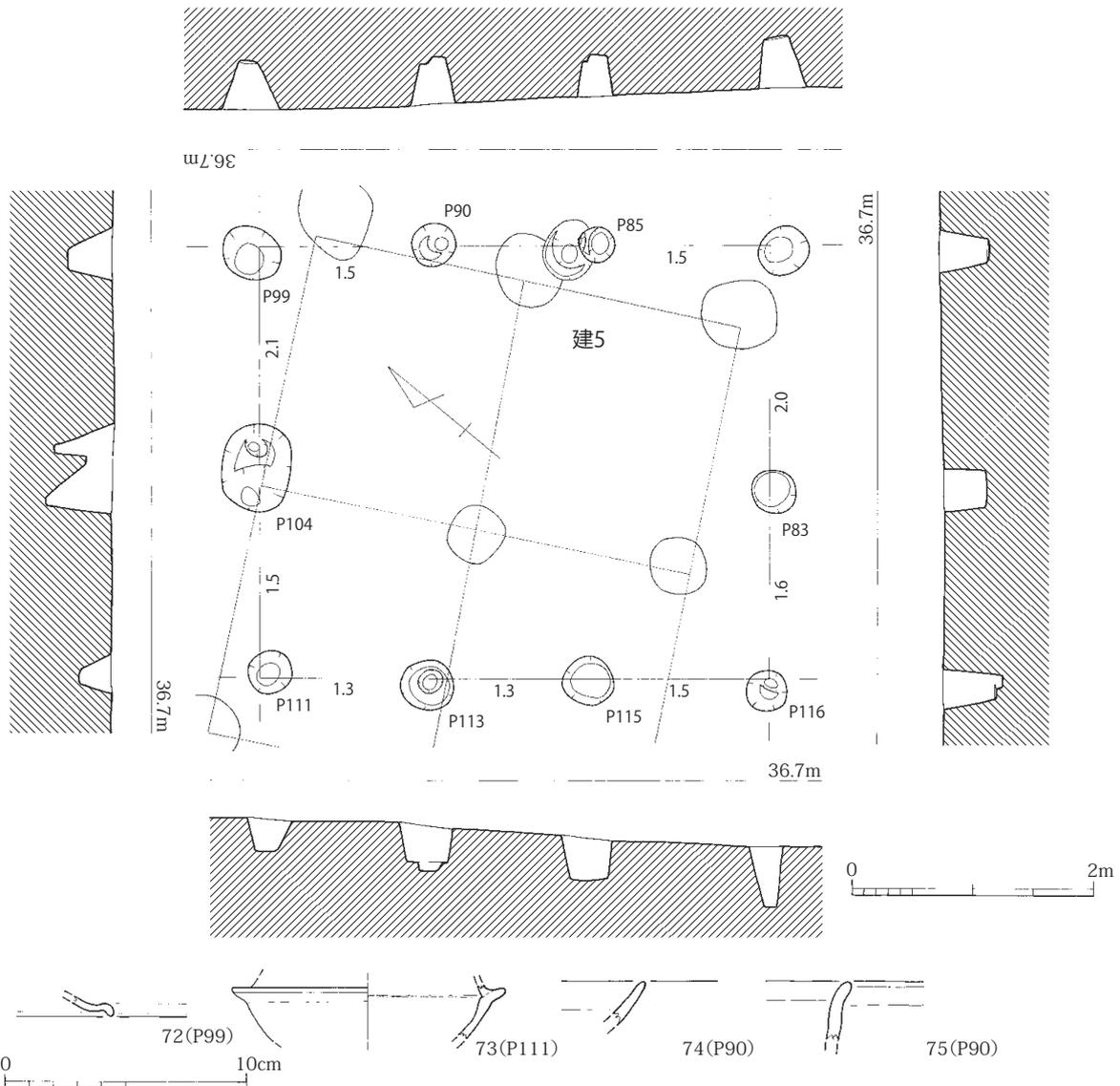
70は須恵器坏蓋の口縁部片か。僅かに端部が嘴状に折れる。71は須恵器坏身片か。口縁および受け部が短く蓋の可能性もある。

29号掘立柱建物跡（図版5、第28図）

5号掘立柱建物跡よりは西にずれて重なる位置で確認した2×3間の建物である。建物方向はN-50°-E、柱穴間距離は南北方向で1.3~1.5m、東西方向で1.5~2.1mを測る。柱穴はかなり切り合っている。ほぼ円形で径0.3~0.4m、深さ0.25~0.5mを測る。柱痕跡は全く検出されなかった。掘立柱建物の時期は出土土器から5号掘立柱建物跡より後出する7世紀中頃以降と考えられる。P83、85、90、99、104、111、113、115、116から遺物が出土した。

出土土器（第28図）

72~75は須恵器である。72は坏蓋片か。全体的に薄手で作られ、口縁端部が嘴状で折れ曲がる。73は坏身片である。口縁端部は欠損するが、復元受け部径で11.2cmを測る。74は埴の口縁部片か。75は土師器の甑などの口縁部片か。口縁端部が僅かに外側に向かって開く。



第28図 29号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)

以下は、Ⅱ区で検出した掘立柱建物跡である。Ⅱ区では、Ⅰ区と接する東側で6棟と西側の高台で1棟を検出した。

50号掘立柱建物跡（図版11、第29図）

Ⅱ区北側で検出した2×2間の総柱建物である。建物方向はN-52°-E、柱穴間距離は1.3～1.7m、柱穴はほぼ円形で径0.2～0.4m、深さ0.05～0.3mを測る。各柱穴は削平され、掘り方は浅かったが、北側の柱穴列の中央で径0.15mの柱痕跡を検出した。出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、南側で検出した55号掘立柱建物跡と建物方向は若干異なるが、8世紀前半以降の可能性が考えられる。

51号掘立柱建物跡（図版11、第30図）

50号掘立柱建物跡の南に位置する2×4間の建物である。建物方向はN-49°-E、柱穴間距離は1.6～2.1m、それぞれの柱穴は円形で径0.2～0.6m、深さ0.2m前後を測る。確認できた柱痕跡は約0.15mを測る。P1104、1108、1114、1119、1139など比較的多くの柱穴から遺物が出土したが、ほとんど小片であった。そのため掘立柱建物の時期を検討するには難しいが、P1119出土の須恵器坏身片や52号掘立柱建物跡と重なって建つことから、それより以前の7世紀中～後半頃が考えられる。

出土土器（第30図）

76は須恵器坏身片で、口縁及び底部は欠損する。口縁と受け部が短い形状から蓋の可能性も考えられる。また復元受け部径で13.0cmを測る。調整は内外面とも回転ナデである。

52号掘立柱建物跡（図版11、第31図）

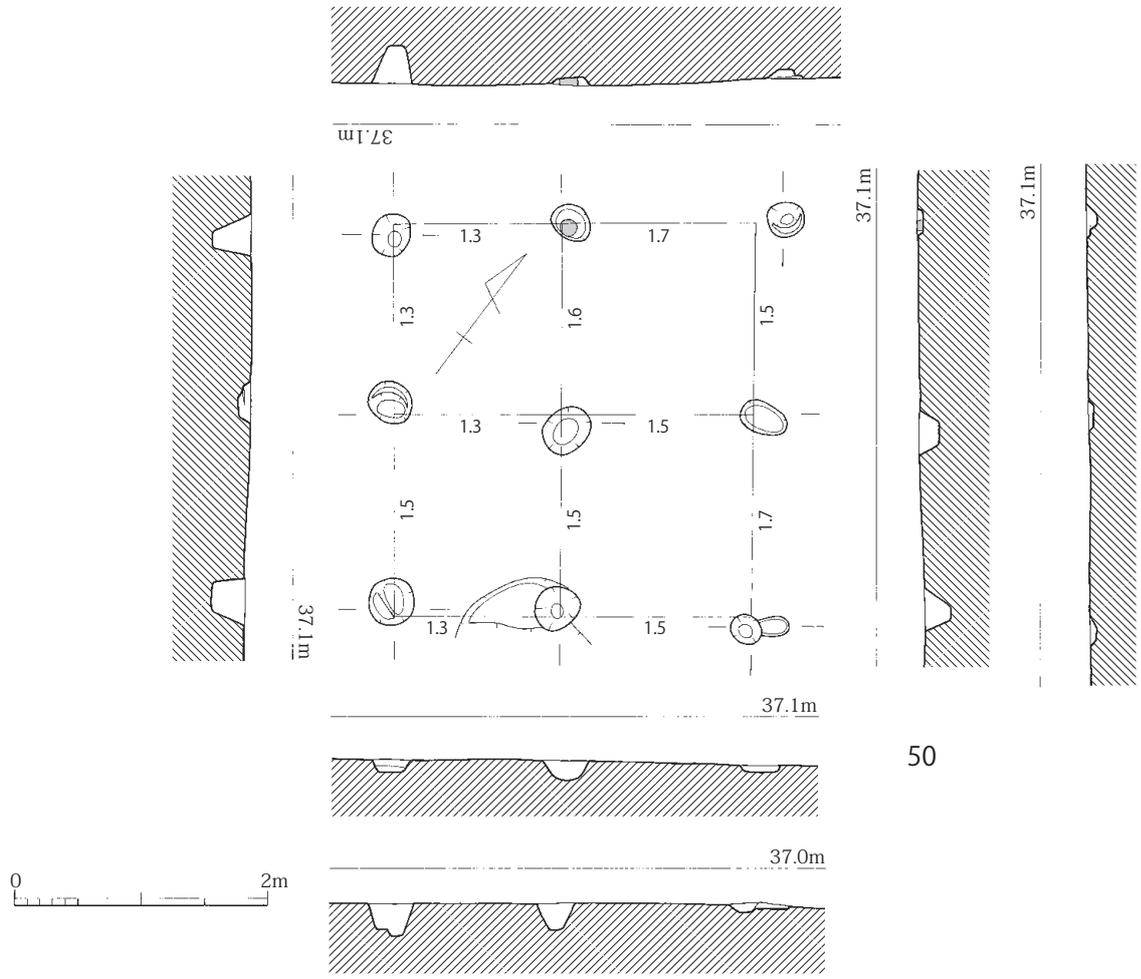
50号掘立柱建物跡の南側に位置する。建物方向はN-51°-Eとなり、ほぼ53号掘立柱建物跡と同方向の2×5間の建物である。柱穴間距離は南北方向で1.6～2.6m、東西方向で2.1～2.3mを測る。それぞれの柱穴は円形で径0.3～0.5m、深さ0.15～0.4mを測る。柱痕跡は明瞭に残り、約0.2mを測る。南側の柱穴列は、調査区外の用水路下にあるため検出できなかった。掘立柱建物の時期は、出土した須恵器の坏蓋片から8世紀頃と考えられる。なお、P1103、1110、1112、1120、1121、1124、1125、1129から遺物が出土した。

出土土器（第31図）

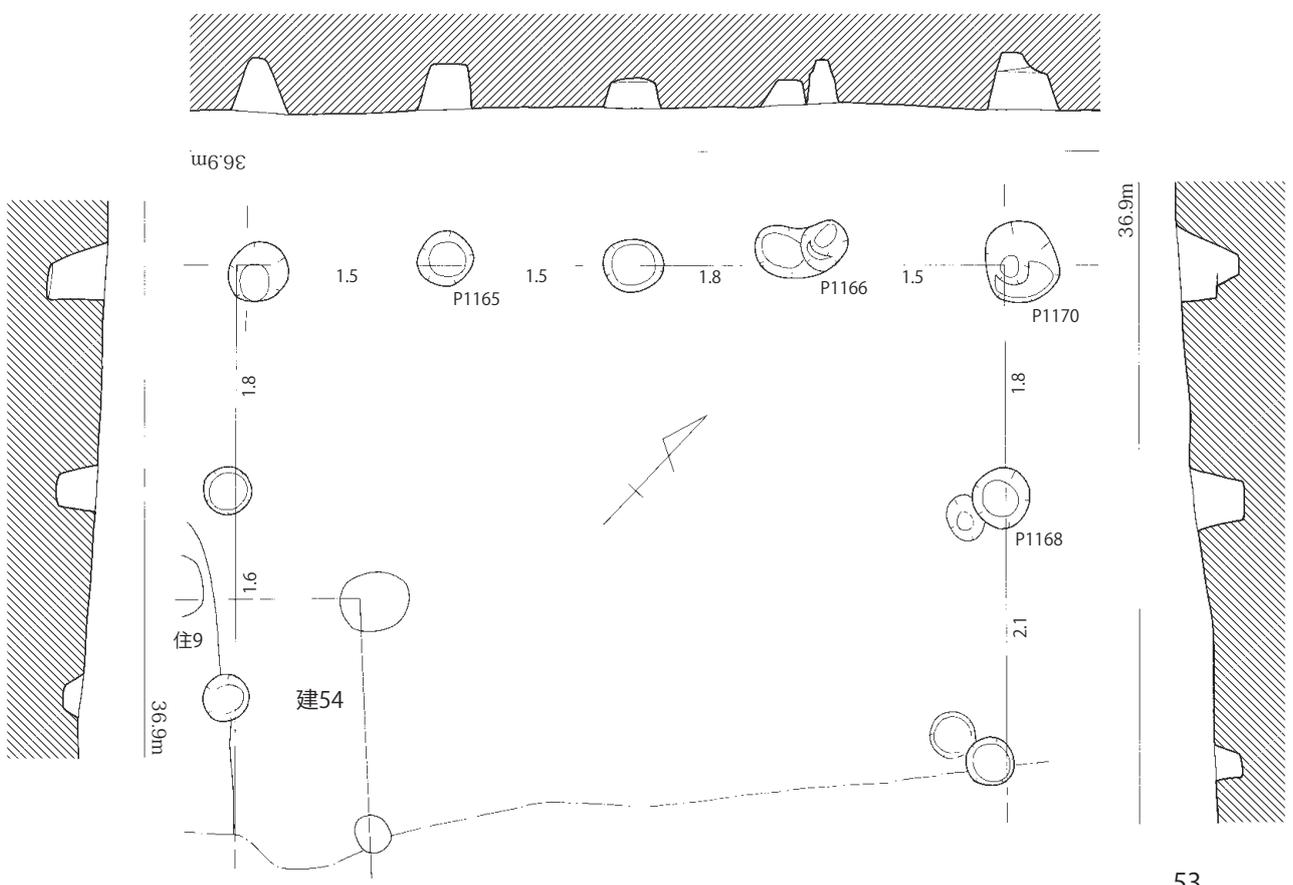
77は須恵器の坏蓋片か。口縁端部は嘴状で明瞭に折れ曲がって角張り、天井部に向かって内湾して膨らんでいる。78も須恵器の坏蓋片か。口縁端部が丸みをもった形状となる。77・78は共に内外面とも回転ナデ調整である。



Ⅱ区全景（南から）

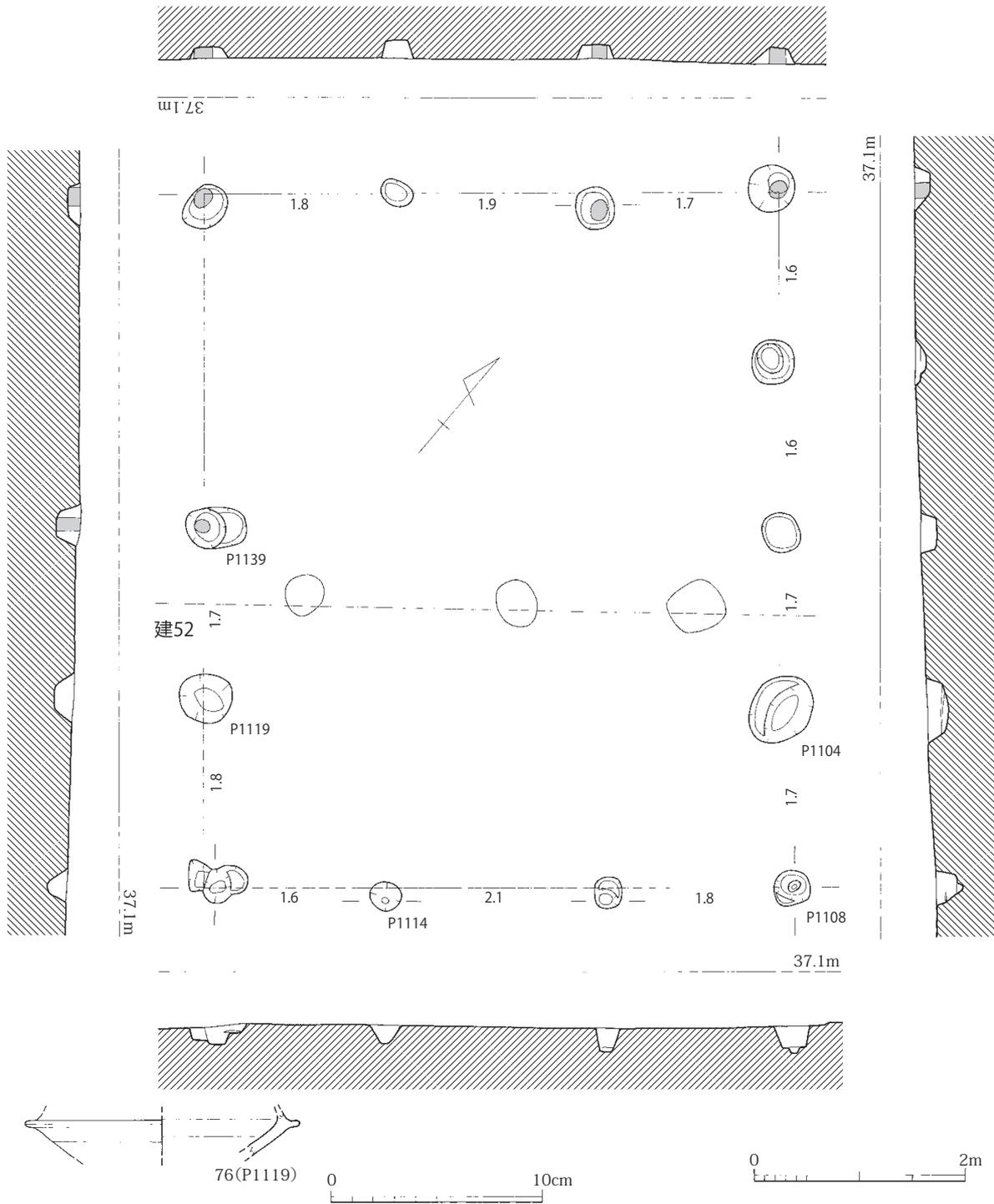


50



53

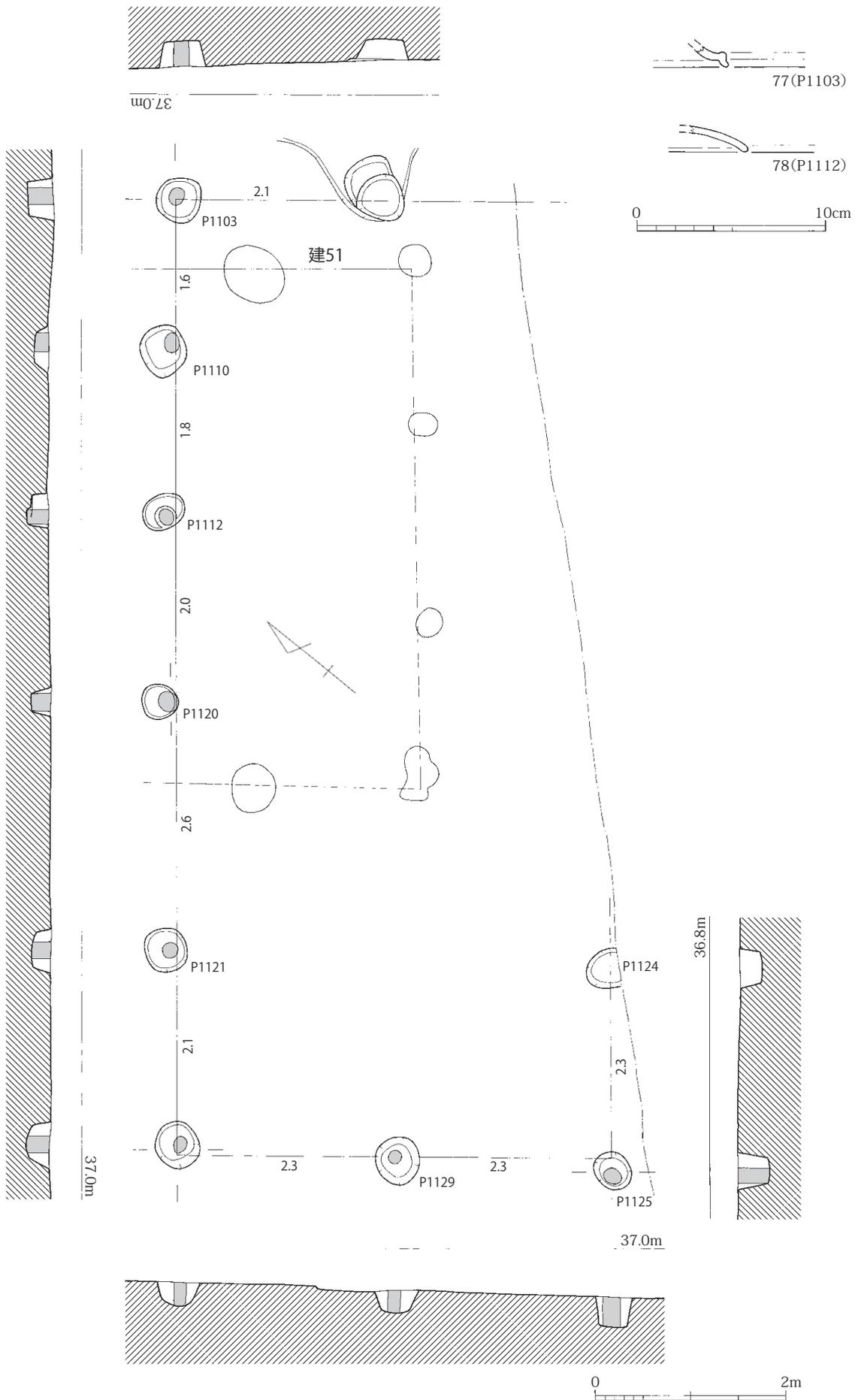
第29图 50・53号掘立柱建物跡実測図 (1/60)



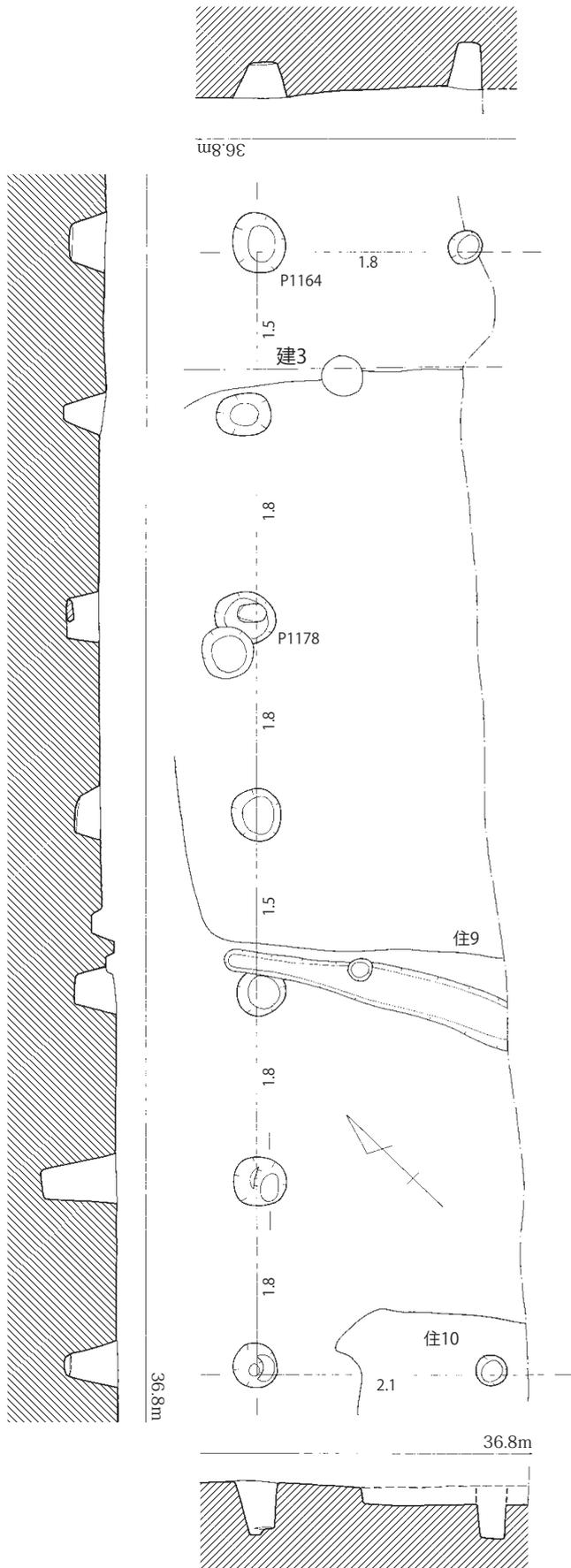
第30図 51号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/ 60・1/ 3)

53号掘立柱建物跡 (図版11、第29図)

51号掘立柱建物の東側に位置する2以上×4間の建物である。建物方向はN-46°-E、柱穴間距離は1.5~2.1mを測る。またそれぞれの柱穴は円形で径0.3~0.6m、深さ0.2~0.5mを測るが、柱痕跡は確認できなかった。残りの柱穴は東側へ続いているが、I区では確認できなかった。52号掘立柱建物跡と同様にI・II区の間にかかる用水路の下にあると思われる。これもP1165、1166、1168、1170から遺物が出土したが、図化できるものはなかった。掘立柱建物の時期は9号竪穴住居跡を切ることから、それ以降の時期が考えられる。



第31図 52号掘立柱建物跡および出土土器実測図 (1/60・1/3)



第32図 54号掘立柱建物跡実測図 (1/60)

54号掘立柱建物跡 (図版11、第32図)

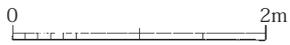
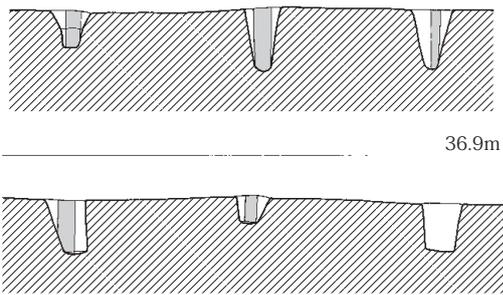
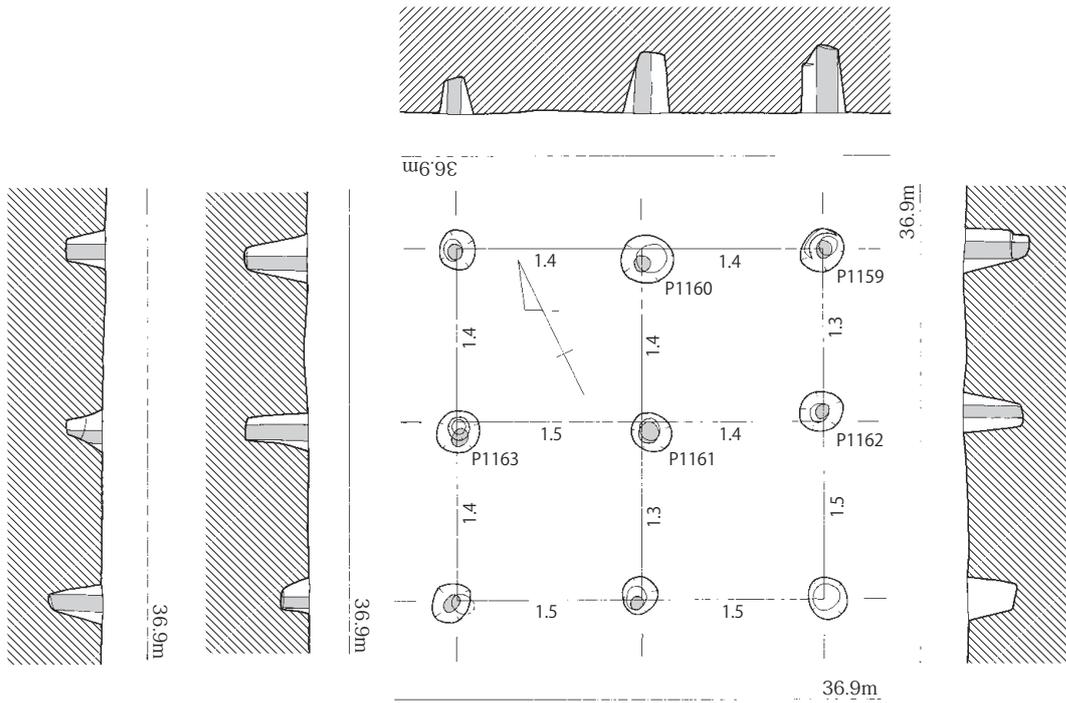
Ⅱ区東側際の9号竪穴住居跡と重なる位置にある2以上×6間の建物である。建物方向はN-46°-E、柱穴間距離は1.5、1.8、2.1mを測る。それぞれの柱穴は円形で径0.2~0.4m、深さ0.3~0.7mを測るが、柱痕跡は確認できなかった。柱穴底面に約0.2mの石を据えていた柱穴が、9号竪穴住居跡の竈部分や10号竪穴住居跡を切ることから、7世紀後半頃の時期と考えられる。P1164、P1178で遺物が出土している。

55号掘立柱建物跡 (図版11、第33図)

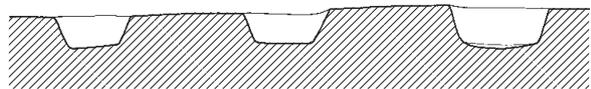
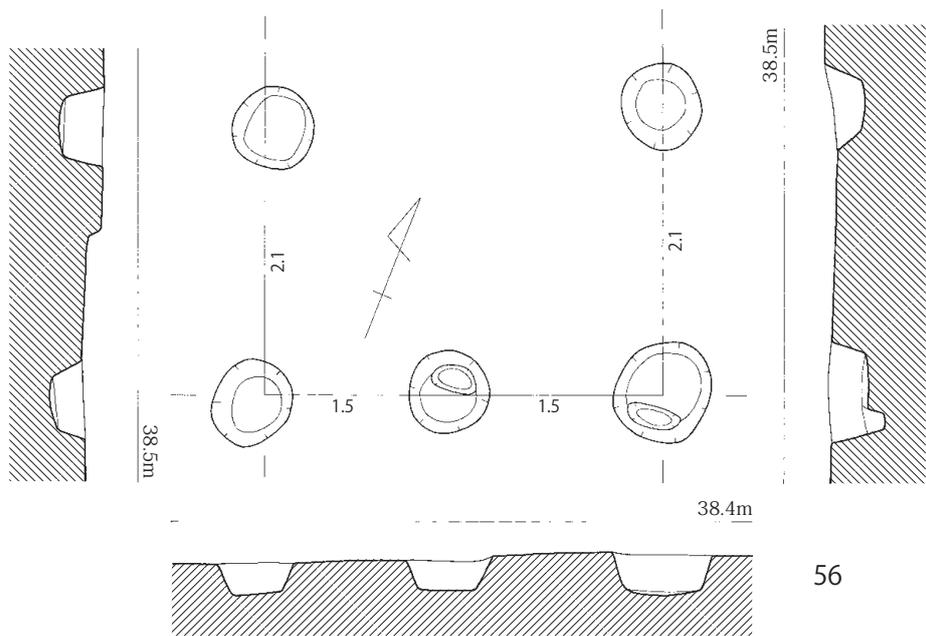
54号掘立柱建物跡の西に位置する2×2の総柱建物である。建物方向はN-25°-E、柱穴間距離は1.3~1.5m、それぞれの柱穴は円形で径0.2~0.4m、深さ0.2~0.5mを測る。柱痕跡は明瞭に残り、約0.1m前後を測る。P1159、1160、1161、1162、1163から遺物が少量出土したが、図化できるものはなかった。そのため掘立柱建物の時期を検討するには難しいが、周辺の状況から7世紀前半以降と考えられる。

56号掘立柱建物跡 (第33図)

Ⅱ区の高台で唯一、検出した2×1以上の間の建物である。建物方向はN-22°-Wで、他の建物とは方向が異なる。柱穴間距離は南北方向で2.1m、東西方向で1.5mを測る。綿密に遺構検出したが、宅地跡であったため削平が著しく、その他の柱穴は確認できなかった。他には柱穴が検出されなかったことから、掘立柱建物跡ではなく、「コ」の字に巡る柵などの可能性も考えられる。柱穴はほぼ円形で径0.6~0.8m、深さ0.25~0.45mを測るが、遺物は全く出土なかった。



55



56

第33图 55・56号掘立柱建物跡実測図 (1/ 60)

3) 竪穴住居跡 (図版12・13、第34～36図)

竪穴住居跡は、いずれもⅡ区のみで3軒確認した。いずれも残りは良くなかったが、10・11号竪穴住居跡では西壁側で竈を検出し、9号竪穴住居跡のみ竈を検出できなかった。1～8号の竪穴住居跡は、次年度にⅢ・Ⅴ区での報告予定である。

9号竪穴住居跡 (図版12、第34図)

Ⅱ区東側で54号掘立柱建物跡に切られる形で検出した竪穴住居跡である。調査区際で検出したため約1/2しか調査できなかった。現状では4.8×2.8m、深さ0.3m、壁溝は幅0.05～0.2m、深さ約0.1mを測る。竪穴住居跡の形状は方形もしくは長方形で、明確な主柱穴は一つしか確認できなかった。かなり削平を受けていたためか、竈に関する遺構はほとんど残っておらず、焼土及び炭のみを西壁側で確認した。この部分に竈があったとすると、焼土の範囲で長さ1.2×0.7mを測る。またⅠ区のP257からは移動式竈片が出土していて、この住居のものかもしれない。

なお、Ⅰ区では残りの部分について検出していない。竪穴住居の時期は、出土遺物が少なく正確な時期を判断するのは難しいが、須恵器坏身片から7世紀中頃以前と考えられる。

出土土器 (第34図)

79は須恵器坏蓋片で、80は須恵器の坏身片である。共に口縁部は欠損しているが、口縁及び受け部が短い。81は土師器の甕片か。口縁部は欠損しているが、外側に向かって開くと思われる。内外面には、僅かに刷毛目の痕跡が残る。

10号竪穴住居跡 (図版12・13、第35図)

9号竪穴住居の南で確認したコーナーに竈を有するタイプの竪穴住居跡である。9号竪穴住居跡と同様に調査区際で検出したため1/2程しか調査できなかった。またかなり削平を受けているが、現状で長さ2.8×1.5m、深さ約0.1mを測る。形状はほぼ方形で、明確な主柱穴と思われるのは断面を切った穴と考えれば、径0.2～0.6m、深さ0.1～0.2m、柱間は1.0mを測る。

竈には黄褐色土で作られた両袖を検出した。袖石や支脚は確認できなかったが、焚口部分では焼土や炭を多く検出し、長さ0.7m、幅0.5m、深さ約0.2mを測る。出土遺物は9号竪穴住居と同様に量は少なかったが、出土した須恵器片からは7世紀中頃と考えられる。

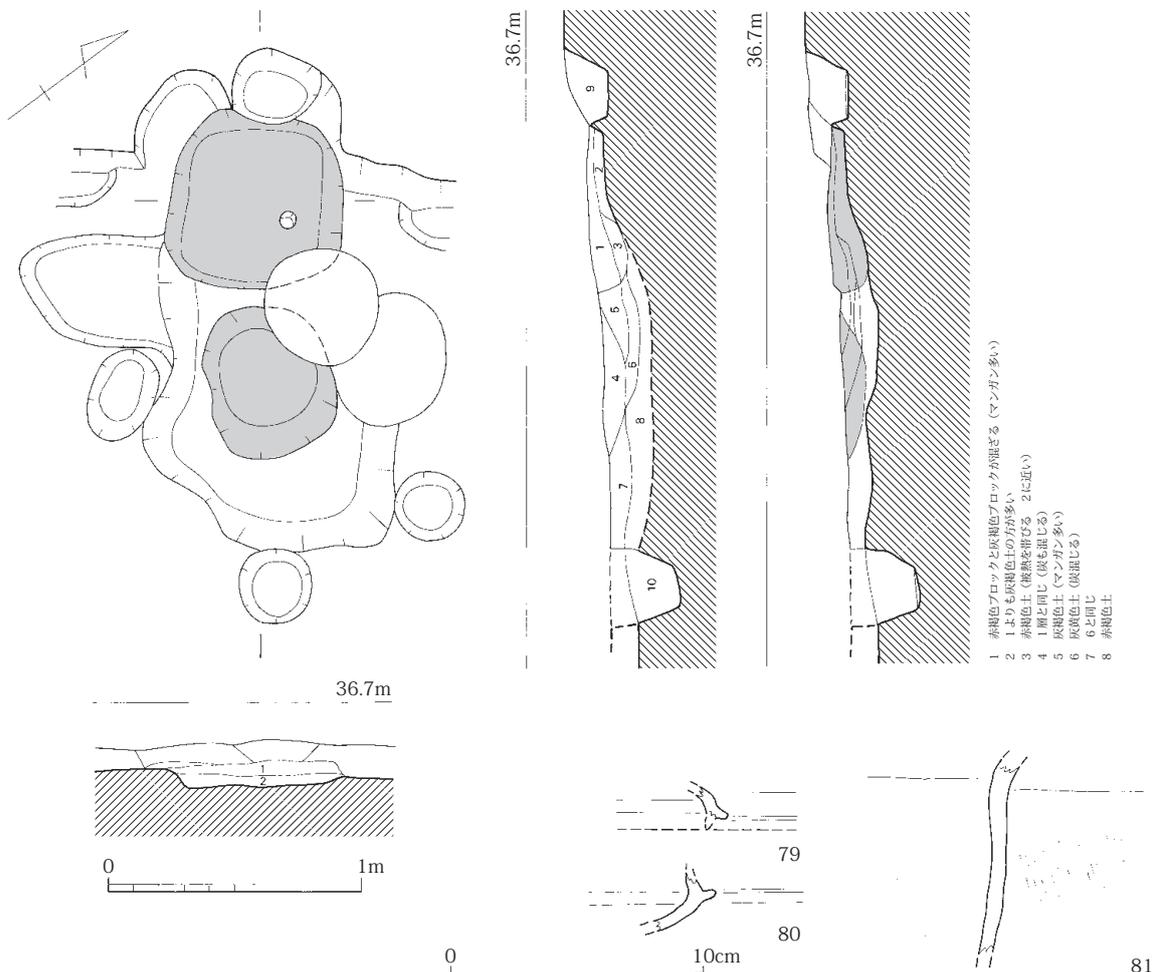
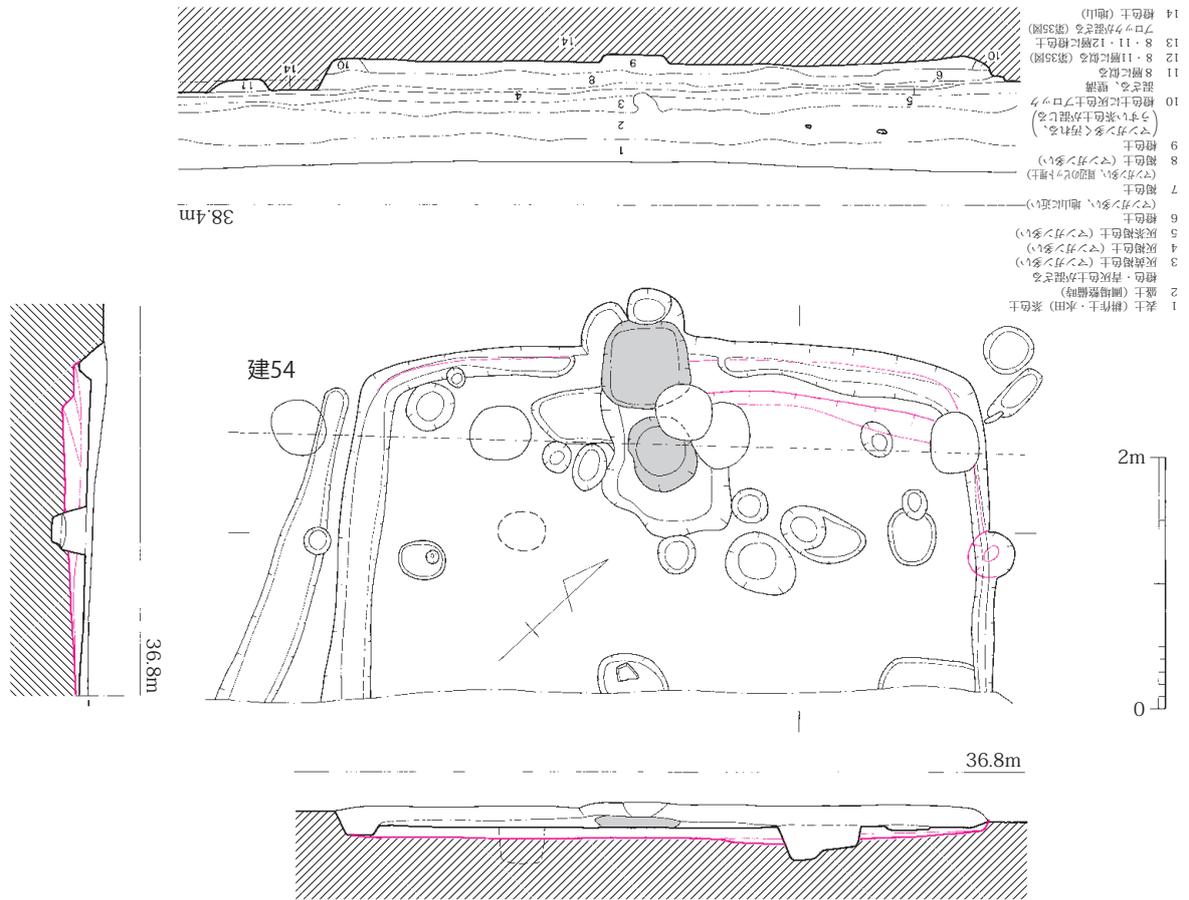
出土土器 (第35図)

82は須恵器の坏蓋片である。口縁は外側に向かって開く。口縁端部が僅かに段になる。83は須恵器坏身の口縁部片である。口縁端部は真っ直ぐに立ち、全体的に肉厚である。84は土師器甕の口縁部片で、復元口径18.0cmを測る。端部は丸く、外側に向かって開く。

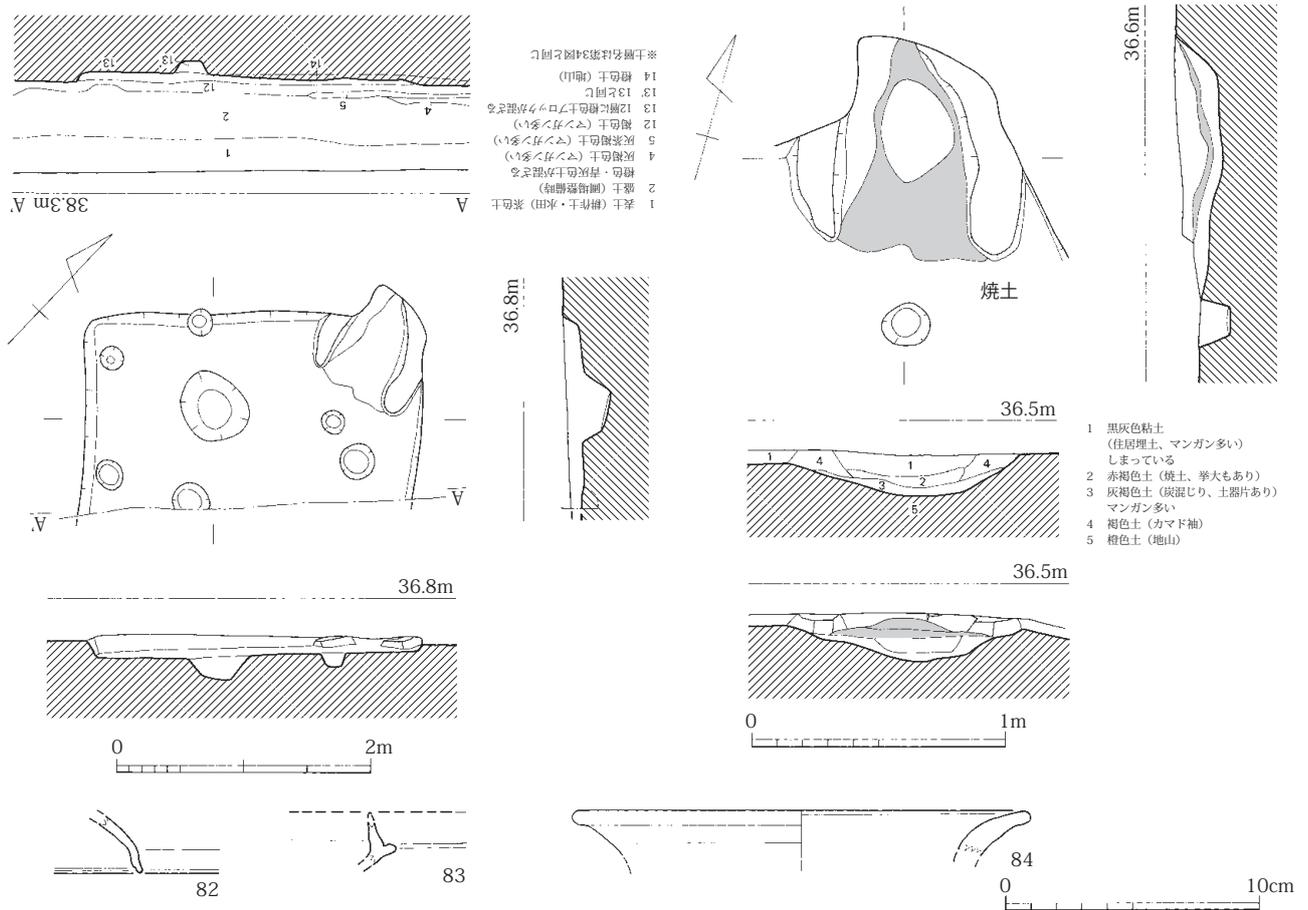
11号竪穴住居跡 (図版13、第36図)

西側宅地跡部分に位置し、試掘で一部掘削しているが、ほぼ方形で約6m、深さ0.4mを測る。主柱穴は4つ検出し、円形で径0.4～0.75m、深さ0.4～0.7m、柱間は2.8～3.0mを測る。壁溝は幅0.15m、深さ0.1～0.2m程を確認した。また土器が竈のある西壁側で多く出土した。

竈は西壁中央に作られる。灰褐色土を掘り下げていくと黄褐色土の固くしまった袖部分を確認した。またその前面には袖石を立てるための0.2～0.3mの凹みを2ヶ所検出し、周囲からは約0.4mの袖石も確認した。焚口は幅0.5mを測り、焼土層を除去すると多量の須恵器と土師器片が



第34図 9号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/60・1/30・1/3)



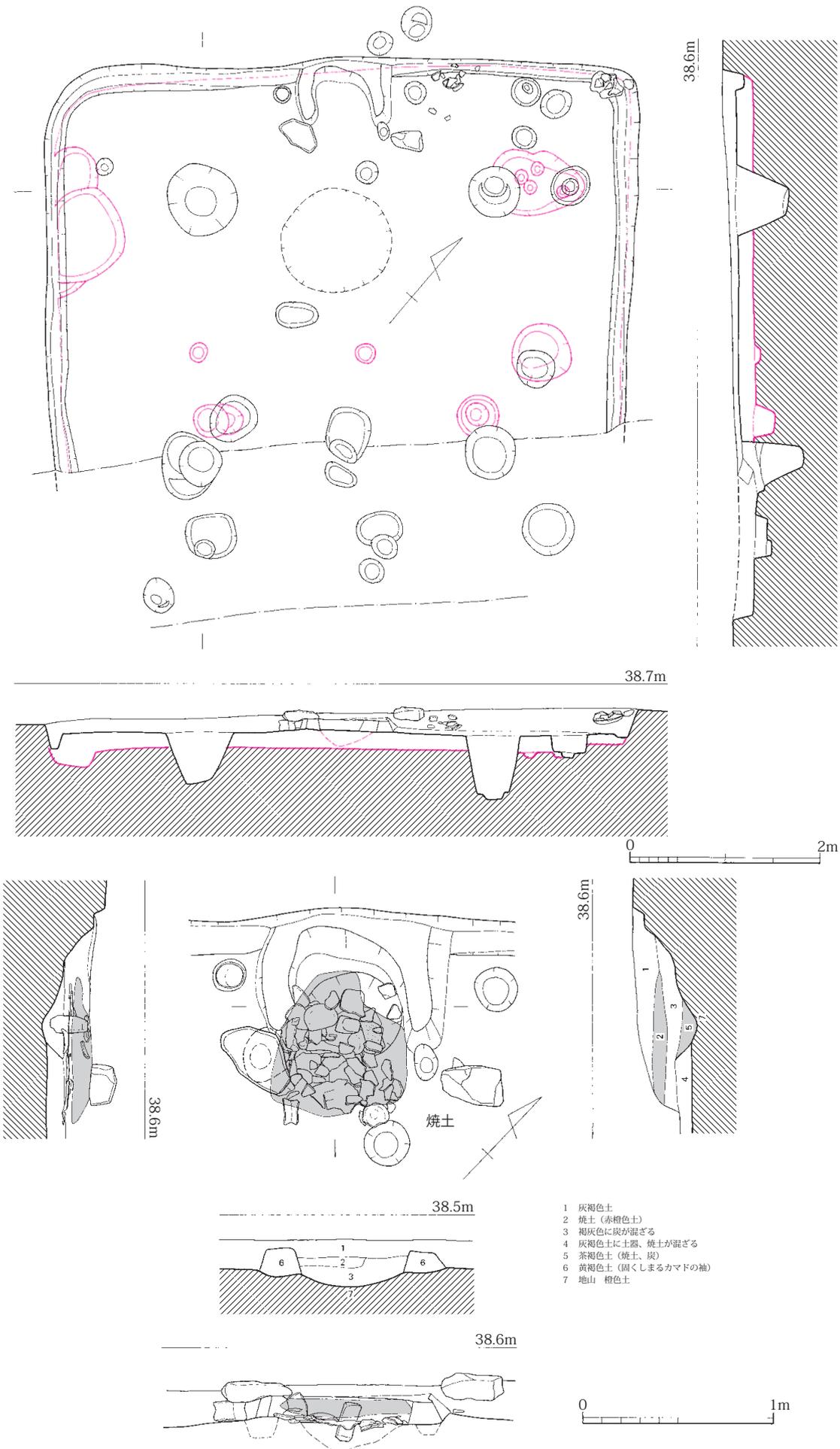
第35図 10号竪穴住居跡および出土土器実測図 (1/60・1/30・1/3)

出土した。煙道は確認できなかったが、焚口中央には約20cmの支脚を埋設していた。なお竈からは、パンケースで1箱分の須恵器と土師器が出土した。特に竈および周辺から出土した須恵器の坏から7世紀前半頃と考えられる。

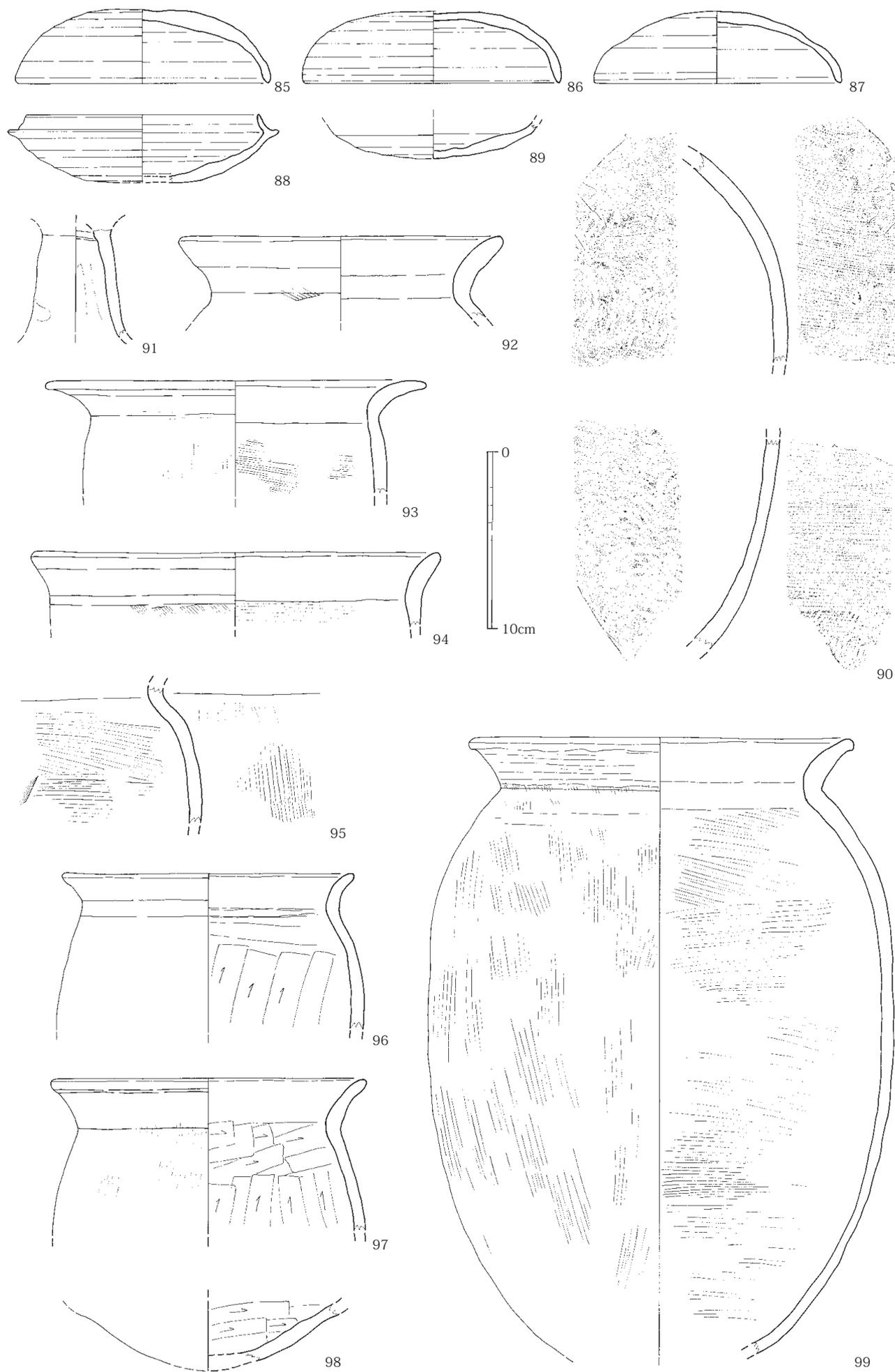
出土土器 (図版23、第37図)

85から90は須恵器である。85～87は坏蓋で、それぞれ口径14.4、14.6、14.0cmを測る。内外面とも回転ナデ調整で、外面底部のみヘラケズリを施す。88と89は坏身片である。88は口径13.0cmを測り、内外面とも回転ナデ調整で、外面底部のみヘラケズリを施す。89は底部片である。90は甕の胴部片で、調整は外面はほぼ全面にカキ目調整が施されるが、胴部下半のみ平行叩きを施している。内面は頸部近くはナデであるが、他はすべて同心円叩きである。

91から99は土師器である。91は高坏脚部片で1/3程残る。92は甕口頸部片で、外に向かって開き「く」の字形で、復元口径18.4cmを測る。磨滅していて調整は解りにくいが、外面には僅かに刷毛目調整が残る。93は「L」字型になる甕の口頸部片で、復元口径21.6cmを測る。外面に縦、内面には横の刷毛目調整が残る。94は甑などの口縁部片か。口縁端部は肉厚で、復元口径23.0cmを測る。これも外面には縦、内面には横の刷毛目調整を施す。95は甕の頸部片で、これも内外面ともに刷毛目調整を施す。96は竈の左袖の脇で出土した甕である。96と97はそれぞれ復元口径16.4、19.6cmを測る。外面には刷毛目調整、内面にはナデとケズリが施される。なお、98は胎土や焼成など様子から97の底部片と思われる。99は復元口径21.6cm、残高で約35cmを測る長胴の甕で、口縁～胴部上半片と胴部下半片の2つを図面上で復元した。口縁部は肉厚で、頸部は「く」の字形になる。口縁端部に向かって外側に開いている。外面には縦、内面には横の刷毛目調整を施す。



第36図 11号竪穴住居跡実測図 (1/ 60・1/ 30)



第37图 11号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

4) 土坑 (図版14～19、第38～41図)

I区では中央の谷を挟んで東側で1・2号土坑を検出し、西側で4～16号土坑を検出した。なお3・7号土坑は欠番である。またII区では63～69号土坑を検出した。これら土坑として報告している中には、落とし穴、貯蔵穴、井戸も含まれている。

1号土坑 (図版14、第38図)

I区東側で検出した遺構である。圃場整備の影響で上面は削平されているが、長さ1.5m×0.9m、深さ0.3mを測る。埋土は灰黄色土で、ほとんど分層はできなかつた。中央部分には円形で径約0.3m、深さ0.1mの浅い凹みがある。そのため落とし穴ではないかと判断した。出土遺物はなく時期不明である。

2号土坑 (図版14、第38図)

1号土坑近くで検出し、同様に削平されていた遺構である。形状は長さ約1.0m×0.5m、深さ約0.5mを測る。埋土は灰褐色土や灰黄色土で、僅かだが中央部分には凹みがあり、これも落とし穴の可能性がある。出土遺物はなく時期不明である。

4号土坑 (図版14、第38図)

3号掘立柱建物跡の柱穴に切られる円形部分と溝状部分が組み合わさった土坑である。埋土は、黄橙色土の地山が汚れたような状態であった。溝状部分は長さ約3.0m、幅約1.0m、深さ約0.4mあり、その西側に円形で径約1.2m、深さ約1.0mを測る土坑部分となる。土坑部分からは出土遺物はなかったが、溝状部分から須恵器の小片が少量出土している。土坑の時期は3号掘立柱建物跡に切られることから、少なくとも8世紀以前が考えられる。なお、I・II区で検出している12・67号土坑の井戸と比べるとかなり浅く井戸の可能性は低いのではないかと思われる。

5号土坑 (図版15、第38図)

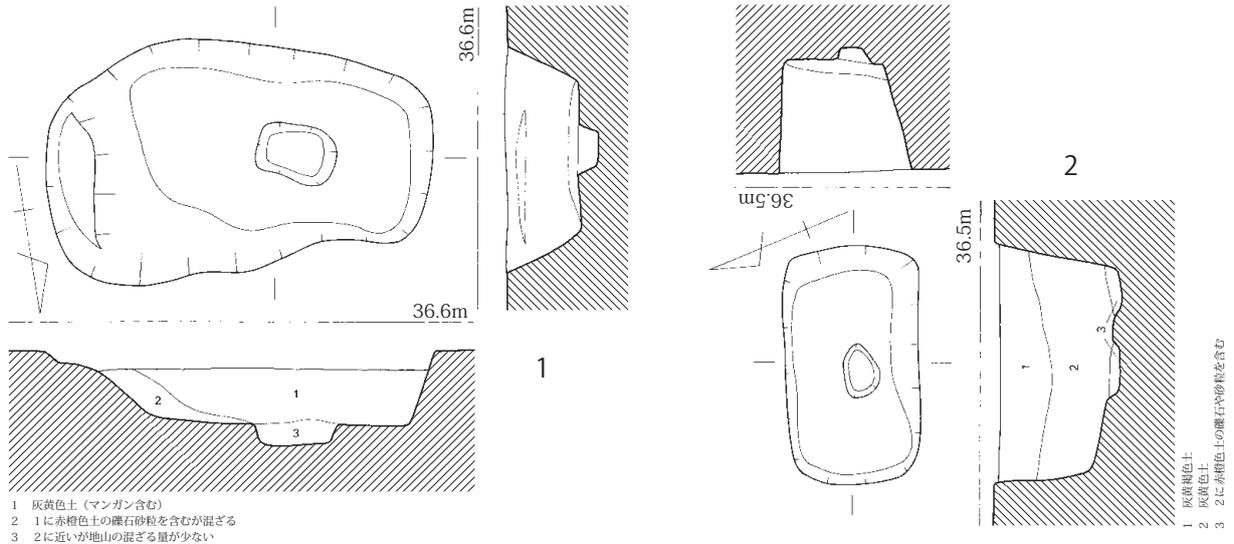
19号掘立柱建物の西側に位置する。P458に切られているが、形状はほぼ円形で径1.1m、深さ約0.2mを測る。土坑自体には被熱を受けた痕跡は見られないが、中央部分には被熱を受けた石を確認した。また埋土の暗茶褐色土には少量の炭や焼土なども含まれていることから、鍛冶関係の廃棄土坑とも考えられる。土坑の時期は、出土した土器片から7世紀後半以降と考えられる。

出土土器 (第39図)

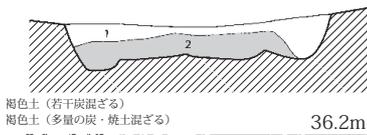
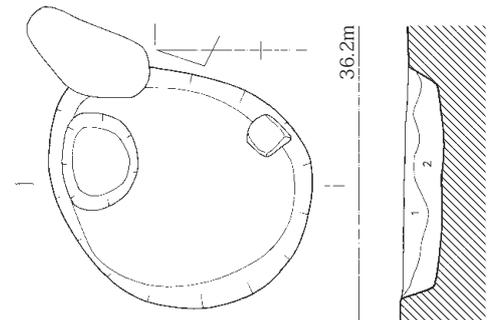
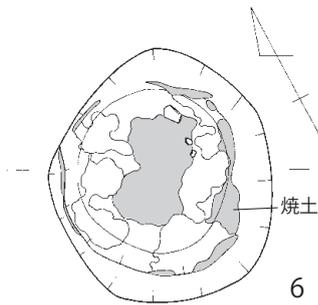
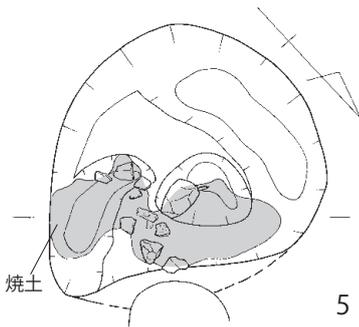
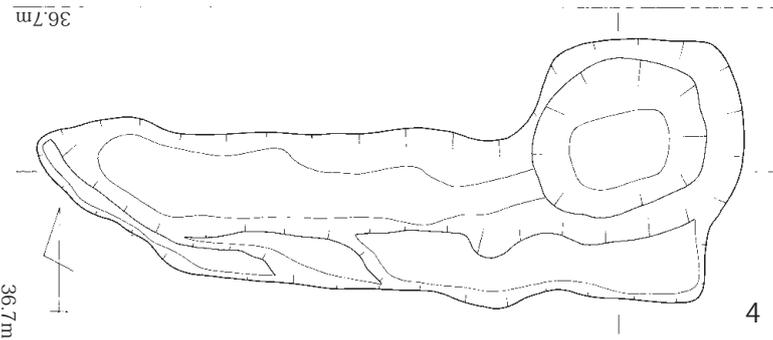
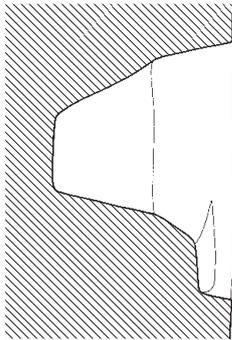
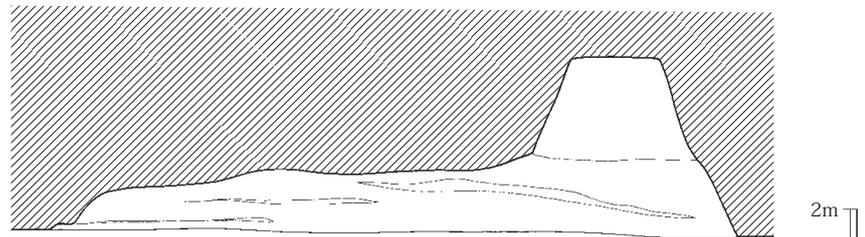
100は、須恵器の坏蓋片か。撮み部分および口縁部は欠損している。101と102は須恵器碗の口縁部片である。103は土師器甕の口縁部片で、頸部は「く」の字形で外側に向かって開く。復元口径22.0cmを測る。調整は外面に刷毛目、内面には縦方向のケズリを施す。

6号土坑 (図版15、第38図)

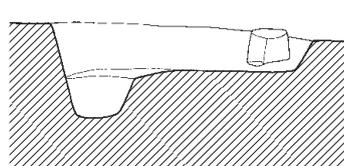
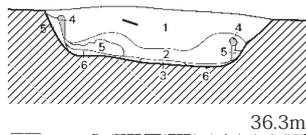
16・17号掘立柱建物跡の東側に位置し、ほぼ円形で径約1.0m、深さ0.2mを測る。埋土の灰褐色土には、焼土、炭、炉壁片などが遺構内全体に確認しており、鍛冶関連の廃棄土坑と考えられる。また出土した土師器片から、7世紀中頃以降と考えられる。なお7m東側には、鍛冶炉を内包する13号掘立柱建物跡があり、関連があるのかもしれない。



0 1m



褐色土 (若干炭混ざる)
 褐色土 (多量の炭・焼土混ざる)



1 灰褐色粘質土 (鉄分を多く含む、土器片もあり)
 2 灰褐色粘質土 (1よりも粘度が強い)
 3 明赤色土 (焼土、硬化する)
 4 明赤色土 (焼土、硬化する)
 5 灰褐色粘質土に焼土、研壁くずが混ざる
 6 5に炭が多く混ざる

第38図 土坑実測図1 (1/45・1/30)

6号土坑出土土器（第39図）

104は須恵器坏身の口縁端部の小片である。105は土師器の高坏脚部片で、外側に向かって大きく開き、脚上部に向かって折れ曲がる。

8号土坑（図版15、第38図）

15号掘立柱建物跡の西側の柱列間に位置する。形状は円形で径約1.0m、深さ0.15mを測る浅い土坑である。埋土は暗灰色土で、単一層であった。底面北側にはさらに0.15m程下がるピット状の掘り込みがあった。なお出土土器は小片で、詳細な時期を検討することはできなかった。

9号土坑（図版16、第39図）

8号土坑の西側に位置し、長円形で長さ1.2×0.5m、深さ約0.2mを測る。8号土坑と同様に、埋土は暗灰色土であった。またここからも土師器の小片が出土したが、詳細な時期を検討することはできなかった。

10号土坑（図版16、第39図）

9号土坑の南側に位置し、8・9号土坑と同じ暗灰色土の埋土である。長円形で長さ0.95×0.7m、深さ約0.1mを測る浅い土坑である。図化できない土師器の小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

11号土坑（図版16、第39図）

10号土坑の東側に位置し、16号土坑に切られる状態で検出した。ほぼ円形で約0.8m、深さ0.15mを測る。埋土は暗灰色土で、須恵器片と土師器片が出土した。土坑の時期は、須恵器の埴片から7世紀後半以降と考えられる。

出土遺物（第39図）

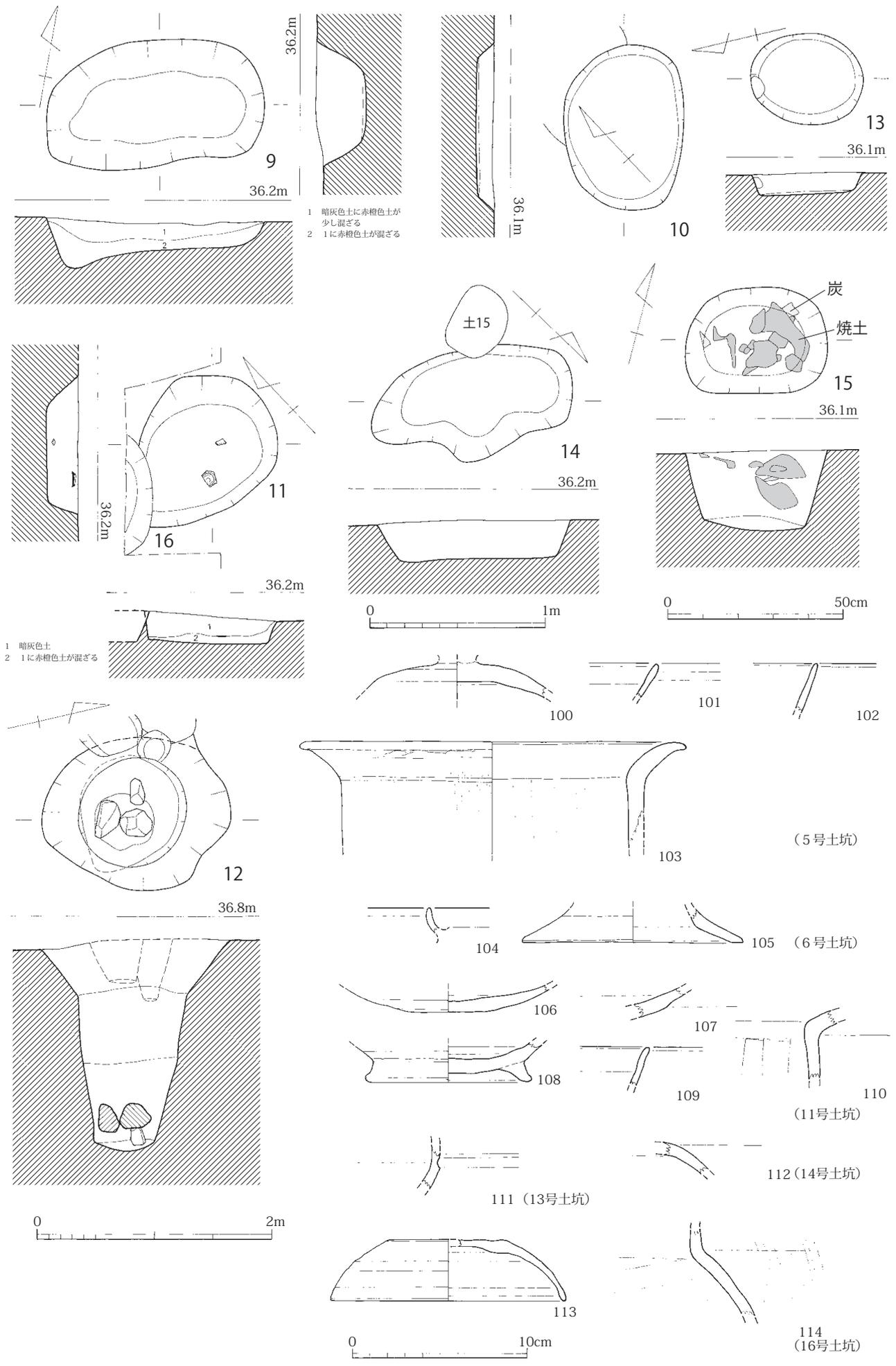
106から110は須恵器である。106と107は坏身の底部片か。底部のみ残存していたため、蓋か身の判断はできなかった。108は埴の高台で、外側に向かって開き、高台径9.5cmを測る。109は埴の口縁部の小片である。110は土師器の甕頸部片である。口縁は欠損するが、「く」の字形で外側に開く。調整は内面のみケズリの痕跡が残る。

12号土坑（図版17、第39図）

I区西側で検出した井戸である。井戸上面はいくつかのピットで壊されているが、形状はほぼ長円形で1.6×1.3m、深さ1.8mを測る。井戸内部からは何もなく、素掘りであった。またGLから0.4m程下の掘り方は円形となって、屈曲してすり鉢状の底に至る。底面には約0.2m前後の石が3つ投げ込まれていた。井戸の時期は、出土遺物はなく詳細な時期を検討するのは難しいが、上面部分がP304などに切られることなどから、それ以前の7世紀前半頃と考えられる。

13号土坑（図版17、第39図）

10号土坑と11号土坑の間に位置する。11号土坑と同じで、長さ0.5～0.6m、深さ約0.1mを測る浅い土坑である。須恵器と土師器の小片が出土したが、明確な時期は不明である。



第39図 土坑実測図2および出土土器実測図1 (1/45・1/30・1/15・1/3)

13号土坑出土土器（第39図）

111は須恵器の碌などの体部片か。外面には僅かに段がつく。

14号土坑（図版17、第39図）

13号土坑の北側に位置し、15号土坑に切られる形で検出した遺構である。埋土は暗灰色土で、形状は長円形で長さ約1.1×0.6m、深さ約0.2mを測る。須恵器の坏片が出土した。

出土土器（第39図）

112は須恵器坏蓋の天井部の小片か。調整は回転ナデと僅かにヘラケズリの痕跡がある。

15号土坑（図版18、第39図）

14号土坑を切る形で検出した土坑である。形状は隅丸方形を呈し、長さ0.8×0.6m、深さ0.45mを測る。土坑内部には10cm前後の焼土や炭が硬化した土が混入していたので、5・6号土坑と同じ鍛冶関係の遺構と考えられる。出土遺物はなく、詳細な時期は不明である。

16号土坑（図版16、第39図）

11号土坑を切る形で、調査区西際で僅かに検出した遺構である。ほとんど掘削できなかったため本来の形状などは不明である。土坑の時期は、出土土器は7世紀前半頃だが、11号土坑を切ることから7世紀後半以降の時期と考えられる。

出土遺物（第39図）

113は須恵器の坏蓋で、復元口径13.5cm、器高3.5cmを測る。底部は肉厚だが、口縁に向かって、薄手になる。114は口縁は欠損しているが、土師器甕などの頸部片である。調整は外面に刷毛目、内面にケズリを施す。

なお8～14・16号土坑は土坑として判断するのは難しいが、調査時のまま報告している。以下は、Ⅱ区で検出した土坑で、落とし穴1基、貯蔵穴1基、井戸1基を確認した。

63号土坑（図版18、第40図）

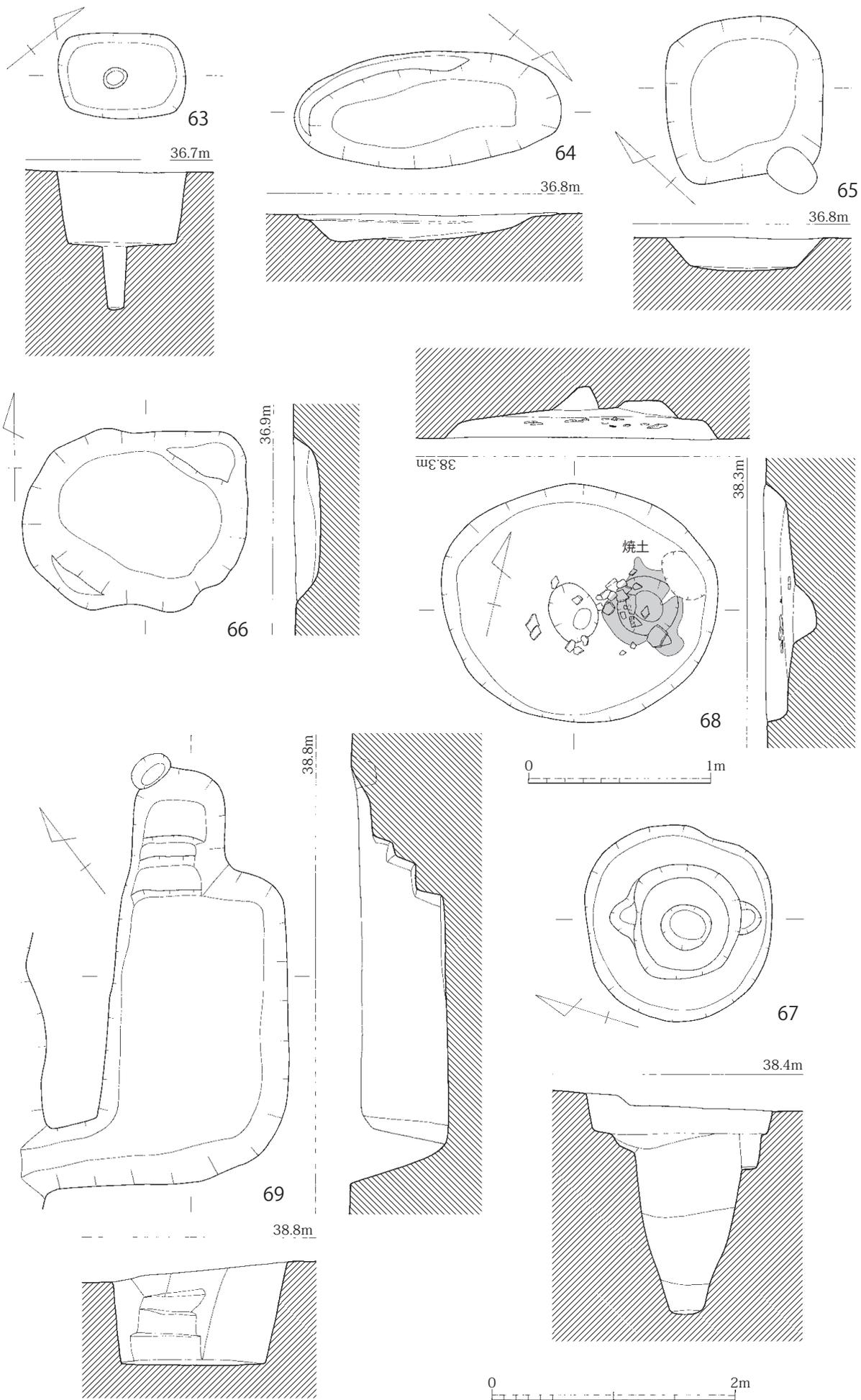
Ⅱ区の東隅近くで検出した土坑で、長軸1.05m、短軸0.7m、深さ0.6mを測る。形状は隅丸方形で、埋土は粘質の強い灰褐色土である。底面は平坦で、中央部分には径約0.2m、深さ約0.5mのピット状の掘り込みを1つ検出した。このピット状の掘り込みがあることから落とし穴ではないかと判断した。なお出土遺物はなく詳細な時期は不明であるが、カワラケ田遺跡周辺の調査状況から判断すると縄文時代の可能性がある。

64号土坑（図版18、第40図）

63号土坑の南側に位置する。上面は圃場整備の影響で削平を受けていたが、長円形で長軸2.2m、短軸約1.0m、深さが0.2m程を測るかなり浅い土坑である。埋土は灰褐色土の単層であった。土坑の時期は、出土した須恵器片から判断すると8世紀頃と考えられる。

出土土器（第41図）

115は須恵器長頸壺の底部片か。底部と胴部の境は明瞭に角張る。焼成は硬質で、色調は濃青灰色を呈す。内外面は回転ナデ調整であるが、外面底部にはヘラ切りがある。



第40図 土坑実測図3 (1/45・1/30)

65号土坑 (図版18、第40図)

51号掘立柱建物跡の南西側に位置し、南側をピットで切られている。形状は隅丸方形で、長さ約1.3m、深さ0.25mを測る。埋土は灰褐色土の単層であった。土器の小片が出土したが、詳細な時期は不明である。

66号土坑 (図版18、第40図)

55号掘立柱建物跡の西側に位置する。一部掘り下げすぎているが、長軸1.7m、短軸1.4m、約0.2mを測る。埋土は褐灰色土である。出土遺物はなく、詳細な時期不明である。

67号土坑 (図版19、第40図)

土坑と報告しているが、11号竪穴住居の南西で検出した井戸である。井戸の形状はほぼ円形で径約1.6m、深さ約1.8mを測る。井戸は二段掘りで、GLから0.2~0.3m程下で平坦面があり、この平坦面から井戸は底へ下がるにつれて径約1.0mと狭くなりすぼまっていく。井戸に関わる遺物は全く出土しなかったため、時期不明の素掘りの井戸と思われる。

68号土坑 (図版19、第40図)

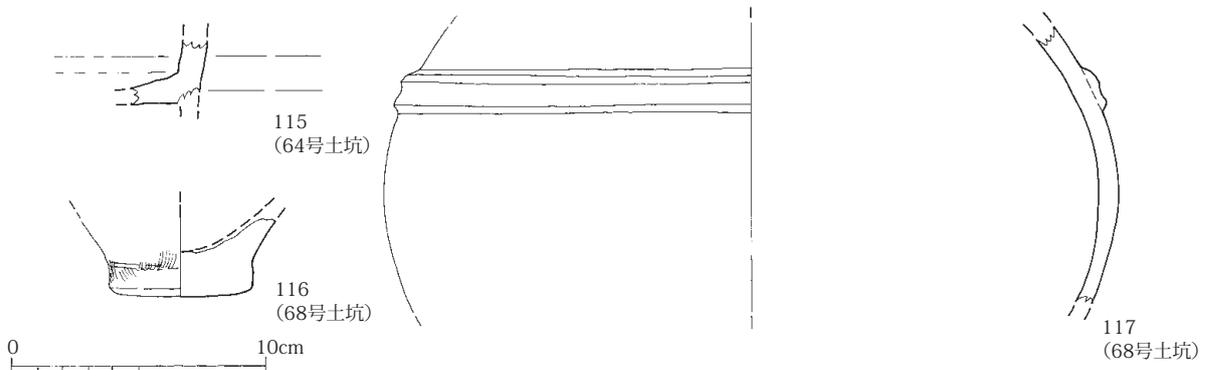
上面を削平されていたが、唯一検出した弥生時代の貯蔵穴である。形状は長円形で径1.3~1.5m、深さ0.15mを測る。底には弥生土器片が散らばっていて、中央には径約0.3m、深さ約0.1mのピット状の掘り込みがあった。この弥生土器の下からは、焼土も検出した。なお西側の一部は攪乱されていた。その攪乱に、古墳時代の鉄鏃片が混入していたと思われる。

出土土器 (第41図)

116は弥生土器甕の底部片である。内面は接合面で剥離して形状は不明だが、外面には刷毛目の痕跡が残る。117は弥生中期後半頃の壺胴部片で、突帯部分は「M」字型を呈している。この突帯下で復元最大胴部径となり28.8cmを測る。

69号土坑 (図版19、第40図)

現代の土坑で長方形を呈し、長軸3.4m、短軸1.6m、深さ0.8mを測る。一部攪乱を受けていたが北東隅が階段状になり、3段確認した。また西隅部分には調査区外へと幅約0.5m、深さ約0.7mの溝状の切り込みがあった。ここでは防空壕の可能性もあるので報告している。近世から戦前までの陶器片が少量出土したが、ここでは図化はしていない。



第41図 土坑出土土器実測図2 (1/3)

5) 溝 (図版20 第42図)

溝はI区で8条検出したが、1～4号溝については、近世～現代までの溝と思われるのでここでは報告していない。ここで報告するのは、5・6号溝だけである。また7・8号溝については、13号掘立柱建物跡と一緒に次年度以降の報告予定である。

II区では5・6号溝の延長を確認したが、調査中で別に21・22号溝と新たに番号をつけてしまったため、ここではその2つの番号を併記している。北側で検出した23・24号溝は近現代の溝であるので、報告していない。

5・21号溝 (図版20、第42図)

I区西側とII区東側で検出した溝である。I区ではL字に曲がる部分を検出し、II区では直進部分を検出した。特にII区では削平されているため、この溝の続きは長さ9m分しか検出できなかった。この溝の北東側には建物群があり、区画を意識した溝であると思われる。一部用水路など調査ができない部分もあるが長さ30m、幅0.7m、深さ0.2mを測る。溝の断面は逆台形状で、埋土は大きく2層に分けられる。埋土の灰褐色粘土からは、コーナー手前で土師器の甕片がまとまって3個体分出土した。溝の時期は、出土土器から7世紀前半頃と思われる。

出土遺物 (図版23、第42図)

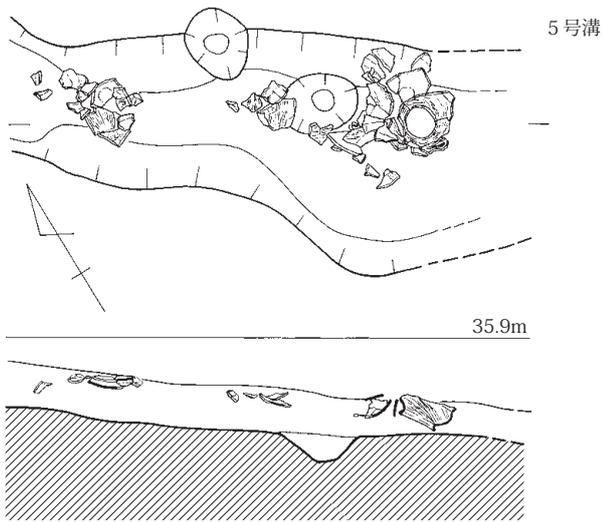
118は須恵器坏蓋片で、復元口径14.6cmを測る。天井部は欠損していて不明だが、外面中程に僅かに段がつく。調整は内外面ともナデである。119は甕の口頸部片か。頸部がゆるやかに「く」の字形となって外側に開く。胴部および底部は欠損するが、残存した破片から復元口径24cmを測る。全体的に磨滅するが、調整は外面に刷毛目、内面にはケズリを施す。120～123は甕片である。120と121は接合はしなかったが、胎土および焼成などから寸胴の甕の同一個体と考えられる。外側に向けて開く口縁からは、復元口径で19.6cmを測る。頸部が一番厚いが、胴および底部にかけては、ほぼ同じ厚みである。調整は外面に縦の刷毛目で、内面には胴部上半に横および斜めの刷毛目、胴部下半～底部にかけてはケズリとナデ調整を施す。122は甕片で120の甕と形状および調整など似る。これも口縁部は外側に向けて開き、復元口径18.4cmを測る。調整は口縁～頸部にかけてナデで、それより下は内外面とも刷毛目調整である。123は口縁～頸部まで長く、頸部が窄まるタイプの甕片である。外側に向かって開く口縁からは、残存した破片から復元口径17.2cmを測る。調整は磨滅していて不鮮明な所も多いが、内外面ともに刷毛目調整である。

6・22号溝 (図版20、第42図)

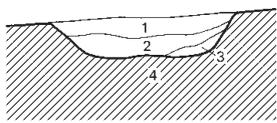
5号溝の西側で、I・II区で検出した溝で、北に向かうにつれて5号溝との間が狭まっている。一部調査できない部分があるが、長さ14m、幅約1.0m、深さ約0.4mを測る。溝の断面は、中央部分がさらに尖るほぼレンズ状になる。埋土は5号溝と類似し灰褐色土で、3層に分けられる。溝の時期は遺物の量も少なく決め手がないが、出土した須恵器坏蓋の撮み片から7世紀後半又は8世紀代とも考えられる。

出土遺物 (第42図)

124は須恵器坏蓋の撮み部分で、上部は凹んでいる。125は須恵器坏身の底部片である。調整は外面に回転ヘラケズリ、内面に回転ナデを施す。126は土師器の高坏の体部片か。磨滅していて調整は不明である。127は土師器の甕などの口縁端部片か。



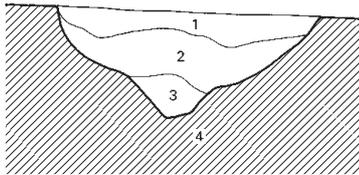
A 35.4m A'



5号溝土層断面図

- 1 灰褐色粘土
- 2 1より粘度が強い（炭が混ざる）
- 3 2と4が混ざる
- 4 赤褐色粘土（地山）

B 36.1m B'



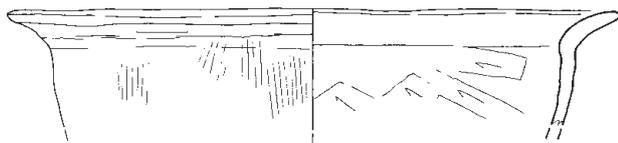
6号溝土層断面図

- 1 灰褐色粘土
- 2 1に4が混ざる
- 3 2よりは4が少ない
- 4 赤褐色粘土

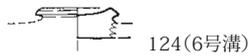
0 1m



118(5号溝)



119(5号溝)



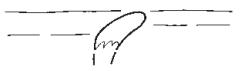
124(6号溝)



125(6号溝)

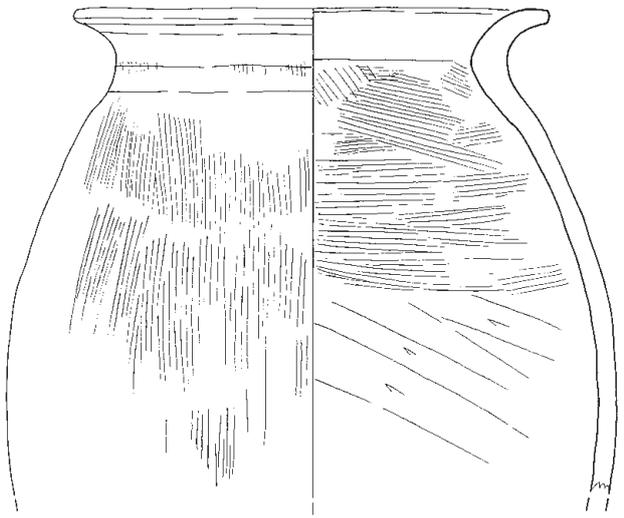


126(6号溝)

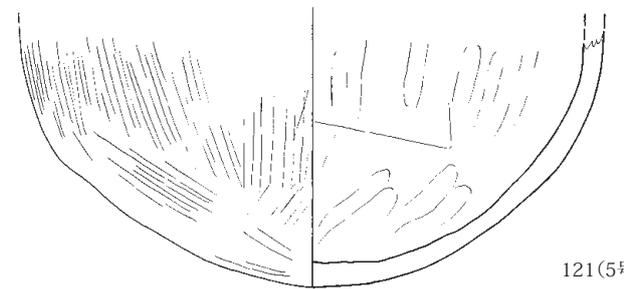


127(6号溝)

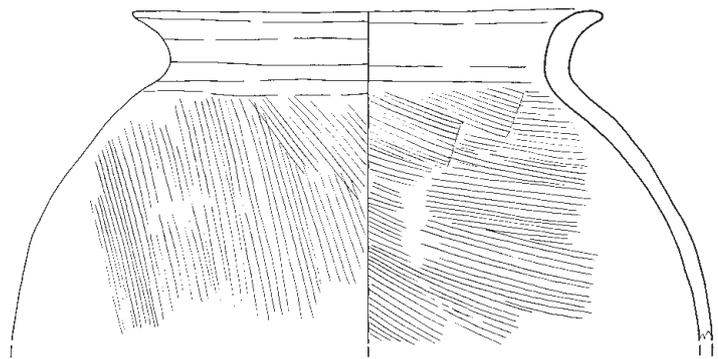
0 10cm



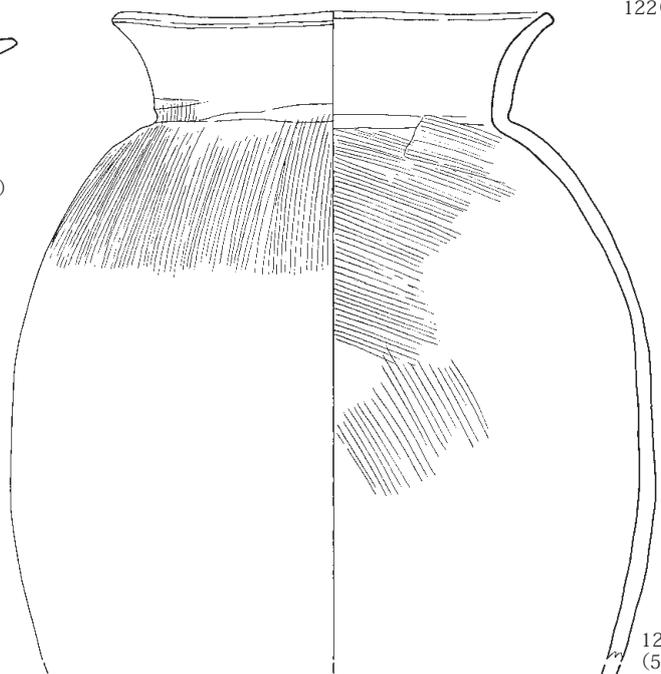
120(5号溝)



121(5号溝)



122(5号溝)



123(5号溝)

第42図 5・6号溝および出土土器実測図 (1/30・1/3)

6) その他の遺構 (図版21、第43図)

ここではI区東側で検出した波板状遺構と、I・II区で検出した約600基のピットの中から4基のピットについて報告する。なお、その他のピットからは主に7世紀代、8世紀代にかけての遺物片が出土している。特に実測可能な土器については、第44図で掲載する。

波板状遺構 (図版21、第43図)

I区東側で7基のピットが連続して、西にある谷に向かって階段状に並ぶ状態で検出したので、波板状遺構と判断した。遺構は長さ約5.0m、幅約0.5～1.3m、深さ0.05～0.3mを測る。西から2～5番目が、他よりもさらに一段掘り下がる。埋土は周辺のピットと同じである灰色土で、特にこの灰色土が、固くしまっているわけでもなかった。またP13～17までのピットからは、少量であるが須恵器片と土師器片が出土した。出土土器から時期を正確に判断するのは困難であるが、P14、15の須恵器片からこの遺構の時期を判断すれば少なくとも8世紀以降と考えることができる。ただ埋土が灰色土であることや谷に向かうことなどを考えて、近世の水田に係る遺構の可能性もある。

出土土器 (第43図)

128は口縁部など欠損する須恵器坏蓋片か。天井部のみヘラケズリを施し、平坦になる。坏身の可能性もある。129は須恵器碗の高台片である。高台は断面四角形となり、回転ナデである。

P-23 (図版21、第43図)

8号掘立柱建物跡の北東柱穴列の間に位置する。形状は長円形で長さ1.1×0.7m、深さ0.1m前後を測る浅い凹みをピットとした。埋土は暗灰褐色土で、底面中央の浅い凹み部分には、須恵器坏片が散らばっていた。出土した須恵器坏片から6世紀後半頃と思われる。

出土遺物 (第44図)

156は底部を欠損し、残り1/8片以下しかない須恵器坏の口縁～体部片である。口縁端部の内側には一段、段がついて外側に開いて復元口径で26cmを測る。焼成はやや軟質で、色調は灰色を呈する。また外面の調整は、カキ目が全体に丁寧に施され、体部中程に段がつく。外面の口縁部には僅かに叩きの痕跡が残る。内面は回転ナデ調整が施され、底部に向かって径が段々小さくなる。同様な破片がⅢ-3区の調査の竪穴住居跡でも出土している。

P-188 (図版21、第43図)

11号掘立柱建物跡の南西側で検出した。形状は円形で約1.2m、深さ約0.15mを測る。埋土は上面に暗茶褐色土、底面には焼土やマンガンがレンズ状に堆積していた。ピット内東側の壁面の先端が被熱を帯って赤変し、硬化していた。本来、焼土坑として取り上げてよかったが、調査時のままピットとしている。出土遺物はなく時期不明である。

P-384 (図版21、第43図)

21・22号掘立柱建物跡の東側で検出した。形状は長円形で長さ0.8×0.6m、深さ0.5mを測る。埋土はよくしまった灰褐色土である。ピットの上面付近には、須恵器の甕の胴部～底部片が重なるような状態で出土した。出土した須恵器の甕片から7世紀頃と考えられる。

P-384出土土器（第44図）

158は須恵器の甕胴部～底部片である。形状は胴部中程で最大径となり丸底になる。焼成はかなり悪く、軟質でもろい状態である。外面の調整は横や斜めのナデ調整で、叩きをナデ消していると思われる。内面の調整は同心円の叩きを施す。

P-396（図版21、第43図）

26・27号掘立柱建物跡の南東に位置する。本来は東西2つのピットが切り合う形であったと思われ、形状から東側のピットが切っている。それぞれのピットは円形で径0.5、0.6m、深さ0.4、0.65mになると思われる。埋土はよくしまる灰褐色土で、西側のピット内上面からは、6世紀末～7世紀初頃の須恵器坏身片が出土した。

出土遺物（第44図）

140は2/3片の須恵器の坏身片で、復元口径13.0cm、器高4.7cmを測る。口縁端部は段がつかないが、真っ直ぐに立つ。調整は内外面とも回転ナデであるが、外面の体部中程～底部にかけては丁寧にヘラケズリを施されている。

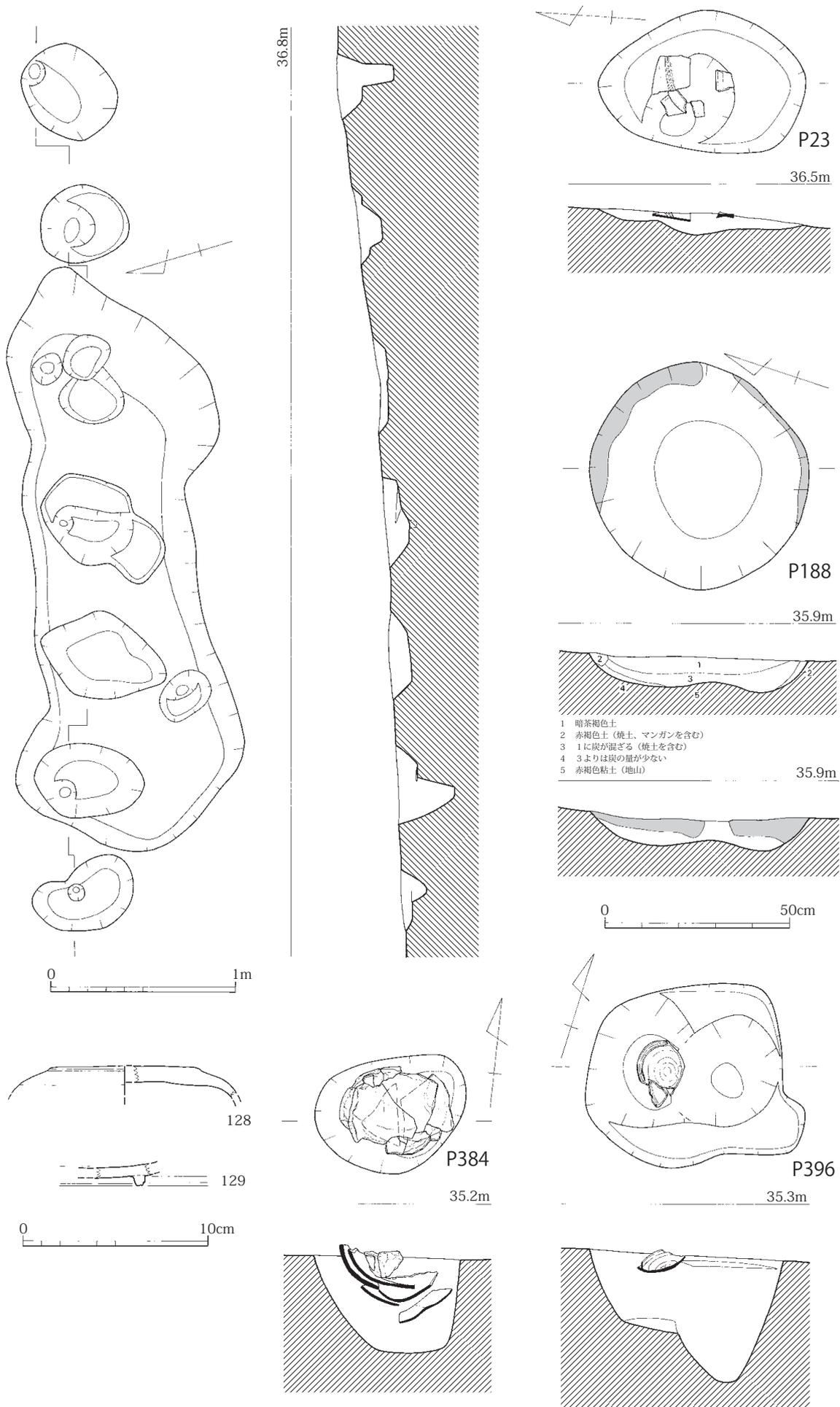
ピット出土遺物（第44図）

出土した須恵器・土師器は、概ね6世紀後半～8世紀代の土器片である。

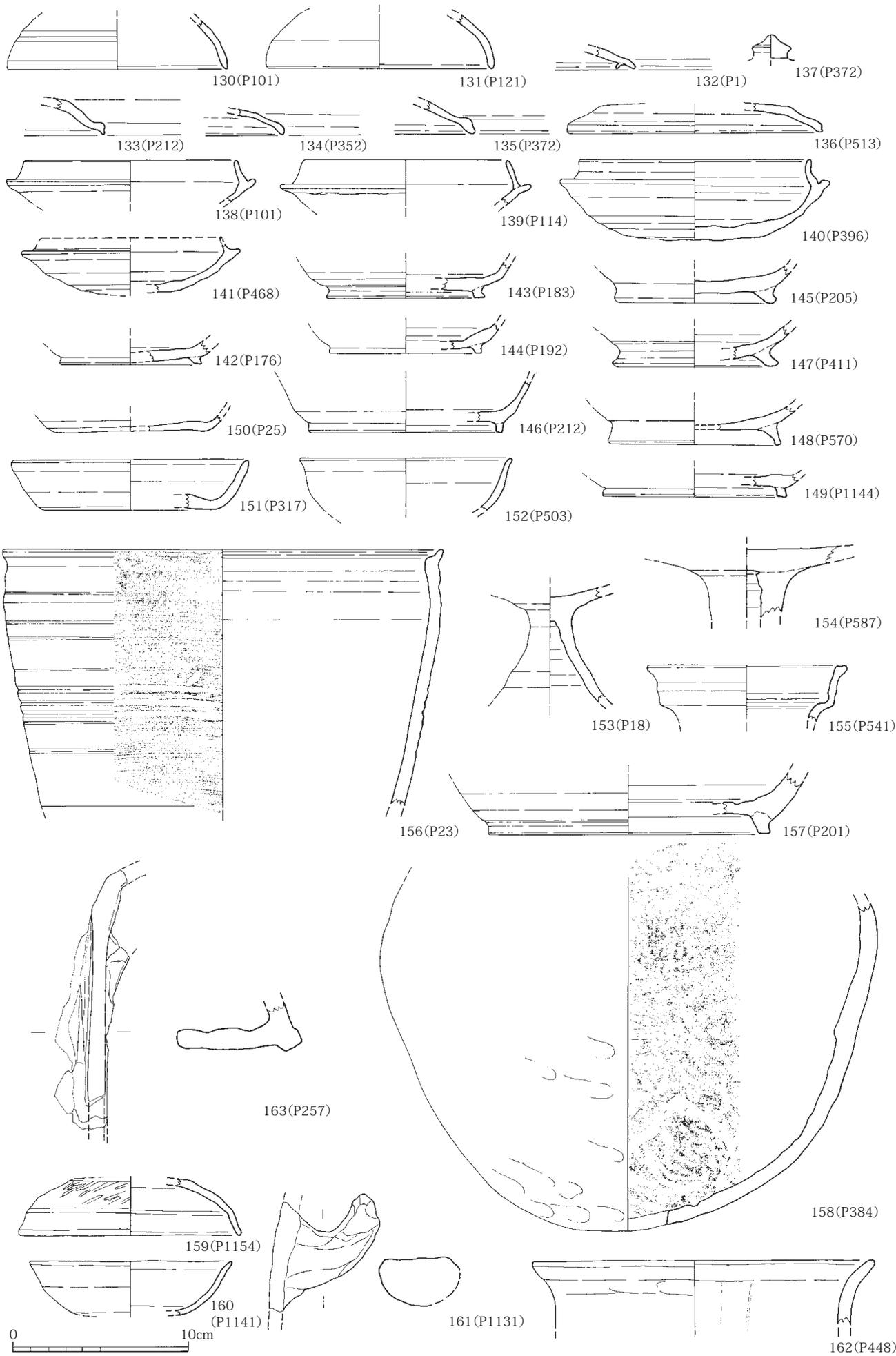
130から158は須恵器である。130から137は坏蓋片である。130と131はそれぞれ復元口径12.6、13.0cmを測り、外面に僅かに段がつく。132はかえりをもつ坏蓋口縁部片である。出土量は当遺跡内において比較的少ない。133～136は嘴状になる坏蓋口縁部片である。136は復元口径14.4cmを測る。137は擬宝珠状の坏蓋の撮みである。138～141は坏身片である。138～140は復元口径12.2、11.6、13.0cmを測る。口縁を欠損する141は復元受け部径で12.4cmを測る。142から149は高台付埴である。142～149は復元高台径でそれぞれ8.0、9.0、8.6、9.2、11.0、9.4、9.6、10.2cmを測る。高台部分は断面四角形や、外側に向かって開く形状のものがある。150は坏の底部片で外面底部にヘラ切りを施す。151は坏片で復元口径13.4cm、器高2.9cmを測る。152も坏片か。底部が欠損するので、埴の可能性もある。復元口径で12.0cmを測る。153と154の高坏片である。153は脚部が短く、脚端部に向かって外側に開く。154は厚手でしっかりと作られ長脚になる8世紀頃のものか。155は罍などの口縁部片か。口縁部は二重口縁となり、外側に向かって端部は反る。復元口径11.4cmを測る。調整は内外面とも回転ナデである。157は長頸壺の高台片か。ほとんど残存していないが、復元高台径16.0cmを測る。内面は回転ナデだが、外面にはヘラケズリ、ヘラ切りを施す。

159から162は土師器である。159は天井部を欠損する坏蓋片か。内外面とも胴部中程には段がつく。内面の調整は磨滅していて不明だが、外面底部に磨き調整が残る。160は坏片で、復元口径11.6cmを測る。内外面ともナデ調整である。161は甗の把手片で指ナデが明瞭に残る。162は甗の口縁部片で、ゆるやかに外側に向かって開き、復元口径20.4cmを測る。調整は不明だが、内外面とも口縁付近はナデ調整で、内面頸部片より下はケズリが施されている。

163は移動式竈の鏝片で所々に被熱を帯びている。残存する部位が少なく、どの位置にあたるか判断に苦慮する。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈す。かなり厚手にしっかりと作られていて、内外面ともかなり明瞭に指ナデを残す。



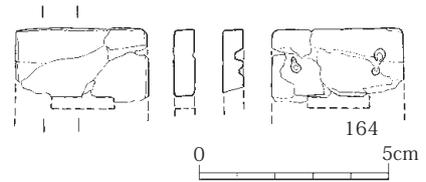
第43図 波板状遺構・ピットおよび波板状遺構出土土器実測図 (1/30・1/15・1/3)



第44図 ピット出土遺物実測図 (1/3)

7) 谷 (第46・47図)

I区では、谷に直交する方向で、東と西にトレンチを入れて土層観察をおこなった。この2箇所トレンチでは、基本的に土層の堆積状況などの差異はないことから、ここでは東トレンチの土層について報告している。



第45図 巡方実測図 (1/2)

谷の土層は、1層に調査着前までの耕作土(水田)が約0.2m、2層にその床土が約0.3m、3層に1970年代に行われた圃場整備時の橙色土が約0.5~1.5mが堆積していた。この3層の橙色土は、周辺を削り取った土だと思われる。4層には圃場整備以前の旧耕作土が約0.15mあり、この暗灰色粘土の旧耕作土は谷を覆うように確認できた。この谷地形を利用して稲作を行っていたと思われる。その下の5・6・7層はほとんど同じ灰色粘土で、近世頃の陶器片・火鉢片などが出土した。おそらく近世頃の水田跡と思われる。東トレンチ調査時には、この層に混ざって巡方が出土した。その下の8層は、マンガンを多く含む灰褐色土で約0.2mあり、パンケースで1箱分の須恵器・土師器の破片が出土した。さらにその下の9・10層の黒褐色粘土では、須恵器片がパンケース1箱分出土した。特に8世紀代の遺物が多く出土したが、その他にも鉄滓などの鍛冶関連遺物(次年度以降に報告予定)と、わずかであるが中世の青磁片が出土した。この9・10層を除去するとようやくGLから約2.7m下の標高34.4mになり、谷底へ到達する。地山は谷に向かうゆるやかな斜面部分では橙色土であるが、谷底へ向かうにつれ、徐々にグライ化して青灰色粘砂土に変わる。また谷底では水が絶え間なく流れていて、かなり粘土質が強く、遺構検出時は大変苦労した。この谷底に堆積した黒褐色粘土中には青磁片以外の新しい遺物が出土していないことから、少なくとも12世紀後半以後、谷は徐々に埋没していったと思われる。

今回の調査では谷底に遺構を確認することはできなかったため、谷底への調査はせず、遺構が検出できる斜面までを調査対象とした。

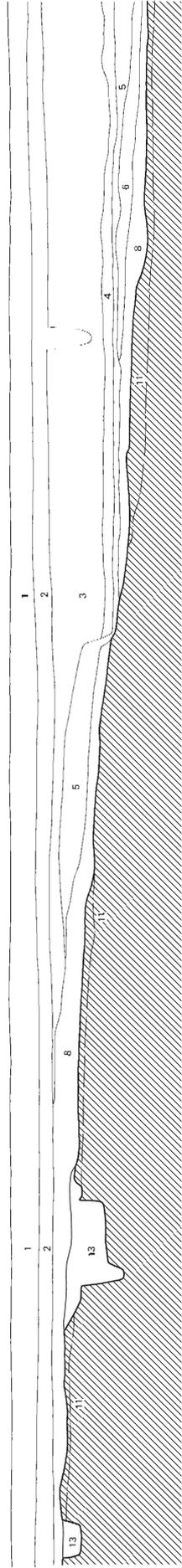
出土遺物(巻頭図版2、図版24、第45・48図)

谷部だけでパンケース3箱出土しているが、その中で実測可能なものをここでは取り上げている。

164は灰色粘土中で出土した巡方片である。出土時から状態は悪く、1/3は欠損している。石材は緑灰色の絹雲母片岩製である。大きさは1辺が3.4cm、残存している分で重さ7gを測る。また裏には巡方を留める径数mmの穴が4箇所空けられている。165から177までが、谷の黒褐色粘土層の遺物である。165から171は須恵器である。165は坏蓋片である。166は埴で口径14.4cm、器高4.9cmを測る。167、168も埴片でそれぞれ復元高台径10.0cm、8.8cmを測る。169~171も埴の高台片である。172は土師器埴の高台片で、高台の端部は細くなる。173は青磁小碗口縁部片か。174は龍泉系青磁埴体部片で、外面に連弁がある。175、176は丸瓦片で、共に内面は布目である。177は平瓦片で外面に叩き痕と内面はケズリか。178~188はI区の遺構検出時の遺物である。178は弥生土器甕の底部片か。ナデの痕跡が明瞭に残る。179~185は須恵器である。179はかえりのある坏蓋片である。180は口縁部が嘴状の坏蓋片で、復元口径12.8cm、器高1.35cmを測る。181は坏身で復元口径12.8cmを測る。182は坏身片で復元口径12.8cm、器高4.8cmを測る。183、184は埴片である。185は高坏脚部片である。186は土師器甕の頸部片か。外面には刷毛目で内面はを施す。187は甗の把手片である。188は平瓦片で、内面は布目である。189から190は旧耕作土の遺物である。189は須恵器甕の口縁部片で、外面には波状文や連続した刺突文を施す。190は土師器甕片で、内外面とも刷毛目調整である。

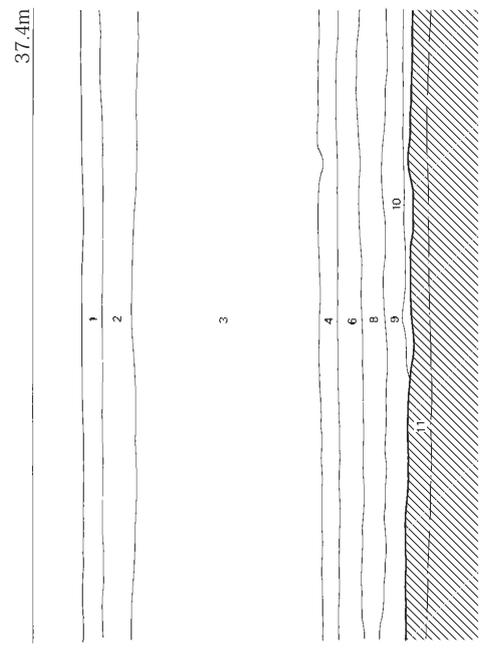
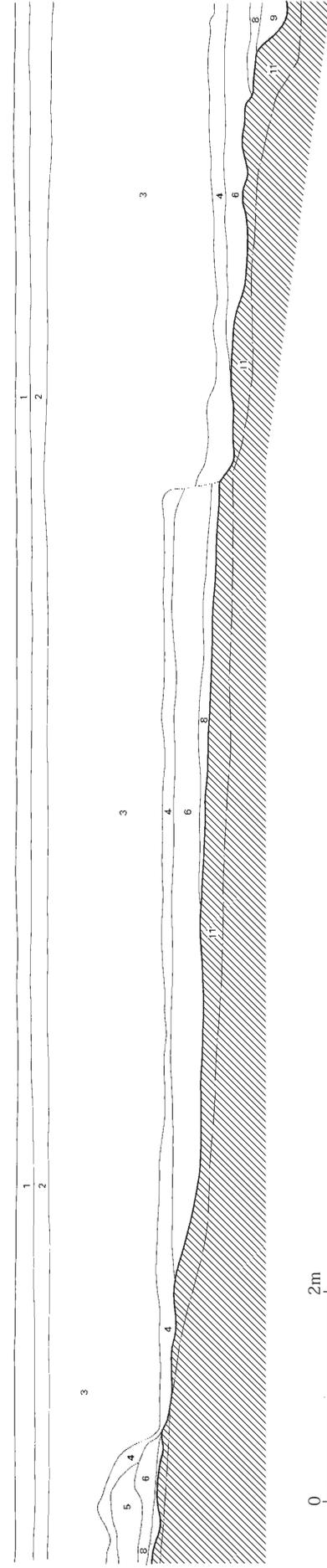
37.4m

A



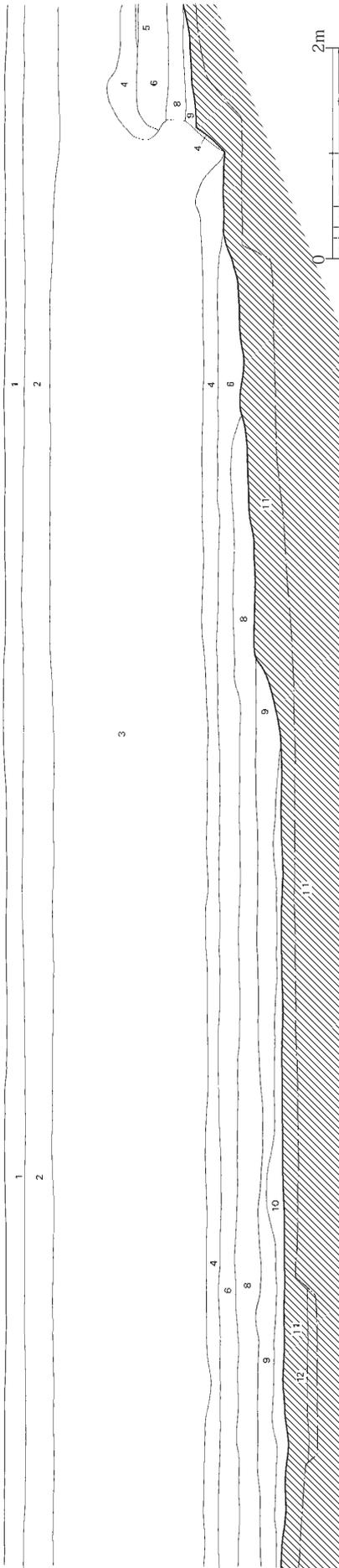
37.4m

B | C

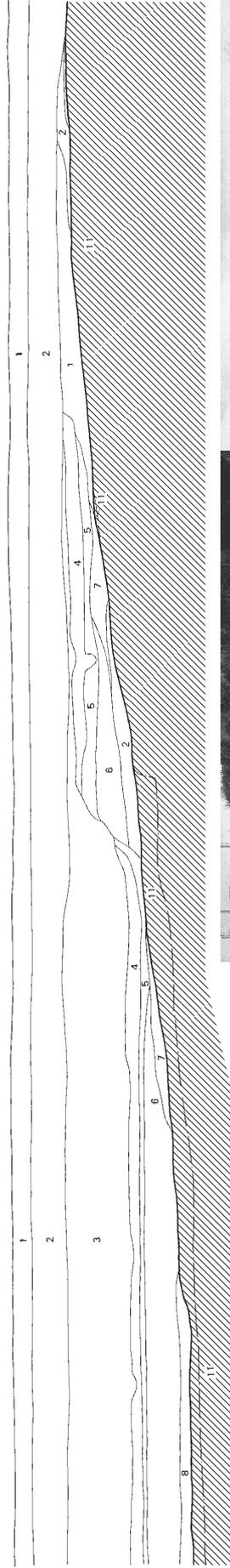


第46図 谷土層実測図1 (1/60)

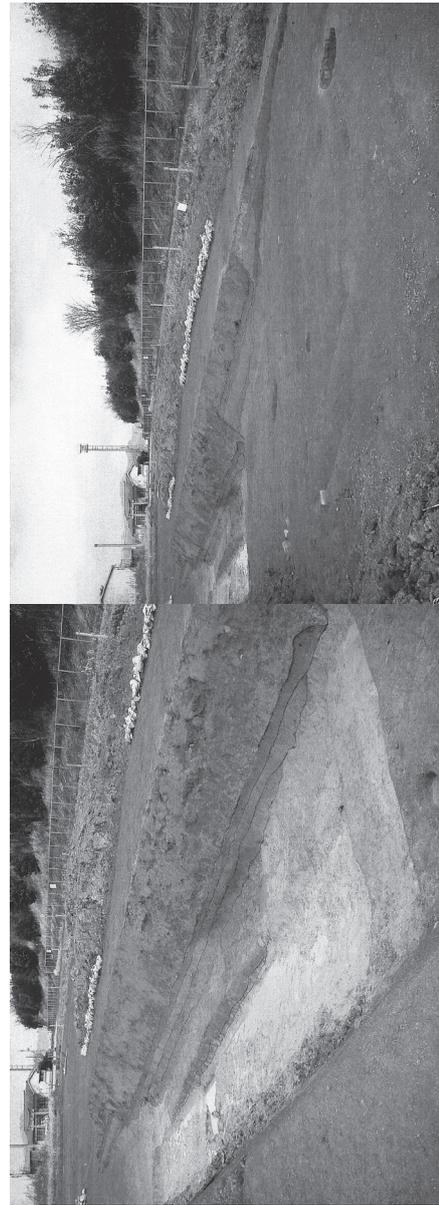
37.4m



37.4m D



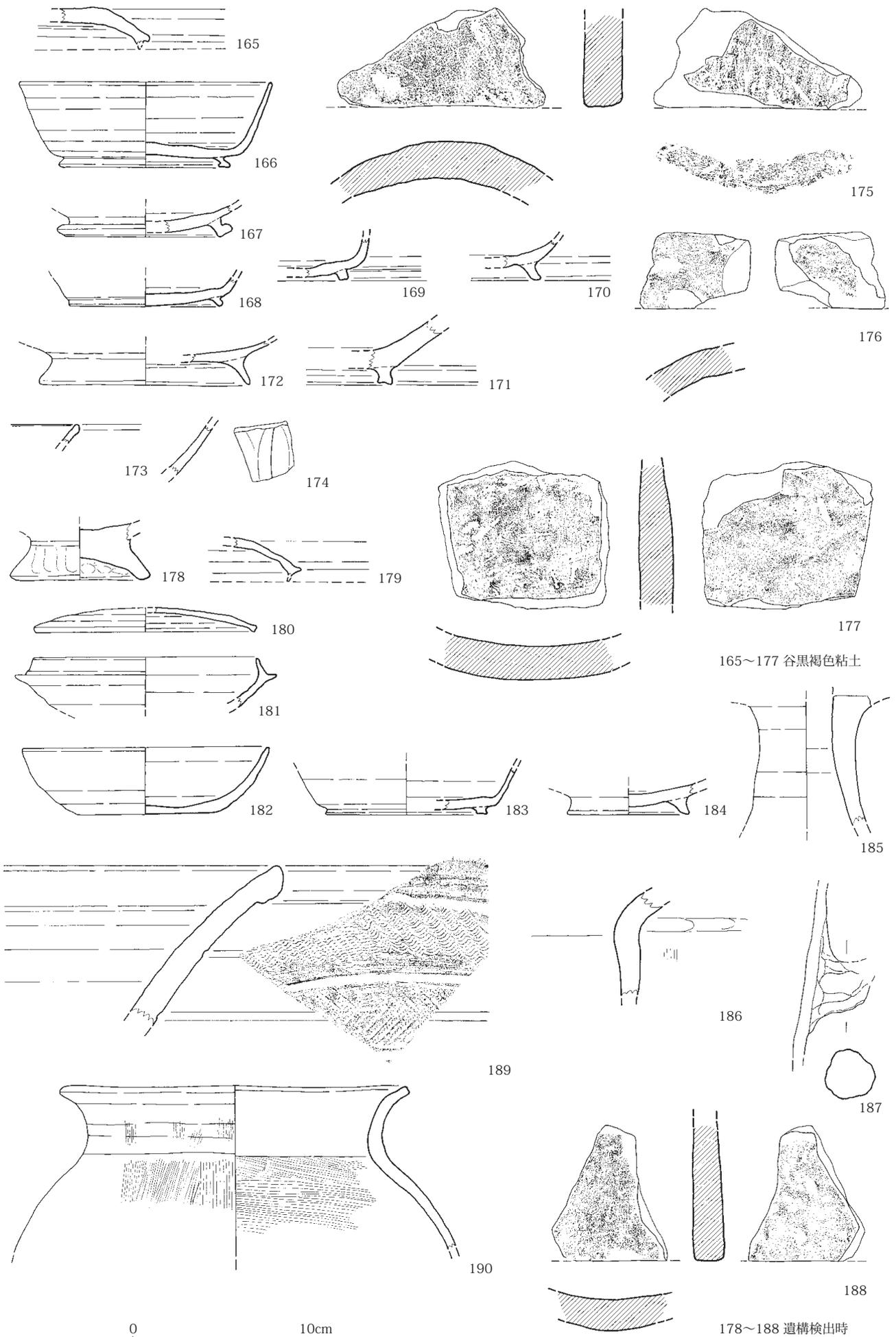
- 1 耕作土
- 2 床土 (暗褐色土)
- 3 盛土 (圃場整備時のもの)
- 4 旧耕作土 (圃場整備以前)
- 5 灰色粘土 (やや砂粒を含み、少し赤味を帯びる。)
- 6 灰色粘土 (やや砂粒を含み、少し黄味を帯びる。)
- 7 灰色粘土 (5・6よりは、粘性が強く赤味を帯びる。)
- 8 灰褐色土 (包含層) マンガン多く含む。
- 9 黒褐色粘土
- 10 黒褐色粘土 (ほぼ同じだが地山の土が混じる。)
- 11 棕色土 (地山)
- 12 青灰色粘砂土 (地山)
- 13 ビットの埋土 (暗褐色土)



東トレンチ土層3 (南)

東トレンチ土層4 (南)

第47図 谷土層実測図2 (1/60)



第48図 谷および遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)

8) 近世墓 (図版22、第49～53図)

近世墓は、Ⅱ区の高台から田地へ下る斜面際で検出した。近世墓の埋土は、掘り方部分で灰茶色土、木棺内の底面付近で暗灰色土となる。多くの近世墓の上面は削平を受けているが、いくつかの近世墓からは木棺の痕跡を確認できた。確認した木棺内からは人骨片、六文銭を出土した。なお出土した人骨は今回詳細な分析はしていない。50号近世墓は欠番であるが、1～10号近世墓は次年度以降で報告予定である。

11号近世墓 (第49図)

東側の近世墓群内で西に位置する。上面は削平されていたため、深さ0.2m程しかなかったが、掘り方の形状は長方形で長さ0.9×0.6mを測る。また長方形を呈する木棺部分は、長さ約0.7×0.4mを確認した。出土遺物は何もなかった。

12号近世墓 (図版22、第49図)

11号近世墓の南東に位置する。現存する掘り方はほぼ方形で長さ0.4～0.5m、深さ0.1m以下を確認した。上面の削平が著しいため、木棺の痕跡は確認できなかった。掘り方の外から古銭が出土した。

出土遺物 (第53図)

195は全体的に錆びつき、無理に剥すと破砕する恐れがあるため、4枚重なった状態にしている。そのため最上面と最下面だけが「寛永通宝」であることが解るが、残り2枚については不明である。最下面の「寛永通宝」は、今回出土した中で最も粗悪である。大きさは、径2.4cm、厚さ0.5cm、重さ12gを測る。

13号近世墓 (第49図)

11号近世墓の東側に位置する。現存する掘り方は隅丸長方形で長さ0.7×0.45m、深さ0.05mを確認した。これも上面の削平が著しかったため、遺物は何も確認できなかった。

14号近世墓 (第49図)

13号近世墓の東側に位置する。掘り方は隅丸長方形で長さ1.3×0.8m、深さ0.3m、木棺部分は長方形で長さ0.9×0.5mを測る。比較的残りは良かったが、近世墓に関わる遺物はなかった。埋土には、須恵器と土師器の小片が混入していた。

15号近世墓 (第49図)

14号近世墓の南側に位置する。掘り方は隅丸長方形で長さ約1.1×0.6m、深さ0.15m、木棺部分は長さ0.7×0.4mを測る。木棺内からは、古銭6枚とその下には木棺片を検出した。

出土遺物 (第53図)

古銭の種類が判別できるのは、196と197のみである。2点とも「寛永通宝」で、背面は「文」である。それぞれの径は2.5、2.6cm、厚さ0.1cm、重さ2、4gを測る。198～200は残りが悪く、198と200は1枚のみで、199のみ2枚重なる。いずれも表面が崩れていて判別できなかった。径2.5、2.5、2.4cm、厚さ0.1、0.2、0.1cm、重さ3、6、2gを測る。

16号近世墓（図版22、第49図）

14号近世墓の北東側に位置する。掘り方は隅丸長方形で長さ1.2×0.8m、深さ0.15m、木棺部分は0.8×0.4mを測る。木棺内からは人骨片と古銭6枚が重なった状態で出土した。頭蓋骨片の位置からは、南向きに屈葬されていたと思われる。

出土遺物（第53図）

201は出土した古銭は6枚で、すべて重なっている。最上面が唯一「寛永通宝」であることが解る。最下面は残りが悪く、判別できなかった。径2.4cm前後、厚さ0.7cm、重さ17gを測る。

17号近世墓（図版22、第49図）

16号近世墓の南側に位置する。掘り方は隅丸長方形で長さ1.2×0.9m、深さ0.15m、木棺部分は0.8×0.4mを測る。木棺部分の中央からは、古銭6枚が重なった状態で出土した。

出土遺物（第53図）

202は古銭は6枚重なった状態で出土したが、残りが悪く判別できなかった。大きさは径2.4～2.6cm、厚さ0.8cm、重さ15gを測る。

18号近世墓（第49図）

16号近世墓の北東側に位置する。上面はかなり削平されていて深さ0.05mしか残っていなかった。現存する掘り方は隅丸長方形で長さ0.6×0.5m、木棺部分は長さ約0.5×0.3mを測る。木棺内からは、数珠の一部と思われる水晶小玉が1点出土した。

出土遺物（第53図）

194は、径4mmの円形の水晶小玉である。

19号近世墓（第49図）

18号近世墓の北東側に位置し、掘り方は隅丸長方形で長さ約1.0×0.6m、深さ0.1mを測る。木棺部分はこの掘り方ギリギリの所に、長さ約0.8×0.5mを測る。遺物は何も出土しなかった。

20号近世墓（第49図）

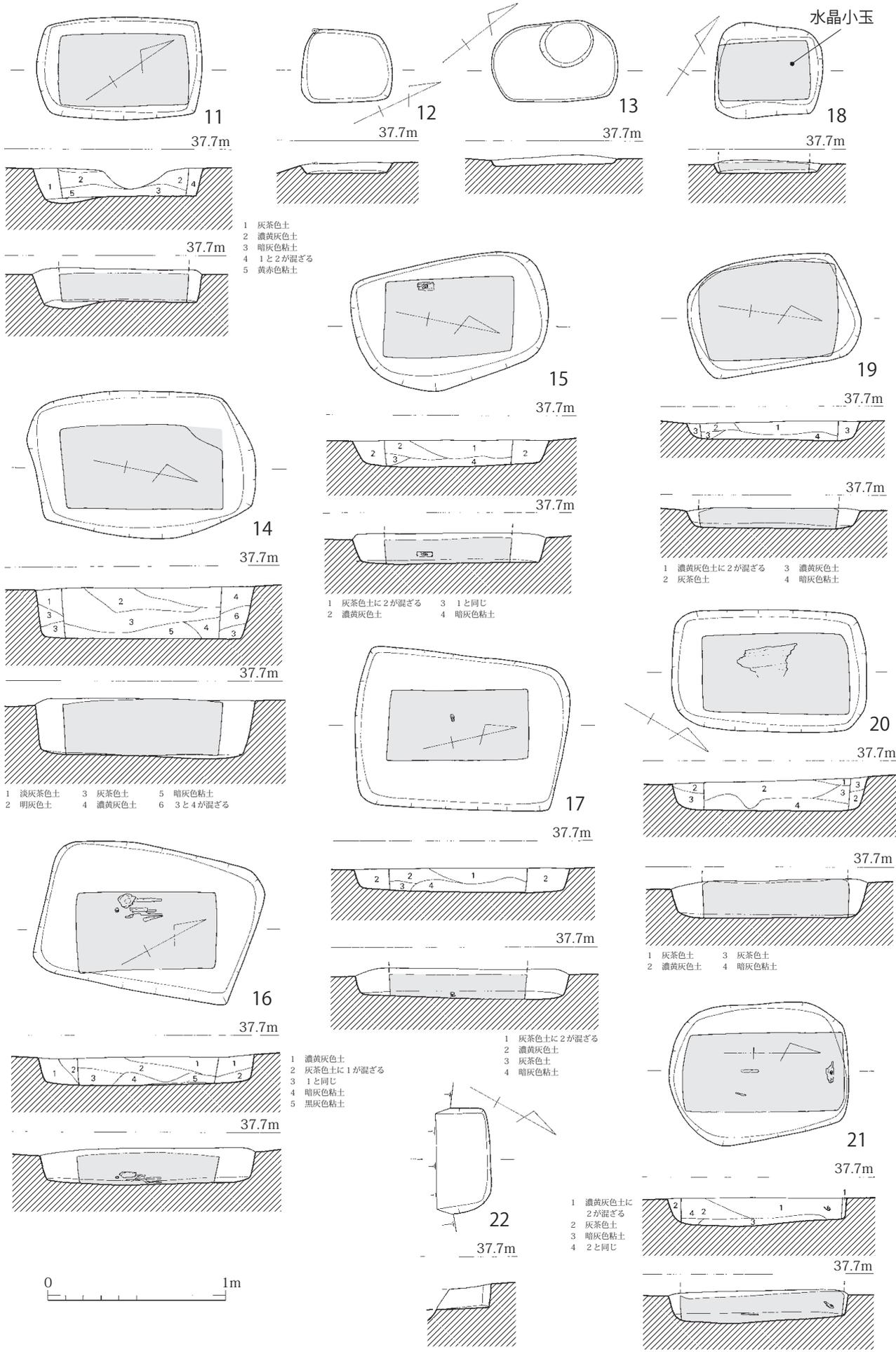
19号近世墓のすぐ南側に位置する。掘り方は隅丸長方形で長さ1.1×0.7m、深さ0.2mを測る。木棺部分は約0.8×0.4mを測る。木棺の痕跡内の中央では、木棺に使用された木材の痕跡長さ0.3×0.15m、厚さ0.01mを確認した。その他の遺物は出土しなかった。

21号近世墓（図版22、第49図）

20号近世墓の北側に位置する。掘り方は隅丸長形状で長さ1.0×0.8m、深さ0.15mを測る。木棺部分は約0.9×0.4mを測り、その中央部分の底面には部位不明な骨を検出した。また北側には木棺片と古銭6枚が重なった状態で出土した。

出土遺物（第53図）

203と204は3枚ずつ重なった古銭である。203は「寛永通宝」であるが、背面には何もなかった。204も「寛永通宝」と思われるが、表面が崩れていて判別できなかった。大きさは、径2.5cm、厚さ0.3、0.4cm、重さはそれぞれ7gを測る。



第49図 近世墓実測図1 (1/30)

22号近世墓（第49図）

21号近世墓の南側の斜面部分にあり、2/3程削平されていてほとんど残存していない。現存する掘り方は長方形で長さ0.6×0.3m以上、深さ0.15mを測る。木棺の痕跡や出土遺物は、確認できなかった。

23号近世墓（図版22、第50図）

21号近世墓の北側に位置する。掘り方は長方形で長さ1.3×0.8m、深さ0.4m、木棺部分は長さ0.8×0.4mを測る。木棺内には人骨と木棺片と重なった古銭5枚を確認した。出土した人骨の状態は悪く、左右の大腿骨片と思われる骨が2本、部位が不明な骨を数本検出した。この人骨の位置から推測すると、やや北西方向に頭を置き、屈葬していたと考えられる。また遺体の頭の近くには古銭等の供え物をしていたと思われる。

出土遺物（第53図）

205は重なった古銭5枚で、状態が悪いが最上面の一枚が僅かに「寛永通宝」であることが解る。背面は「文」である。径2.4cm、厚さ0.7cm、重さ13gを測る。

24号近世墓（図版22、第50図）

23号近世墓の南東に位置する。掘り方はほぼ方形で長さ0.6～0.7m、深さ0.1m、木棺部分は0.5×0.4mを測る。木棺内には、部位不明な人骨片と古銭5枚を検出した。

出土遺物（第53図）

206は2枚重なった状態の「寛永通宝」で、裏は状態が悪く不明である。207は3枚重なった状態でこれも「寛永通宝」である。これも裏は状態が悪く不明である。それぞれ径2.4、2.5cm、厚さ0.3、0.2cm、重さ6、7gを測る。

25号近世墓（第50図）

24号近世墓の南東側に位置し、約1/2が削平されていた。掘り方は長方形で長さ0.6以上×0.6m、深さ0.2m、木棺部分は長さ0.3以上×0.4mを測る。ほとんどが削平されていたが、古銭2枚が出土した。

出土遺物（第53図）

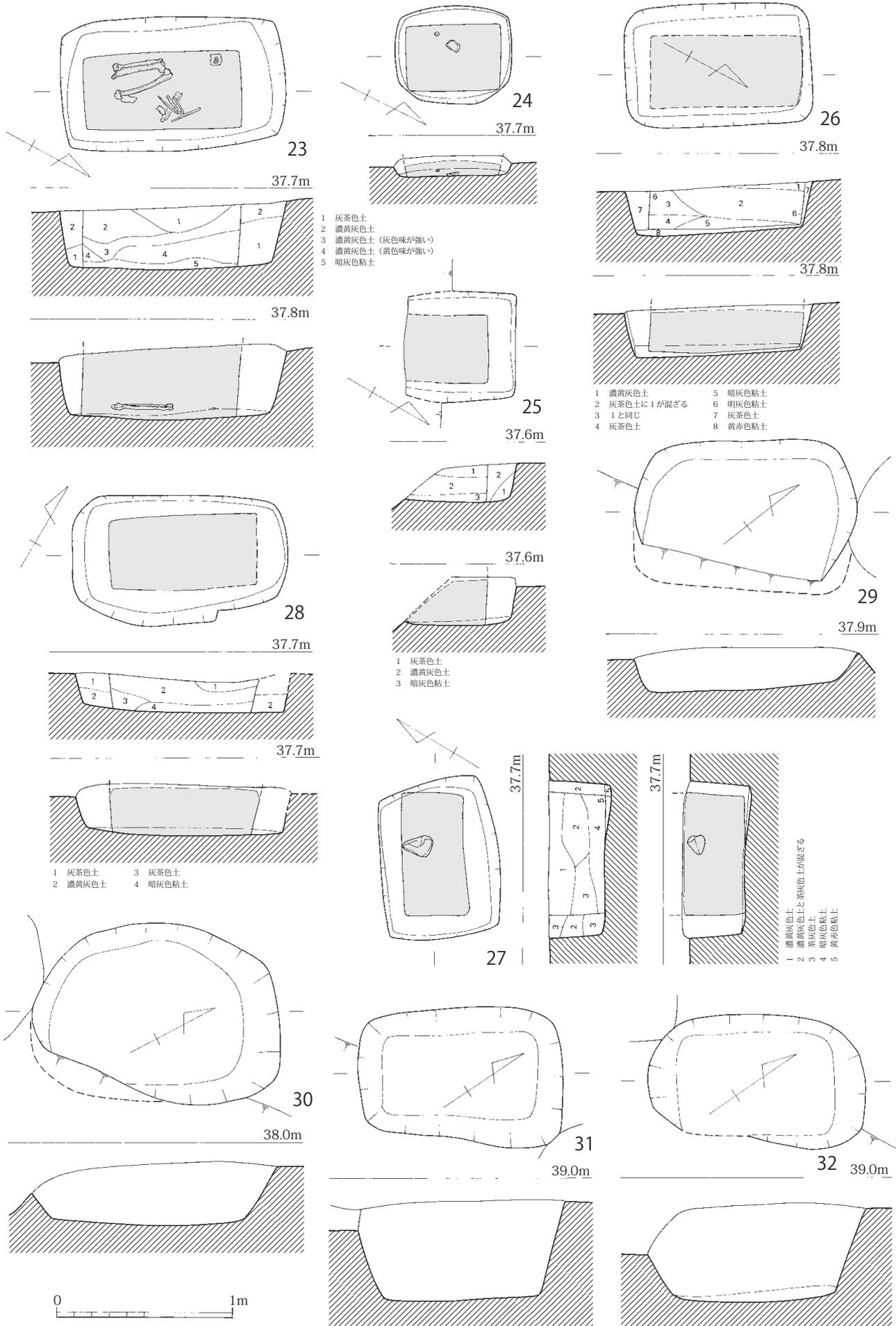
208は2枚重なった古銭で「寛永通宝」である。大きさは径2.4cm、厚さ0.2cm、重さ2gを測る。背面は状態が悪く判別できない。

26号近世墓（第50図）

23号近世墓の北東側に位置する。掘り方はほぼ隅丸長方形で長さ1.1×0.7m、深さ0.25m、木棺部分は長さ0.9×0.4mを測る。遺物は何も出土しなかった。



11～28号近世墓（東から）



第50図 近世墓実測図2 (1/30)

27号近世墓（第50図）

26号近世墓の南側に位置する。掘り方は長方形で長さ0.9m×0.7m、深さ0.35m、木棺部分は長さ0.7×0.35mを測る。木棺内上面には、この墓の標石かと思われる約20cmの石が落ち込んでいた。近世墓に係る出土遺物は確認できなかった。

28号近世墓（第50図）

27号近世墓の南東側に位置し、1/4程攪乱を受けていた。掘り方は隅丸長方形で長さ1.2×0.75m、深さ0.2m、木棺部分は0.8×0.4mを測る。木棺内には土師質鉢の口縁部片が出土した。出土遺物（第53図）

191は土師質鉢の口縁部片である。口縁部は内側に折り込まれていて肉厚になる。内外面ともナデ調整である。

29号近世墓（第50図）

斜面に位置し、30号近世墓と接する位置にある。約1/2を削平を受けている。現存する掘り方は長さ約1.2×0.8m、深さ0.2mを測る。木棺の痕跡や出土遺物は検出されなかった。

30号近世墓（第50図）

29号近世墓と接する位置にあり、これも斜面にあるため約1/4程は削平を受けている。掘り方は若干膨らんでいるが、長さ1.4×1.0m、深さ0.4mを測る。これも木棺の痕跡や出土遺物は検出されなかった。

31号近世墓（第50図）

30号近世墓の東側に位置し、32号近世墓と接する。これも斜面にあるため、上面は削平を受けていた。現存する掘り方は隅丸長方形で長さ1.2×0.7m、深さ0.5mを測る。これも木棺の痕跡や出土遺物は検出されなかった。

32号近世墓（第50図）

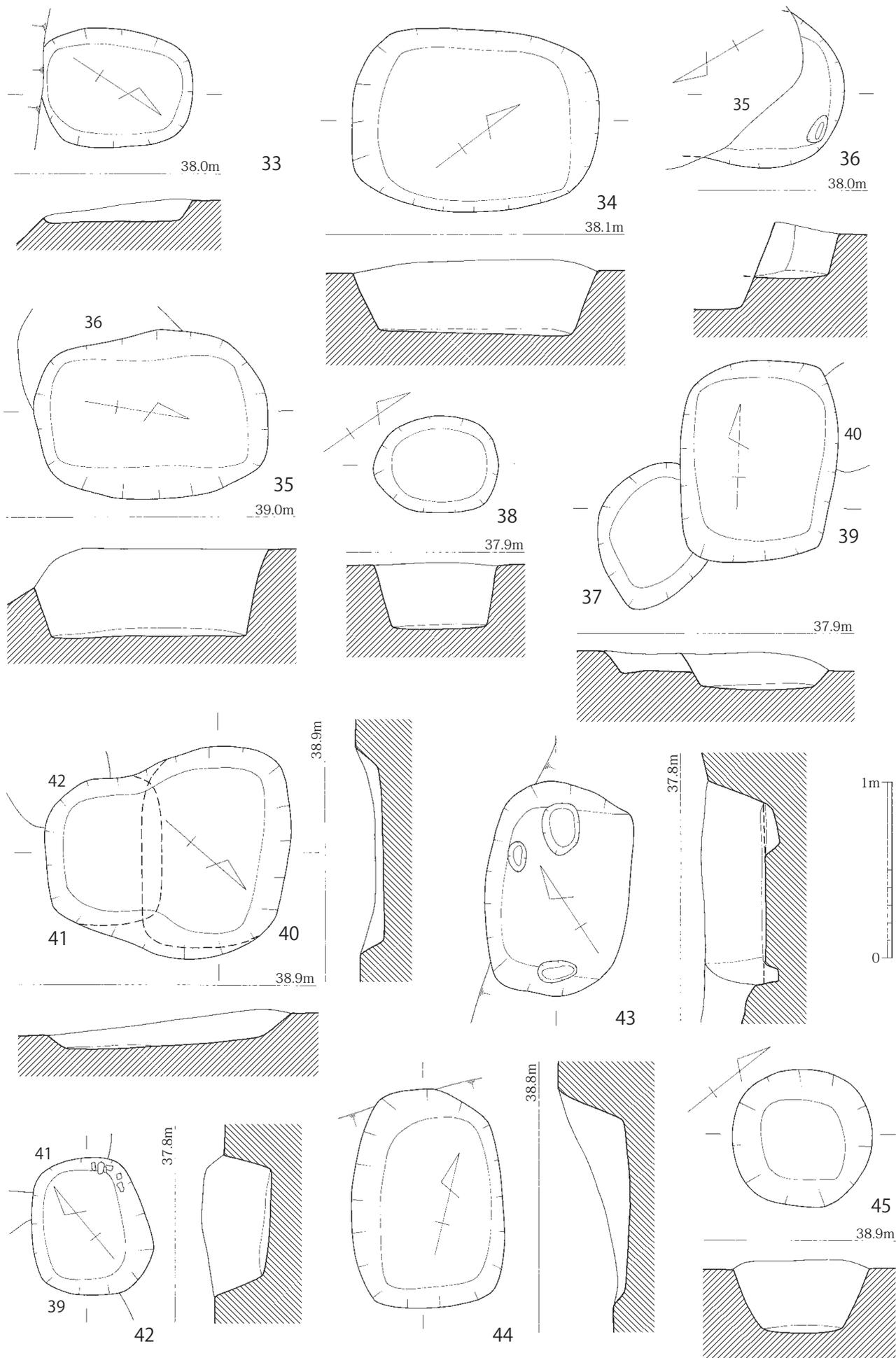
31号近世墓と接する位置にあり、1/3程削平を受けていた。掘り方は隅丸長方形で長さ1.2×0.8m、深さ0.5mを測る。これも29・30・31号近世墓と同様で、木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。

33号近世墓（第51図）

32号近世墓の東側に位置し、これも斜面際にあるため削平されていた。掘り方は隅丸長方形で長さ0.8×0.65m、深さ0.15m程を測る。非常に浅くほとんど残存していなかった。木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。

34号近世墓（第51図）

33号近世墓の北に位置する。掘り方は隅丸長方形で長さ1.4×1.0m、深さ0.4mを測る。これも掘り方のみしがなく、木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。



第51図 近世墓実測図3 (1/30)

35・36号近世墓（第51図）

33号近世墓の東に位置し、36号近世墓を切る形で検出した。掘り方は隅丸長方形で長さ1.2m×約1.0mを測り、ほぼ北向きに作られる。これも掘り方のみの検出で、木棺の痕跡や出土遺物もなかった。また36号近世墓は35号近世墓にほとんど切られていて、1/3以下程しか残存していない。掘り方のみしか検出されなかったため、木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。

38号近世墓（第51図）

37・39号近世墓の西側近くに位置する。掘り方は隅丸方形で長さ0.6m、深さ0.5mを測る。他の近世墓と比べると長さが一回り小さく、成人棺ではないのかもしれない。これも掘り方のみで、木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。

37・39号近世墓（第51図）

37号近世墓は39号近世墓に切られる形で検出した。現存する掘り方はほぼ隅丸方形で長さ0.7m、深さ0.15mを測る。39号近世墓は37・42号近世墓を切る形で検出した。ほぼ真北に作られ、掘り方は隅丸長方形で長さ1.1m×0.8m、深さ0.2mを測る。37号近世墓は39号に比べて小さく、小児棺の可能性もある。共に木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。

40・41号近世墓（第51図）

38号近世墓の東に位置し、40・41号近世墓は近接する形で検出した。40号近世墓の掘り方は隅丸長方形で長さ1.2×0.8m、深さ0.15mを測る。41号近世墓は、40号近世墓に比べて一回り小さく、掘り方は隅丸方形に近い形状で長さ0.8×0.7m、深さ0.1mを測る。40・41号近世墓ともに上面は削平されているため、浅い掘り方の検出のみであった。そのため木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。

42号近世墓（第51図）

39・40号近世墓に切られる形で検出した遺構である。掘り方は隅丸方形で長さ約0.8m前後、深さ0.3mを測る。39号近世墓と比べてやや小さいので、小児棺の可能性もある。これも他の近世墓同様に掘り方のみの検出である。埋土から土師器片を出土したが、近世墓に係る木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。

43号近世墓（第51図）

42号近世墓の南側に位置する。掘り方は隅丸長方形で長さ1.2m×0.8m、深さ0.4mを測る。斜面際にあるため2/3ほど削平を受けていた。そのため木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。なお、底面は樹木の根の浸食をかなり受けていて、凹凸状になる。

44号近世墓（第51図）

43号近世墓の東側に位置する。ほぼ真北に作られ、掘り方は隅丸長方形で長さ1.2×約0.8mを測る。これも斜面にあるため、上面はかなり削平を受けて深さ0.1m程しか残存していない。そのため木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。

45号近世墓（第51図）

44号近世墓の北側に位置する。掘り方はほぼ隅丸方形で径0.8m、深さ約0.4mを測り、これも一回り小さく小児棺の可能性もある。掘り方のみで木棺の痕跡は確認できなかった。

46・47号近世墓（第52図）

45号近世墓の北側に位置し、47号近世墓に一部を切られる。ほぼ真北に作られ、掘り方は隅丸方形で約1.0×0.8m、深さ0.3mを測る。掘り方のみで木棺の痕跡は確認できなかった。埋土から須恵器片を出土した。47号近世墓は、46号近世墓を切る形で検出した。掘り方は隅丸方形で長さ0.9×0.75m、深さ0.35m、木棺部分は0.5×0.35mを測る。これも木棺部分の大きさから小児棺の可能性もある。47号近世墓からは出土遺物はない。

48号近世墓（第52図）

45号近世墓の東側に位置し、49号近世墓に一部切られている。上面は削平されていたが、掘り方は隅丸長方形で長さ0.85×0.7m、深さ約0.2mを測る。木棺部分は長さ0.7×0.45mを測る。27号近世墓と同様に、この墓の標石と思われる10cm前後の石が上面で検出した。また底面には木棺片と古銭6枚が重なった状態で出土した。

出土遺物（第53図）

209は、最上面と最下面とも背面で6枚が重なった古銭である。最上面には「文」、最下面には何もなかった。最上面は「文銭」と呼ばれる「寛永通宝」と思われる。径2.5cm、厚さ0.8cm、重さ18gを測る。

49号近世墓（図版22、第52図）

48号近世墓を切る形で検出し、内部主体が木棺である近世墓とは異なる甕棺墓である。上面は削平され、深さ0.2m程しか残っていなかった。そのため甕の胴部下半～底部のみ残っていた。掘り方は、甕より少し広く円形で径0.4mを測る。甕の内部には、褐色土や茶灰色土が堆積していたが、骨などの遺物は出土しなかった。

出土遺物（図版24、第53図）

192は土師質の甕で、復元底径で31.6cmを測る。胴部から上は欠損して不明である。底部には外側に向かって反る高さ1.2cm程の足が3つある。調整はナデであるが、内面は明瞭に横ナデの痕跡がある。焼成はやや軟質で、灰褐色を呈する。

51号近世墓（第52図）

52号近世墓と接する形で検出する。掘り方は隅丸方形で長さ約0.6m、深さ0.3m、これも一回り小さく小児棺の可能性もある。木棺部分は長さ0.4×0.3mを測る。出土遺物はない。

52号近世墓（第52図）

51号近世墓に接し、53号近世墓に切られている。掘り方は隅丸長方形で長さ1.5×1.45mと他の近世墓より一回り大きい。上面は削平されていて、深さ0.2m前後しかなかった。これも掘り方のみで木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。

53号近世墓（第52図）

52号近世墓を切る形で検出した49号近世墓と同じ甕棺墓である。斜面にあるため削平をかなり受けていて、甕の底部片しか残存していなかった。掘り方は円形で径0.6m、深さ0.15mを測る。甕の底部片以外の近世墓に係る遺物は出土していない。

出土遺物（第53図）

193は大部分を欠損する土師質甕の底部片で、復元底部径31cmを測る。51号近世墓で使われた甕よりは、高台部分は低く横に伸びている。これは49号近世墓出土の甕と同じで、三つ足がつくと思われる。調整は内外面ともナデである。

54号近世墓（第52図）

29号近世墓近くの斜面に位置するため、1/3程しか残存していなかった。深さ0.4mを測る。これも掘り方のみの検出だけだが、おそらく木棺墓と思われる。埋土からは、焼成の悪い瓦質の火鉢片と思われる破片が出土したが、図化していない。

55・56号近世墓（第52図）

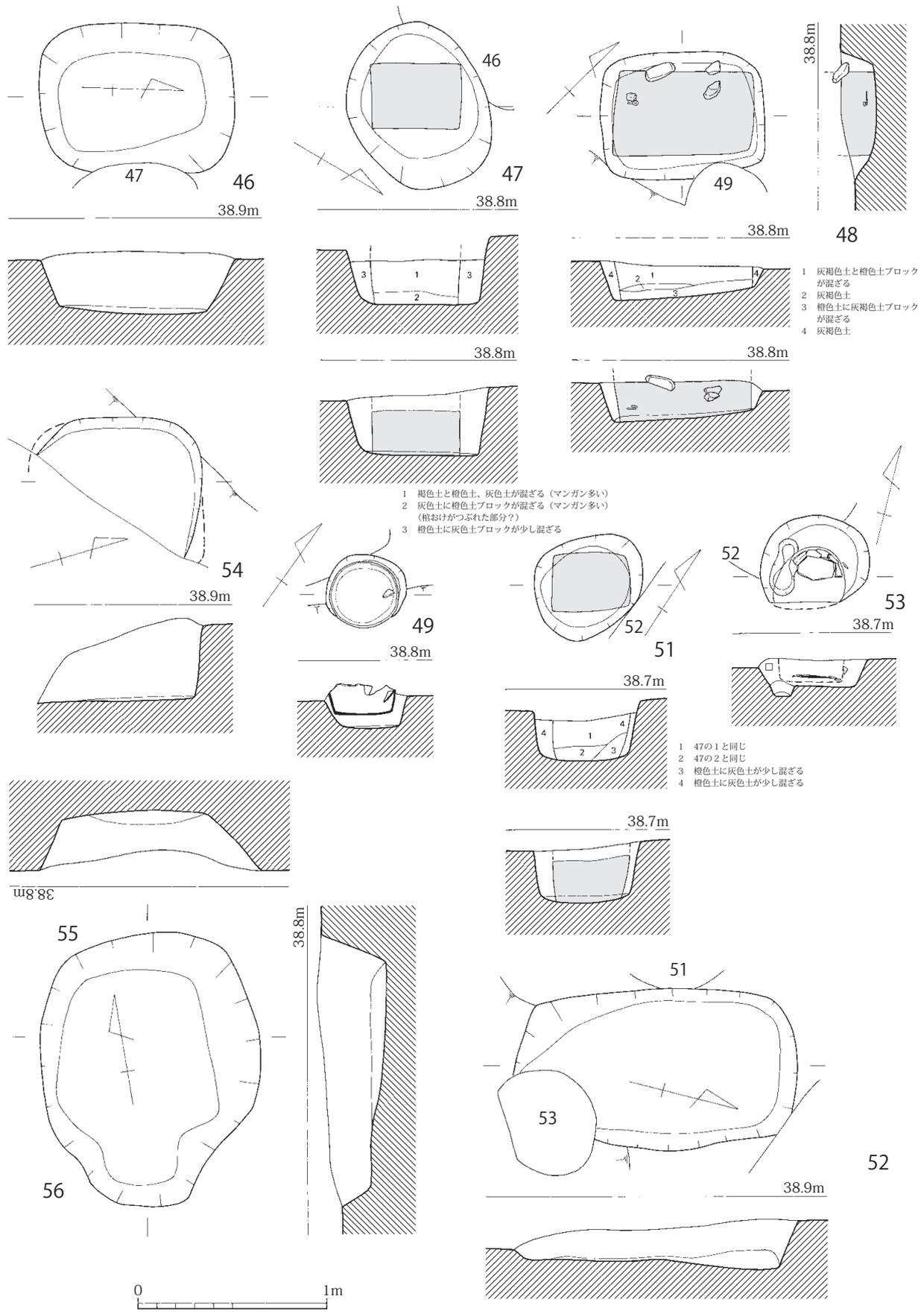
47号近世墓のすぐ北に位置する。55号近世墓の掘り方は方形で長さ1.2m、深さ0.35mを測る。上面では1基だと思い掘削したが、南側には真北向きに幅約0.4m程の凹んだ痕跡を確認したので、この部分を56号近世墓とした。この55・56号近世墓も掘り方のみの検出だけで、木棺の痕跡や出土遺物は確認できなかった。

今回、検出した近世墓の大部分は木棺墓であった。ただ49・53号近世墓の2基のみ甕棺墓である。今回、検出した近世墓の多くは掘り方のみで木棺の埋葬方向は不明だが、墓の掘り方の方向から大きく3群に分けられる。真北方向では、14～17・19・21・35・39・44・46・52・56号近世墓、北東方向では、20・22～26・33・47・49・53号近世墓、北西方向では、11～13・18・27・28～32・34・36～38・40～43・45・48・51・54・55号近世墓とに分けられる。この3群の前後関係は、真北方向の35・39号近世墓が北西方向の36・42号近世墓を切ることや、北東方向の47・49・53号近世墓が真北方向の46・52号近世墓と北西方向の48号近世墓を切ることから推測できる。それにより、北西方向が古く、それに続いて、真北方向、北東方向の順ではないかと思われる。

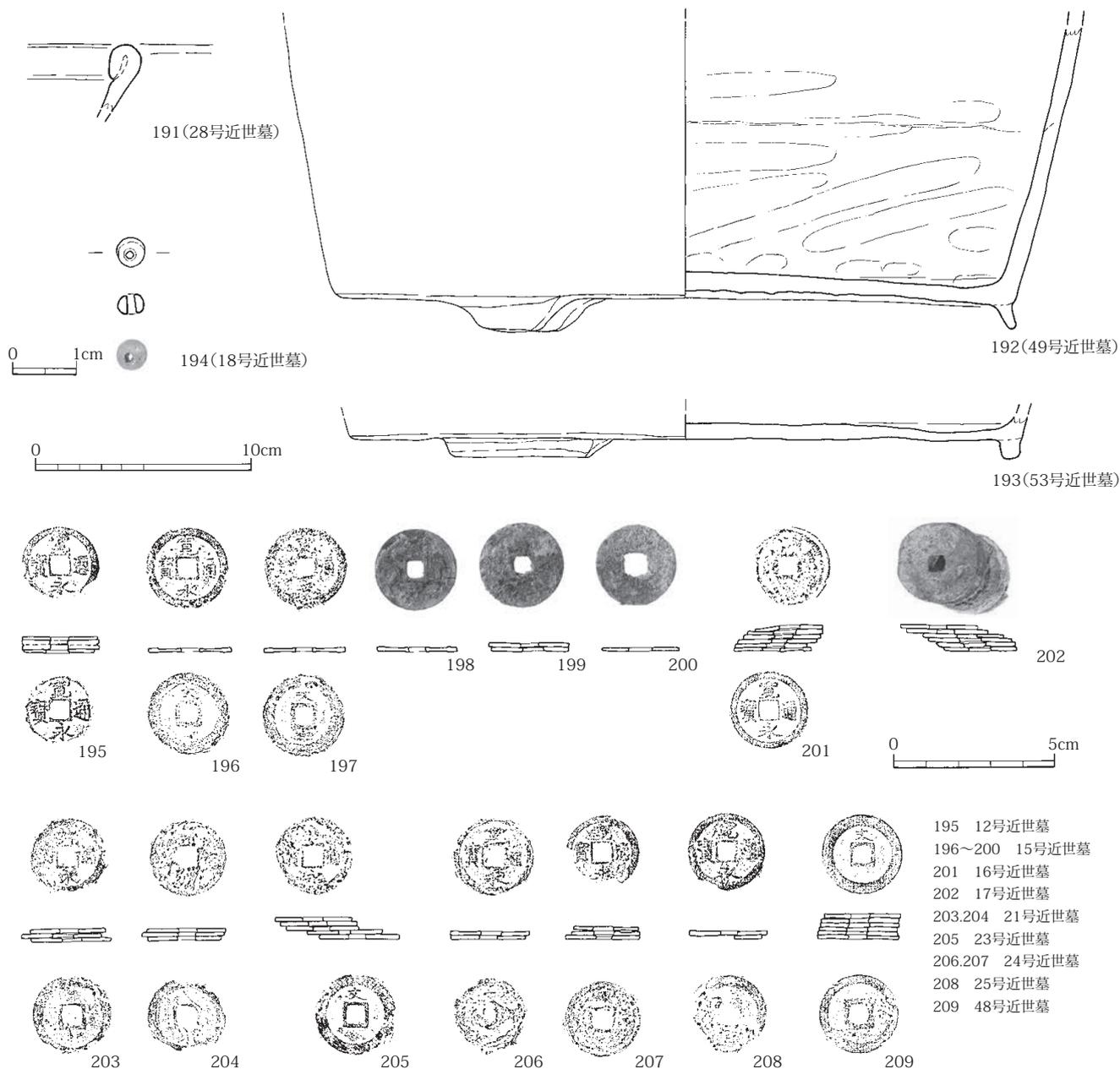
また、近世墓の詳細な時期を検討するのは難しいが、一部の古銭から「文銭」が出土していることと甕棺墓の甕から詳細な時期が判断できるかもしれない。なお、他にも近世墓が皆見大塚古墳の墳丘上でも10基検出しており、次年度以降に報告予定である。



29～56号近世墓（東から）



第52図 近世墓実測図4 (1/30)



第53図 近世墓出土遺物実測図 (1/3・1/2・1/1)

9) 特殊遺物 (図版23、第54図)

土製品

1~5は土錘である。1~4は管状土錘でいずれも紡錘形である。法量は、それぞれ全長3.0~4.7cm、径1.1~1.7cm、孔径0.3~0.5cmを測る。2のみ全長が1~3よりも短い。断面形はいずれも正円形を呈する。5は今回出土した中で唯一の有孔棒状土錘で、円筒形の胴部の上端に横方向の穿孔を施す。胴部は一部欠損するが、全長4.0cm、径1.7cm、孔径0.7cmを測る。6は土製模造品である。形状は楕円形を呈し、中央部分はずつまみ部分を造り鏡形になる。法量は、全長2.7cm、最大幅2.7cm、最大厚1.8cmを測る。

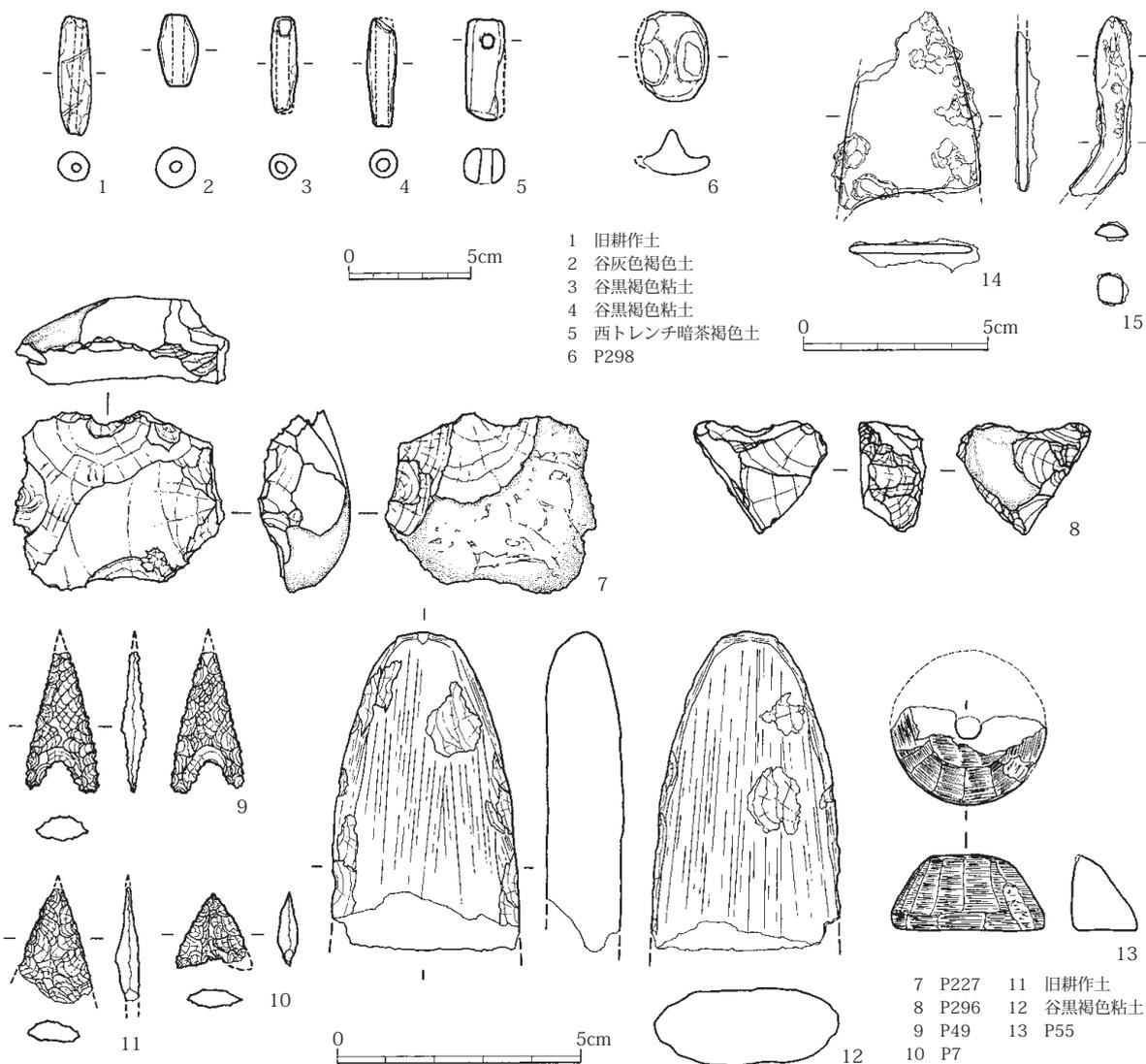
石製品

7・8はスクレイパーである。7は石核の一部に刃部加工を施したもので、背面は自然面を残す。

石材は珪質岩である。8は背面の一部に四千面を残し、一部に刃部加工を施す。石材は赤瑪瑙である。9～11は石鏃である。9はやや胴長で左右非対称をなし、基部端部は左右に長く突出する。断面は凸レンズ状をなす。石材はサヌカイトである。10は平面が正三角形に近い形で、断面は凸レンズ状である。基端部は片側が欠損するが、鋭く尖った形状をなす。石材は姫島産黒曜石である。11は基部を欠損し、断面は片面が膨らむ凸レンズ状をなす。石材は姫島産黒曜石である。12は磨製石斧で刃部を欠損する。平面は基部に向かってすぼまるが、特に側縁部に未研磨部分が残る。断面は扁平な楕円形をなす。石材は蛇紋岩である。13は紡錘車で約半分を欠損する。形状は裁頭円錐形をなし、横方向に研磨を施し面取りをする。石材は滑石である。

鉄製品

14は68号土坑出土の無茎鏃である。現存長4.9cm、最大幅3.8cm、最大厚0.2cmを測る。身部の断面は平作りで、刃部は直線的にすぼまる。左側の逆刺は確認できるが、右側は完全に欠損する。15はP217出土の長茎鏃である。残存長4.4cm、身幅1.0cm、身厚0.4cm、頸幅0.7cm、頸厚0.8cmを測る。身部の平面形は長三角形であるが、関部分は不明瞭である。頸部は一部を残し欠損する。身部の断面形は片丸で、頸部の断面形は方形をなす。



第54図 土製品・石製品・鉄製品実測図 (1/3・2/3・1/2)

IV まとめ

今回のカワラケ田遺跡2次調査のI・II区では、掘立柱建物跡36棟、竪穴住居跡3軒、土坑21基、溝2条、近世墓45基を報告した。今回、報告した遺構の出土遺物は少なく、時期を詳細に決めるのは困難であったが、主な遺構の時期別変遷は第55図に示すとおりである。

縄文時代の遺構としては、1・2・63号土坑の落とし穴状遺構が挙げられる。出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、カワラケ田遺跡のある丘陵の北側に位置する徳永川ノ上遺跡などでも、縄文時代の落とし穴状遺構を多数検出している。このことから考えて、1・2・63号土坑も同様な時期ではないかと思われる。

弥生時代の遺構としては、唯一確認できた68号土坑の貯蔵穴である。底面のみの検出だったが、出土土器から弥生時代中期後半頃と思われる壺片が出土する。皆見遺跡やカワラケ田遺跡1次調査でも、同時期の遺構を確認している。

弥生時代後期～古墳時代中期の遺構は検出されなかった。

古墳時代後期～奈良時代にかけては、掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土坑、溝などの遺構を多数確認した。これら掘立柱建物跡・竪穴住居跡の時期は、出土遺物から7世紀～8世紀が想定される。詳細な時期を検討するのに苦慮したが、周囲の建物との関係などから以下に分けられる。

○7世紀前半頃の遺構

3・5・9・18号掘立柱建物跡、9・10・11号竪穴住居跡、12・67号土坑、5号溝

5号掘立柱建物跡は、中央の柱穴より7世紀初め頃の須恵器坏片出土する。その横にある3号掘立柱建物跡の出土遺物は少なく時期が不明確だが、5号掘立柱建物跡と同方向に建つことから、この時期の可能性がある。また9・18号掘立柱建物跡も周囲の建物との関係、出土遺物、3・5号掘立柱建物跡とほぼ同方向に建つことなどからこの時期と考えられる。

竪穴住居跡は今回3軒検出し、9・10・11号竪穴住居跡からは7世紀前半頃の須恵器片が出土する。住居は他の建物とはあまり併存せず、7世紀中頃までには廃絶したと思われる。

12号土坑は、9・28号掘立柱建物跡の柱穴に切られていることから7世紀前半よりも少し前の可能性がある。67号土坑は出土遺物こそないが、11号竪穴住居跡の近くに位置することからこの時期としたい。また5号溝からは7世紀前半頃の土師器の甕片が出土する。

○7世紀中～後半頃

2・6・8・11・16・19・21・23・24・25・28・29・51・54号掘立柱建物跡

5・6・11号土坑・6号溝

北東際にある2・6・8・25・29号掘立柱建物跡は、ほぼ同一方向に建つ。これらの出土遺物は少なく、6・29号掘立柱建物跡からは7世紀中頃の須恵器坏片からこの時期か。さらに南にある28号掘立柱建物跡は、10・11号掘立柱建物跡との切り合いから28→11→10号掘立柱建物跡の順で建てられる。出土遺物から28号掘立柱建物跡は7世紀中頃以降と判断できるので、11・10号掘立柱建物跡はそれ以降と思われる。16・19・21・54号掘立柱建物跡もほぼ同一方向で並び建つ。特に16・19号掘立柱建物跡からは7世紀中頃の須恵器片が出土し、また54号掘立柱建物跡は7世紀前半の9・10号竪穴住居跡を切るなので、その時期以降になる。23・



第55图 I・II区主要遺構變遷圖 (1/ 600)

24号掘立柱建物跡は総柱建物であるが、7世紀前半の掘立柱建物跡と比べて建物方向が西へずれる。近くの19・21・54号掘立柱建物跡と建物方向がほぼ同じであり、この時期以降の可能性もある。Ⅱ区の51号掘立柱建物跡は、出土土器からこの時期である。

土坑・溝については、出土遺物から5・6・11号土坑は7世紀中～後半と判断した。6号溝については、唯一時期が判断できる須恵器坏蓋片から7世紀後半頃とした。

○8世紀頃

4・7・10・12・14・15・17・20・22・26・27・50・52・53・55号掘立柱建物跡

14・15号掘立柱建物跡は須恵器片や瓦片からこの時期と判断し、2つの建物とはほぼ同じ方向である7号掘立柱建物跡も同時期の可能性もある。22号掘立柱建物跡は8世紀代の須恵器埴片が出土することや21号掘立柱建物跡の柱穴を切る。20号掘立柱建物跡は出土遺物こそないが、19・22号掘立柱建物跡との関係からこの時期の可能性もある。26・27号掘立柱建物跡も8世紀代の遺物が出土する。Ⅱ区の52・53号掘立柱建物跡は、出土遺物が少なく詳細な時期は不明だが、他の建物とはほぼ同方向に建つことからこの時期と判断した。

12・17号掘立柱建物跡はほぼ同一方向に建つが、17号掘立柱建物跡から8世紀代の遺物が出土する。しかし12号掘立柱建物跡は、7世紀代の出土遺物や26号掘立柱建物跡と切り合うことから7世紀代の可能性もある。また4・50・55号掘立柱建物跡は出土遺物が少なく詳細な時期は不明だが、他の建物群と建物方向が異なり、この時期以降とも考えられる。

遺構の時期別変遷状況から、当遺跡は7世紀前半頃に建物や住居が建てられ、7世紀中頃～後半になると、谷地形に沿って並んで建てられる。その後、8世紀でも同様に建物が建て替えられ存続するが、8世紀後半以降になると建物はほとんどなくなり、集落は他へ移動したと思われる。

・巡方について

カワラケ田遺跡2次調査では、谷の灰色粘土層内から巡方が1点出土した。福岡県内出土の銚帯は、52遺跡（※宮田2002より）で確認されている。京築地域では、北から行橋市の高来井正丸遺跡（丸靱 蛇紋岩製）と天生田矢萩遺跡（巡方 蛇紋岩製）、みやこ町の豊前国府跡（巡方 頁岩製）、築上町の赤幡森ヶ坪遺跡（丸靱 粘板岩製）と越路貴船遺跡（丸靱 結晶片岩製で、黒漆が付着）、豊前市の久路土鐘鐙田遺跡（巡方 蛇紋岩製）、久路土鐘遺跡（銚帯 銅製）、大村石畑遺跡（銚帯 銅製）、上毛町の下唐原伊柳遺跡（巡方 粘板岩製）から出土している。これらの銚帯などは、明確な遺構に伴うわなない出土も多々あるが、奈良～平安時代の集落や官道沿いでの出土も確認されている。当遺跡の巡方も明確な遺構からの出土ではない。目立った官衙関係の出土遺物などもないが、出土地では官道が南側を通り、さらに8世紀の掘立柱建物跡を確認している。また、豊前国府が当遺跡の数km先に位置することも加味すれば、この巡方の持ち主の謎が解るのではないかと思われる。

（参考文献）

- ・豊津町教育委員会編 1990『豊前国府および節丸西遺跡』豊津町文化財調査報告書第9集
- ・福岡県教育委員会編 1992『赤幡森ヶ坪遺跡』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告8 中巻
- ・福岡県教育委員会編 2001『越路六郎遺跡・越路貴船遺跡』主要地方道椎田勝山線関係埋蔵文化財調査報告5
- ・宮田浩之 2002「九州地方の銚帯」『銚帯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
- ・大平村教育委員会編 2003『下唐原伊柳遺跡』大平村文化財調査報告書第14集
- ・行橋市史編纂委員会 2006『行橋市史 資料編 原始・古代』
- ・豊前市教育委員会編 2007『大村石畑遺跡』豊前市文化財調査報告書第22集
- ・豊前市教育委員会編 2010『久路土鐘鐙田遺跡 久路土芝掛遺跡 久路土高松遺跡』豊前市文化財調査報告書第27集
- ・行橋市教育委員会編 2011『高来小月堂遺跡・高来井正丸遺跡・高来殿屋敷遺跡』行橋市文化財調査報告書第38集

※巡方については築上町教育委員会の高尾氏、豊前市教育委員会の棚田氏、上毛町の矢野・佐藤氏からご教示をいただいた。

圖 版

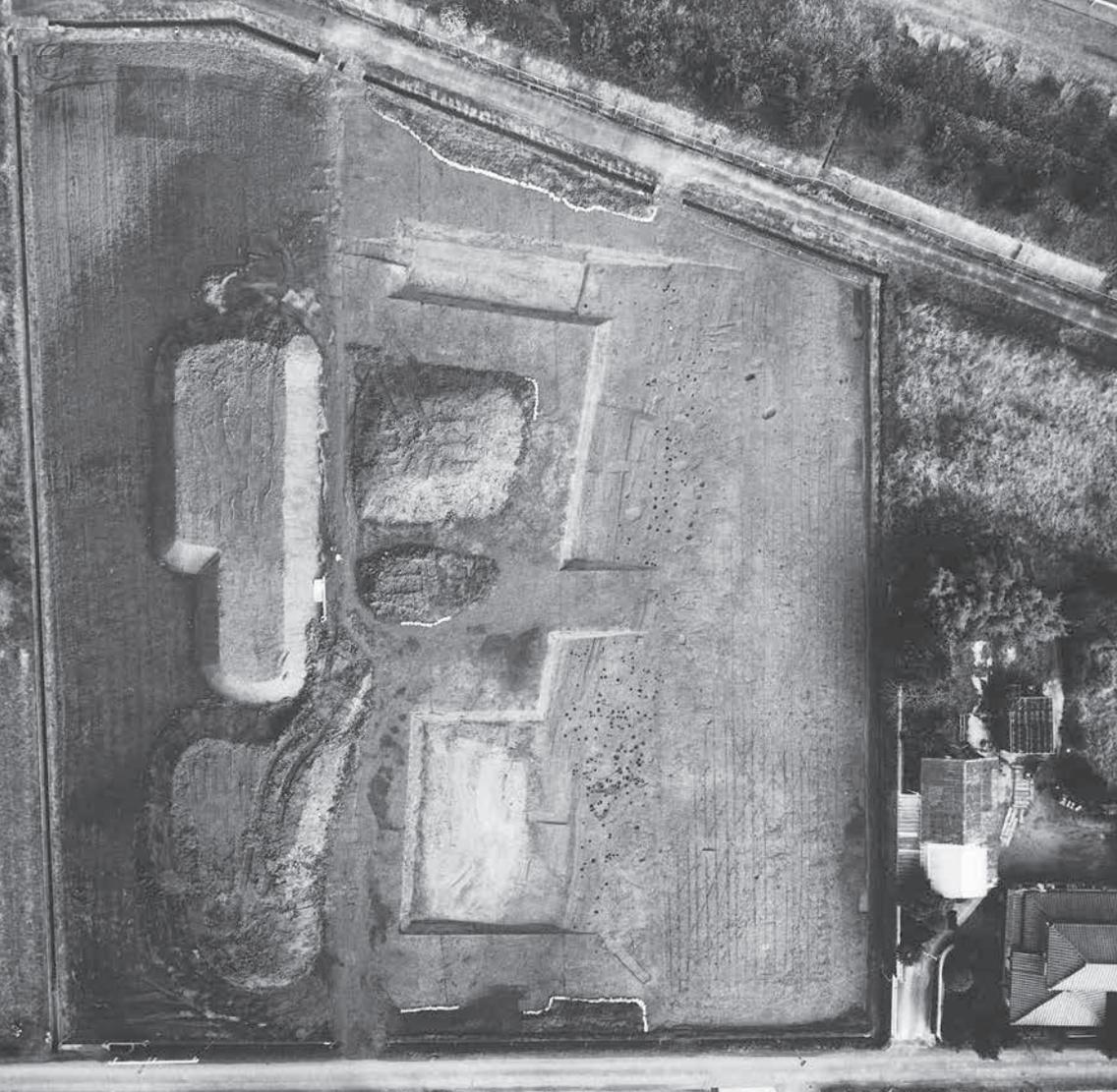
図版 1

1 カワラケ田遺跡 2次調査地
遠景 (手前 東から)



2 カワラケ田遺跡 2次調査地
遠景 (中央 西から)





3 I区東側全景（真上から）



4 I区西側全景（真上から）

5 I区西側全景1 (真上から)



6 I区西側全景2 (真上から)



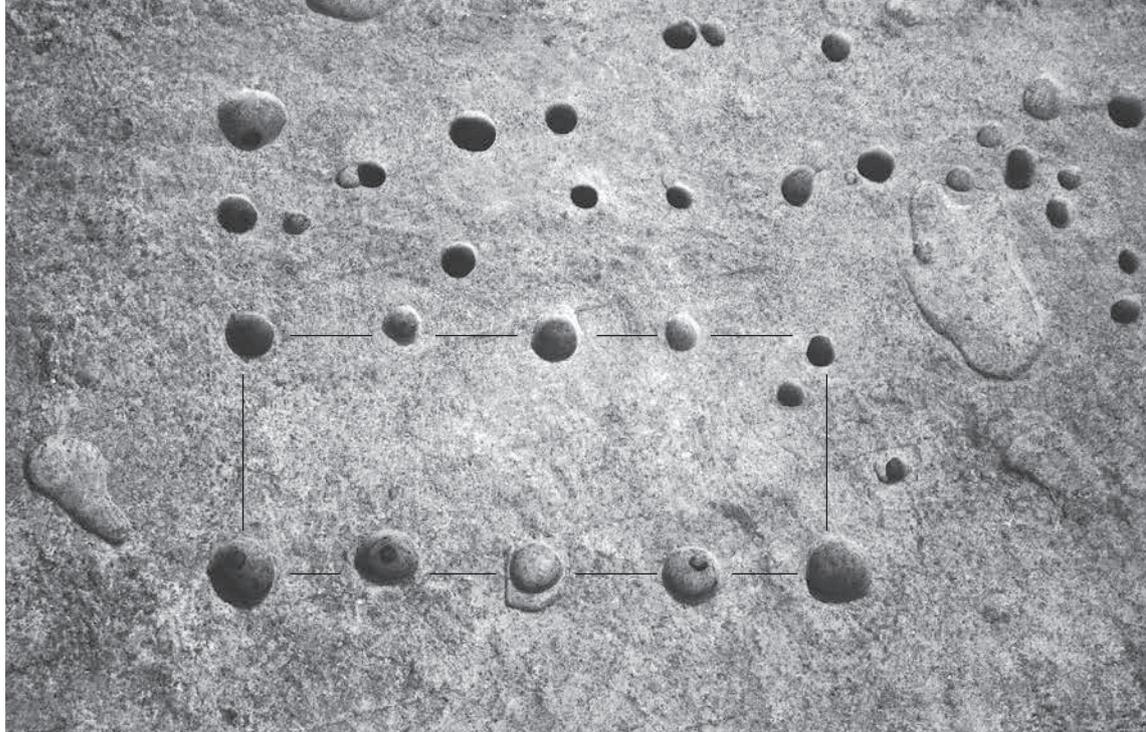


図版 4

7 II区西側全景（真上から）



8 II区東側全景（真上から）



9 1号掘立柱建物跡 (真上から)



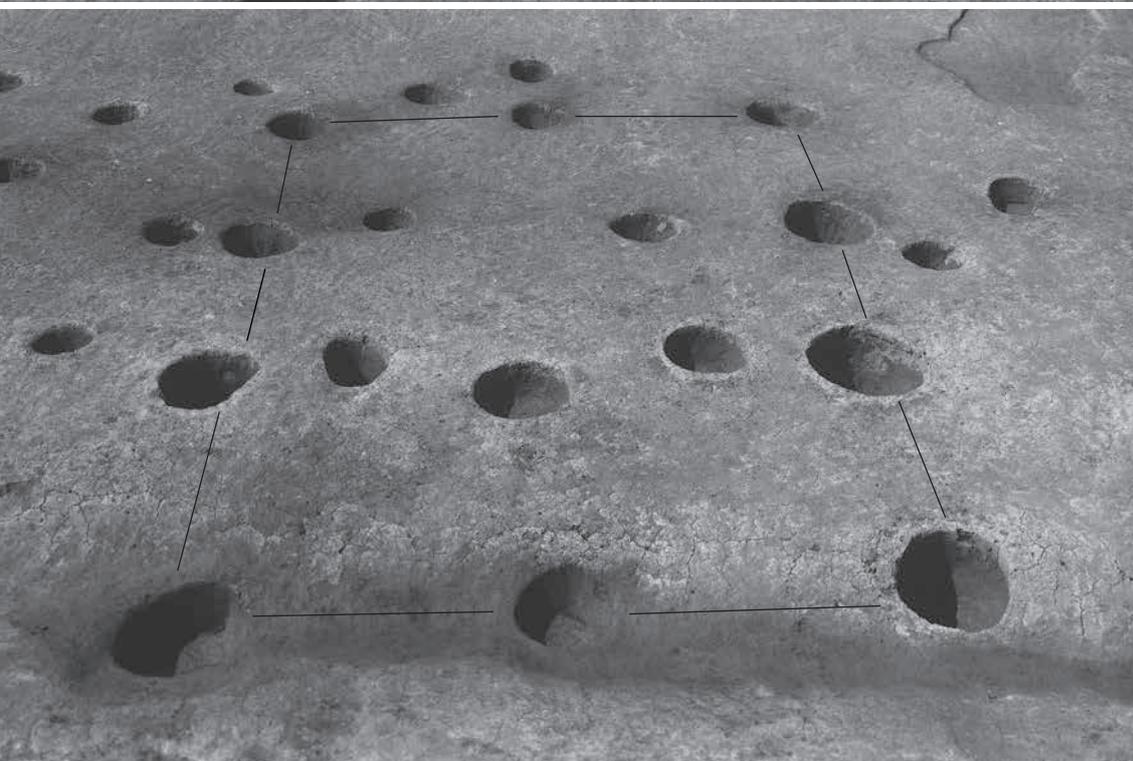
10 2・3・5・29号掘立柱建物跡 (南から)



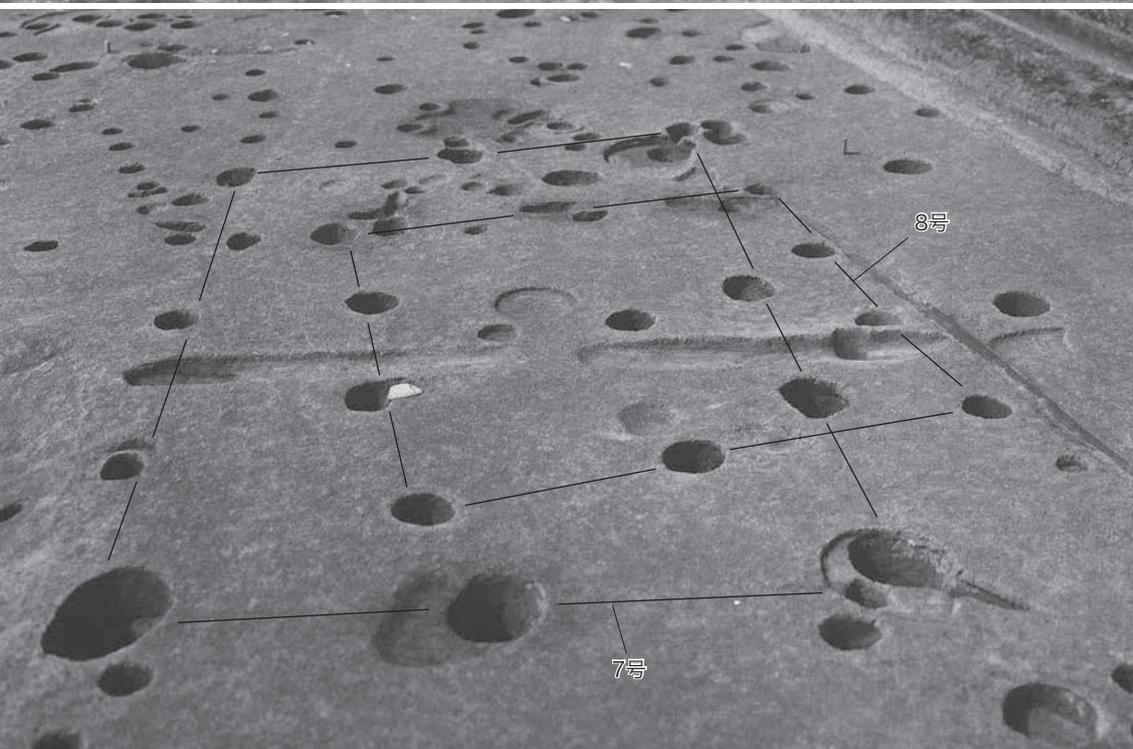
11 4号掘立柱建物跡 (南から)



12 5・29 掘立柱建物跡（南から）



13 6号掘立柱建物跡（南から）

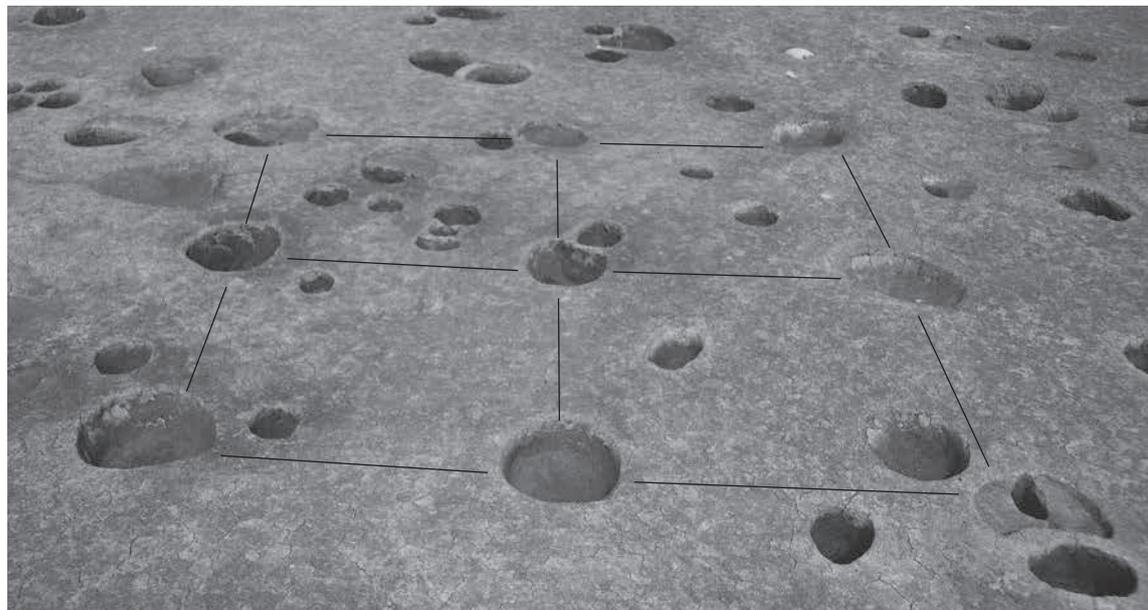


14 7・8号掘立柱建物跡（北から）

図版 7



15 9・10・11号掘立柱建物跡
(北から)



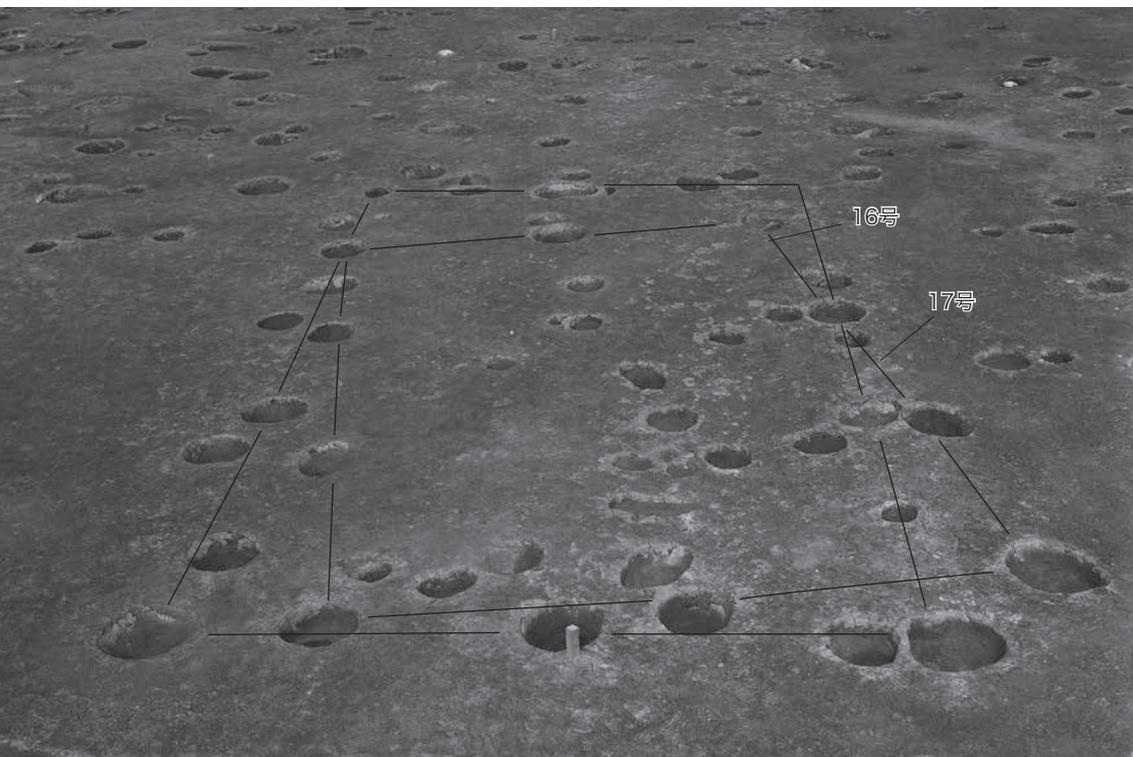
16 12号掘立柱建物跡 (南から)



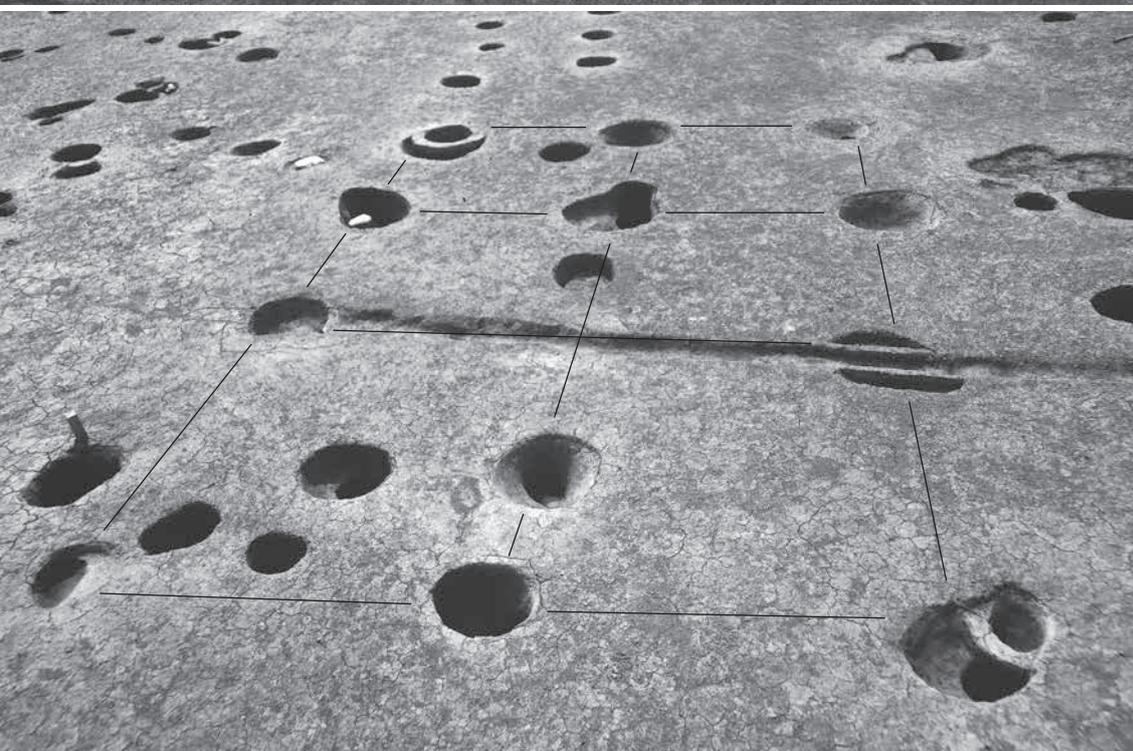
17 14号掘立柱建物跡 (南から)



18 15号掘立柱建物跡（南から）



19 16・17号掘立柱建物跡（南から）



20 18号掘立柱建物跡（南から）

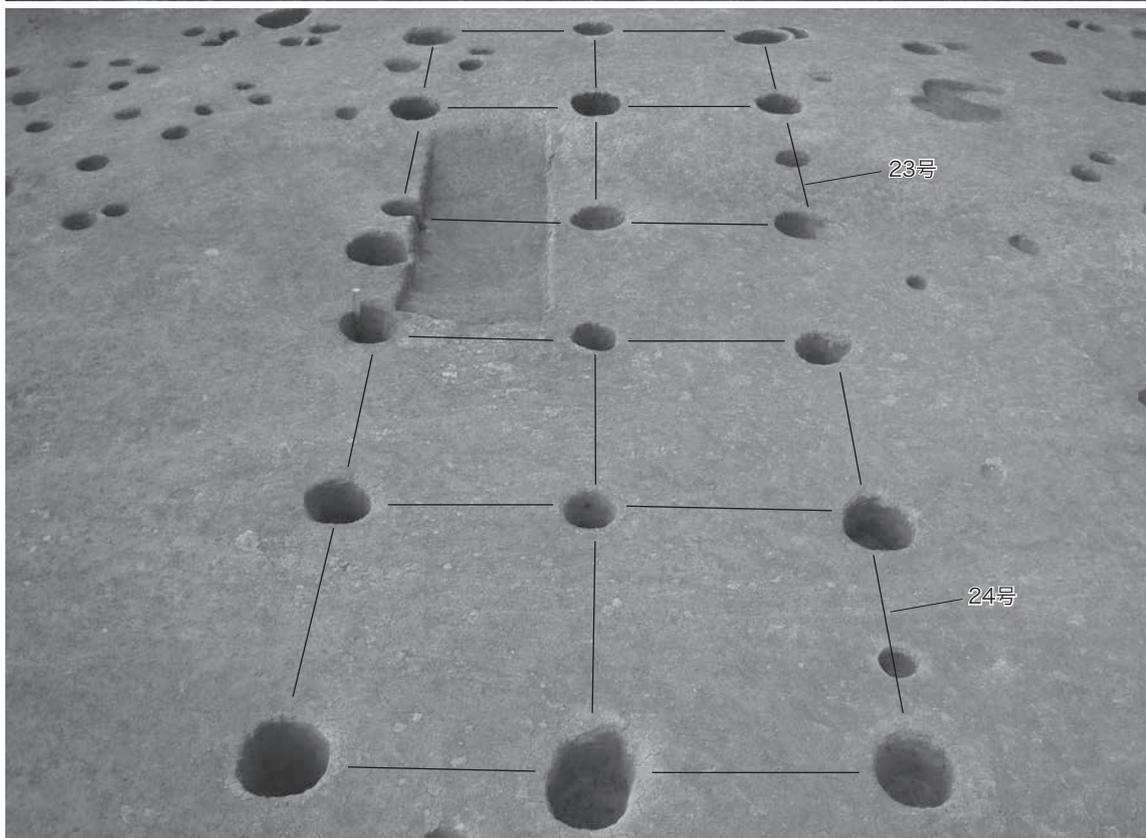
21 19 掘立柱建物跡 (P480 南東から)



22 21・22号掘立柱建物跡 (南から)

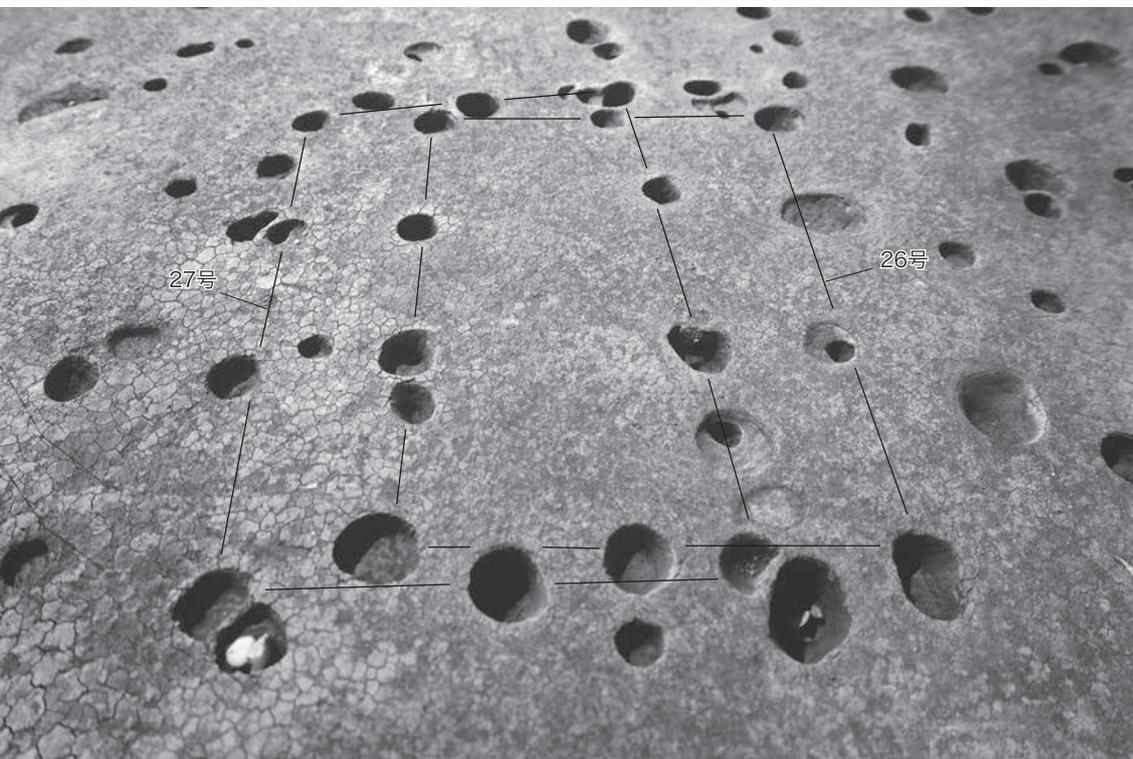


23 23・24号掘立柱建物跡 (南から)





24 25号掘立柱建物跡（南から）



25 26・27号掘立柱建物跡（北から）



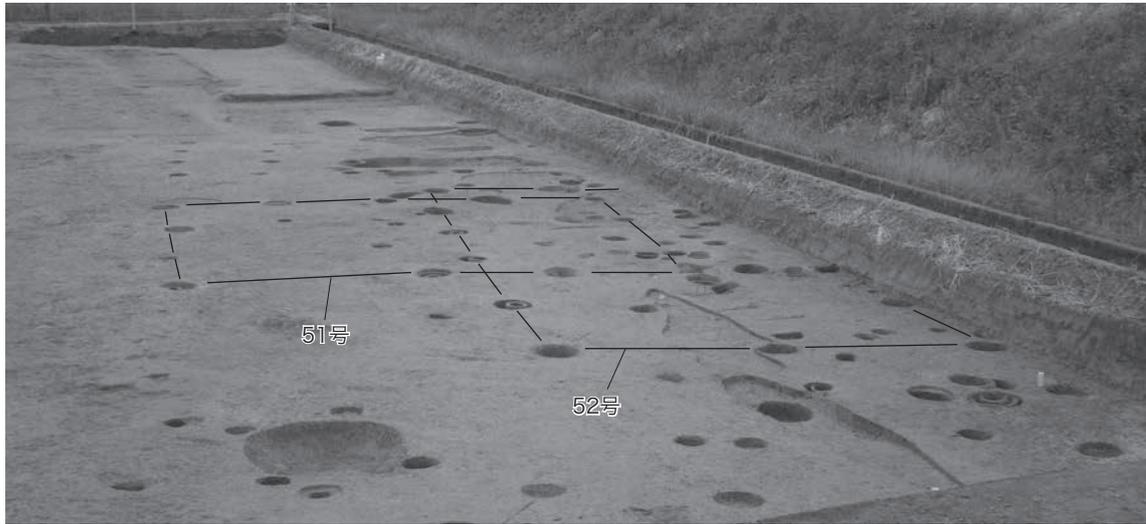
26 28号掘立柱建物跡（南から）

図版 11

27 50 掘立柱建物跡 (南西から)



28 51・52号掘立柱建物跡 (南から)



29 53号掘立柱建物跡 (北から)



30 54・55号掘立柱建物跡 (南から)





31 9号竪穴住居跡（東から）



32 焼土検出状況（東から）



33 10号竪穴住居跡（東から）

34 10号竪穴住居跡竈（東から）



35 11号竪穴住居跡（東から）

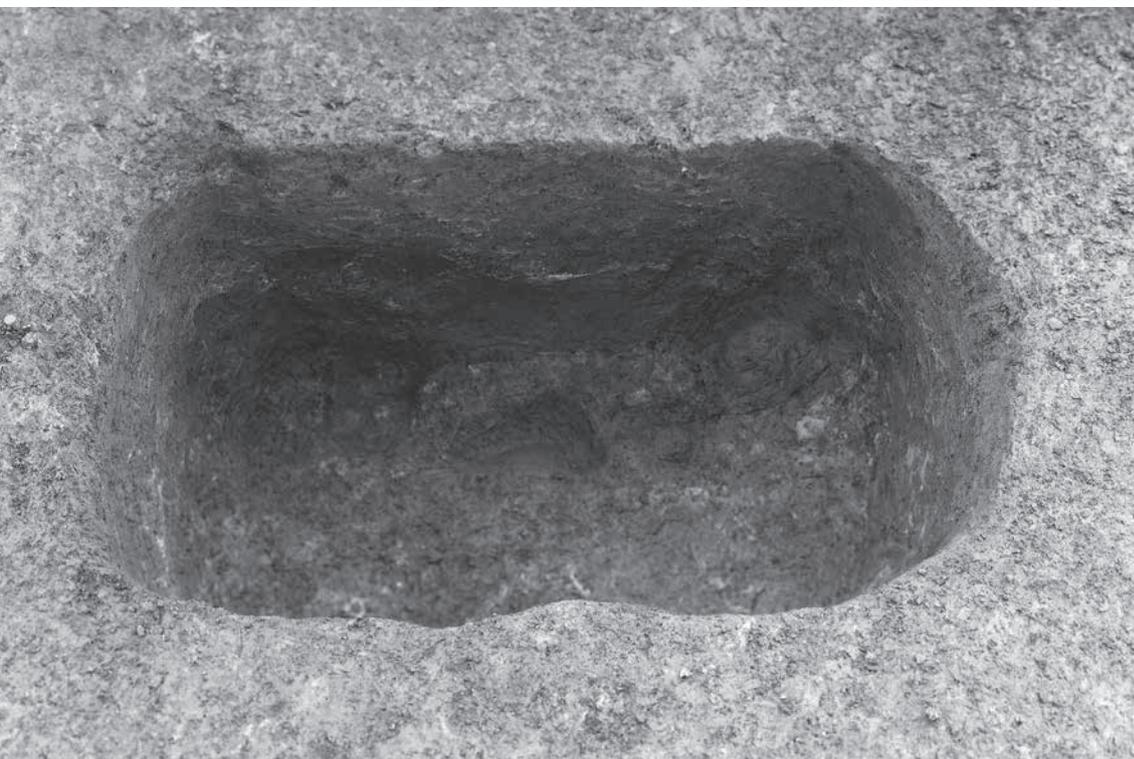


36 11号竪穴住居跡竈（東から）

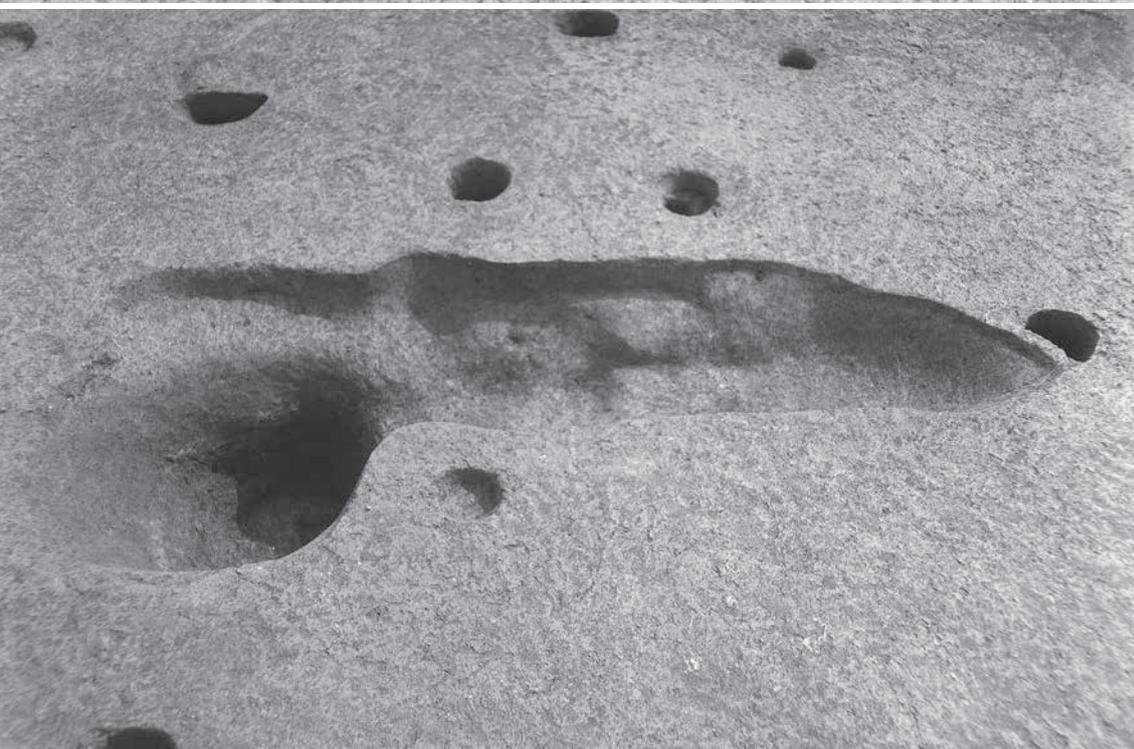




37 1号土坑（北から）



38 2号土坑（北から）



39 4号土坑（西から）

40 5号土坑（南東から）



41 6号土坑（南から）



42 8号土坑（南から）





図版 16

43 9号土坑（南から）

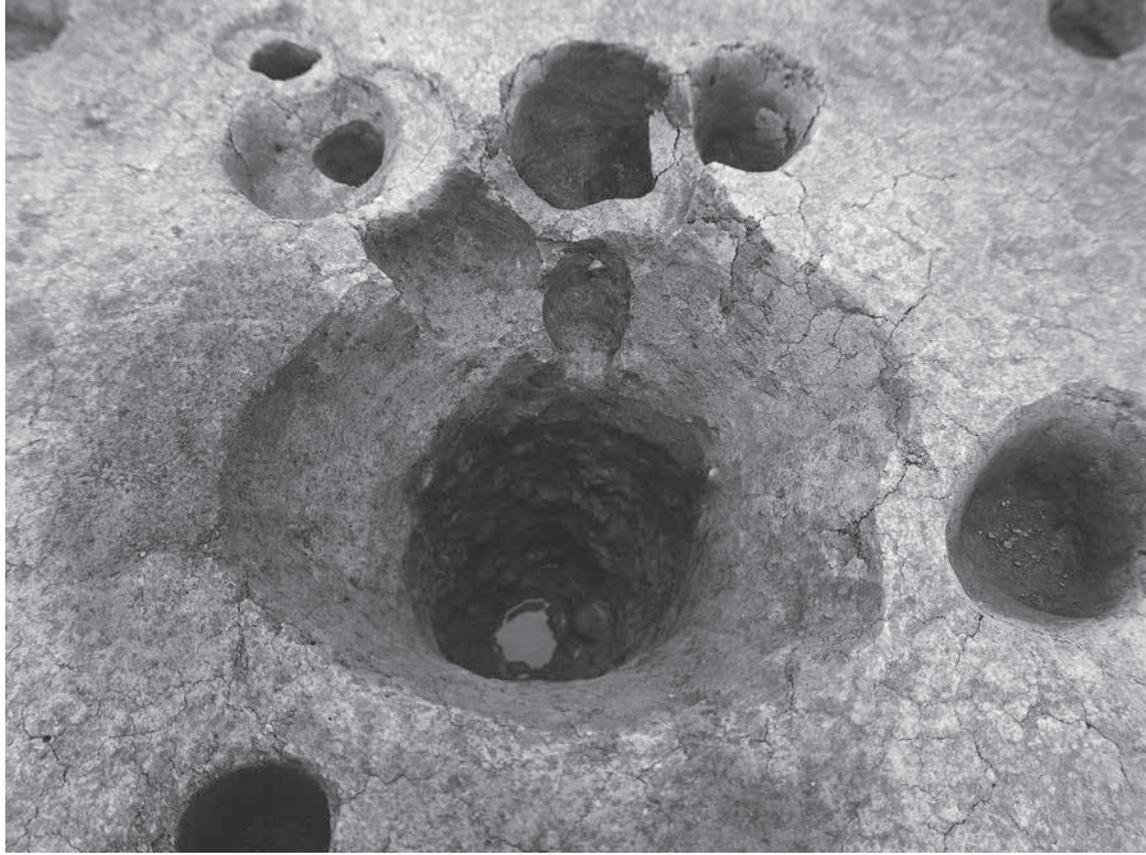


44 10号土坑（南から）



45 11・16号土坑（南から）

46 12号土坑（西から）



47 13・14号土坑（南から）



48 15号土坑（西から）



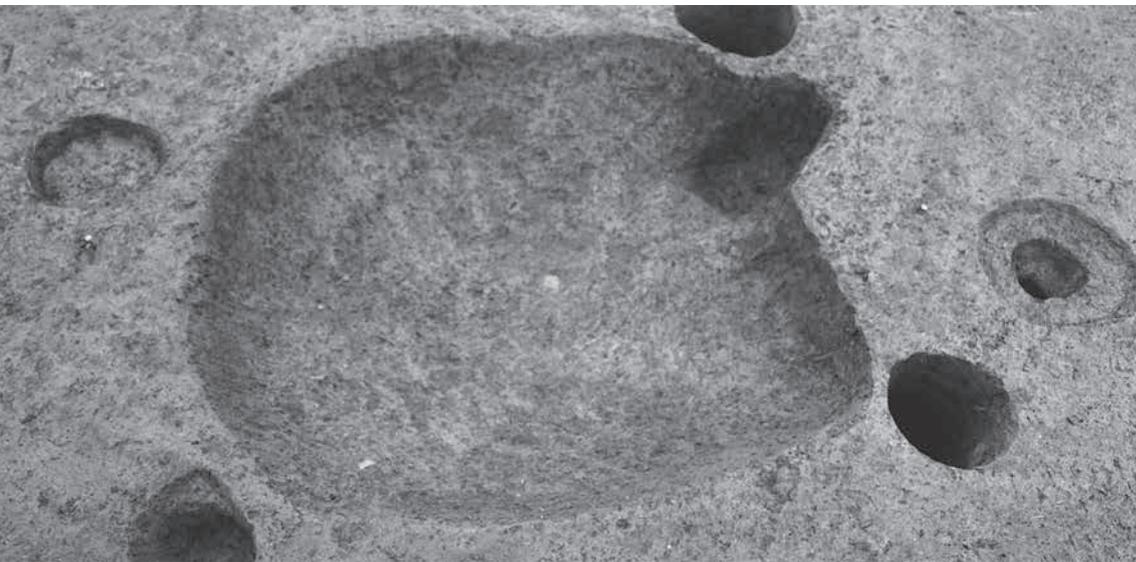
図版 18



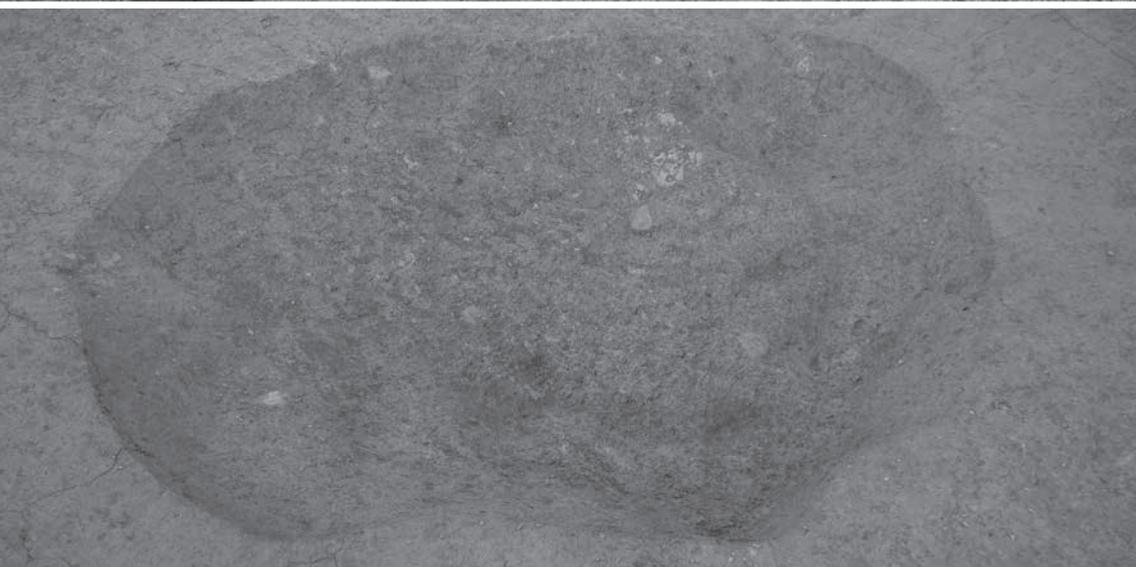
49 63号土坑（東から）



50 64号土坑（北から）



51 65号土坑（西から）



52 66号土坑（南から）

53 67号土坑（西から）



54 68号土坑（南から）



55 69号土坑（南から）





56 5号溝（東から）



57 5(21)・6(22)号溝（西から）



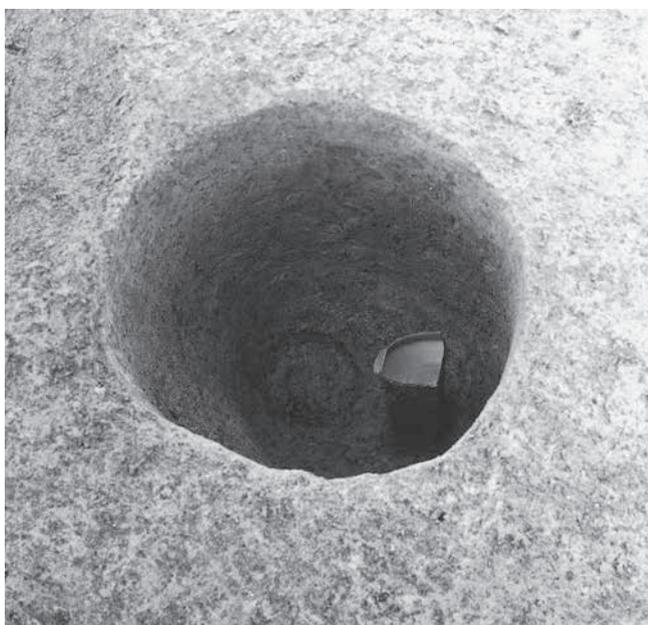
58 5号溝土器出土状況（東から）



59 波板状遺構 (西から)



62 P23 (南から)



60 P21 (南から)



63 P384 (東から)



61 P22 (北から)



64 P396 (西から)



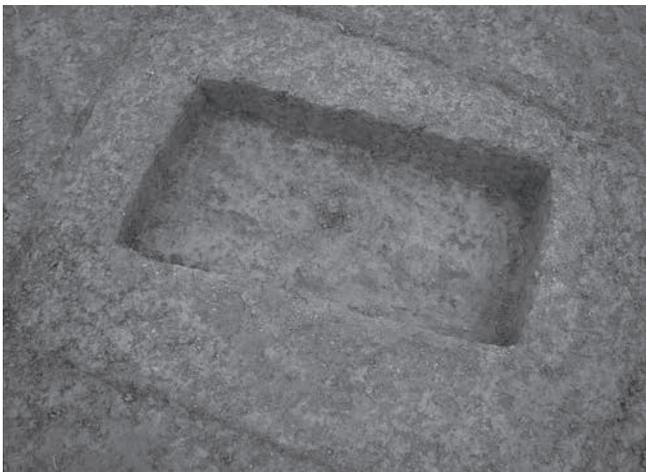
65 12号近世墓（南から）



69 23号近世墓（南から）



66 16号近世墓（西から）



67 17号近世墓（西から）



70 24号近世墓（南から）



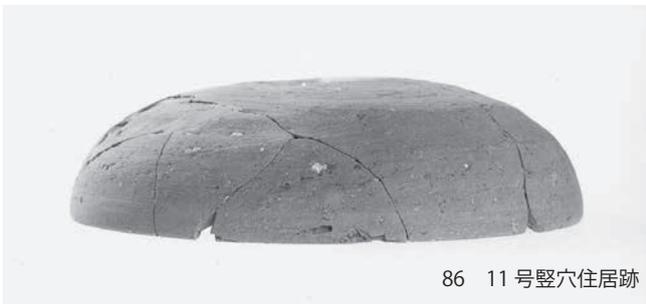
68 21号近世墓（北から）



71 48・49号近世墓（東から）



85 11号竪穴住居跡



86 11号竪穴住居跡



97 11号竪穴住居跡



99 11号竪穴住居跡



108 11号土坑



123 5号溝



122 5号溝



158 P384



140 P396



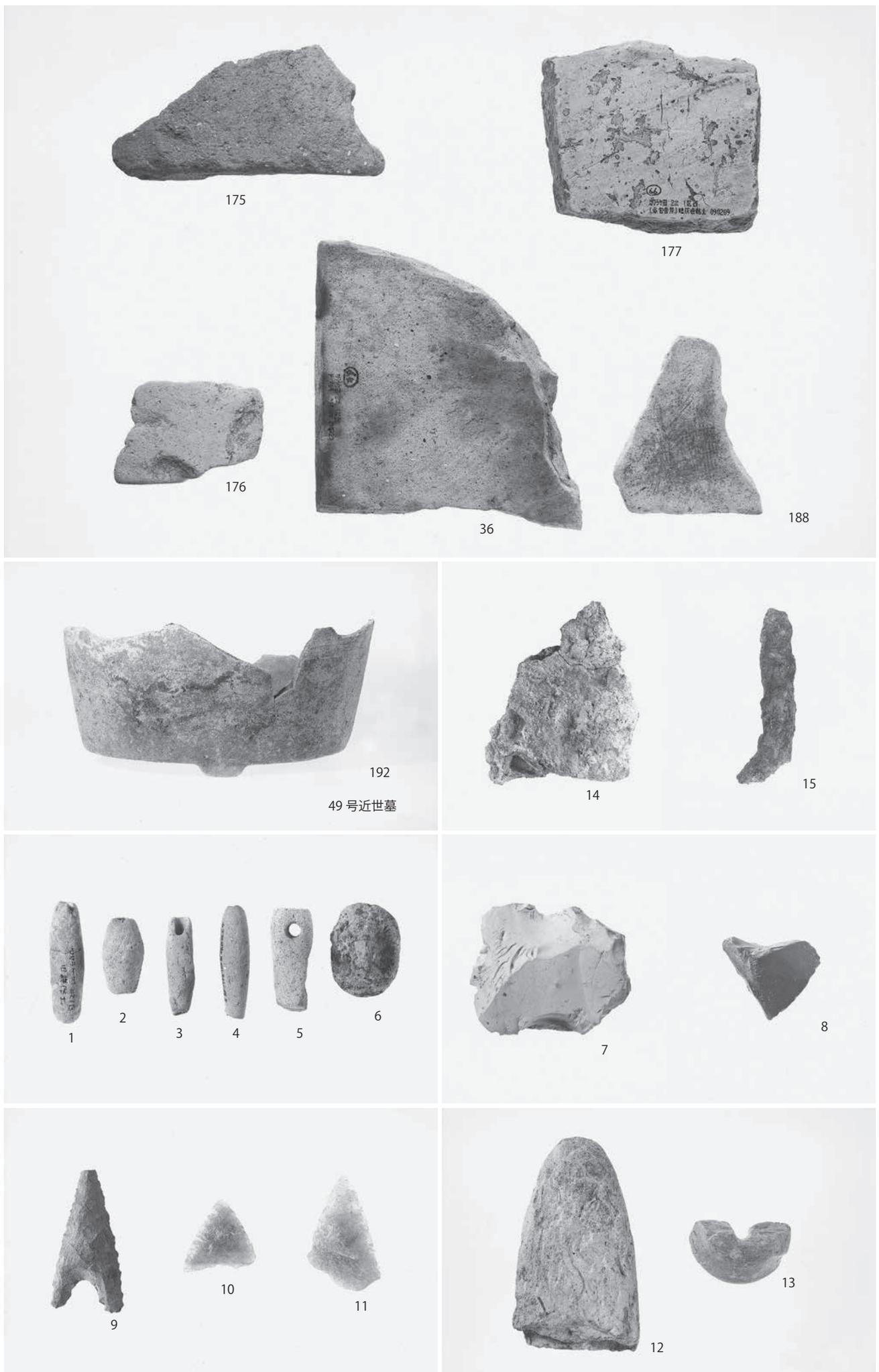
148 P570



166 谷



190 旧耕作土



カワラケ田遺跡 2次調査出土遺物

報 告 書 抄 録

| ふりがな | かわらけたいせき | | | | | | | |
|--------------------|---|---------|------------------------------------|-----------|------------|------------------------------|----------|-----------|
| 書名 | カワラケ田遺跡2次調査 | | | | | | | |
| 副書名 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 東九州自動車関係埋蔵文化財調査報告 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 3 | | | | | | | |
| 編著者名 | 坂本真一・藤島志考 | | | | | | | |
| 編集機関 | 九州歴史資料館 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3 TEL0942-75-9575 FAX 0942-75-7834 E-mail http://www.fsg.pref.jp/kyureki/ | | | | | | | |
| 発刊年月日 | 西暦 2012年3月31日 | | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード | | 北緯 | 東経 | 発掘調査 | 発掘面積 | 発掘原因 |
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| カワラケ田 いせき 遺跡 | ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都郡 みやこ町 あざみ しもはら 皆見・下原 | 40625 | 920083 (町番号) 920072 (県番号) | 33°40'38" | 130°59'45" | 2008.10 3 2011.3 28 | 約12,900㎡ | 東九州自動車道建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | | 特記事項 | | |
| カワラケ田 遺跡 | 集落 | 縄文時代 | 土坑 | 石鏃 スクレイパー | | | | |
| | | 弥生時代 | 土坑 | 弥生土器 | | | | |
| | | 古墳時代 | 掘立柱建物跡 | 須恵器 土師器 | | | | |
| | | | 竪穴住居跡 | 鉄鏃 | | | | |
| | | | 土坑 | | | | | |
| | | 溝 | | | | | | |
| 奈良時代 | 掘立柱建物跡 | 須恵器 土師器 | | | | | | |
| | 土坑 | 石帯 | | | | | | |
| 江戸時代 | 墓 | 人骨 | 寛永通宝 | | | | | |
| 要約 | 7～8世紀にかけての掘立柱建物跡を多数確認した。また、谷の灰色粘土層からは巡方1点が出土した。 | | | | | | | |



現在のカワラケ田遺跡の風景（2012. 3. 12）

| 福岡県行政資料 | |
|------------|------------------|
| 分類番号 JH | 所属コード 2117104 |
| 登録年度 23 | 登録番号 0005 |

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告（3）

カワラケ田遺跡2次調査1（I・II区）

平成24年3月31日

発行 九州歴史資料館

小郡市三沢5208-3

印刷 株式会社 四ヶ所

福岡県朝倉市馬田336



付図 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告3 カワラケ田遺跡2次調査1 I・II区 全体図(1/300)